The 30th Anniversary

日本看護研究学会雑誌

発行30周年記念誌

Japanese Society of Nursing Research

日本看護研究学会

The 30th Anniversary

日本看護研究学会雑誌

発行30周年記念誌

日本看護研究学会

記念誌発刊に寄せて

日本看護研究学会
理事長　山　口　桂　子

早春の候　会員の皆様にはますますご活躍のこととお喜び申し上げます

さてこのたび、本学会の学会誌発行30周年を記念した事業の一環として、「日本看護研究学会雑誌発行30周年記念誌」を発刊することになりました。

皆様もご承知のとおり、本学会は1975年の徳島大学での第１回学術集会開催を皮切りに、今年度第33回の学術集会を開催するに至りましたが、学会誌は1978年に１巻１号が発刊され、本学会の長きにわたる歴史をともに歩んでまいりました。

ここに「日本看護研究学会雑誌発行30周年記念誌」の発刊を迎えることができましたことは実に感慨深いものがありますが、これもひとえに、諸先輩をはじめとする多くの会員の皆様の日々の研鑽のたまものによるものと実感しております。

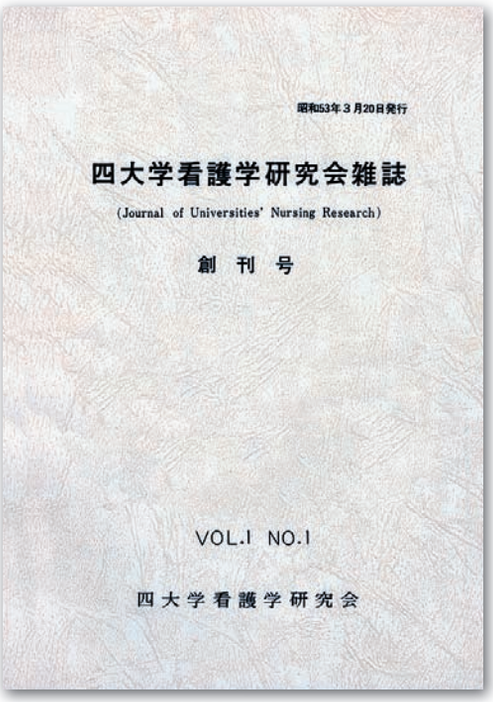
さて、本記念誌は大きく５つの部分から構成されていますが、１．は本学会のこれまでを振り返りこれからを探る２つの「座談会」、２．は「投稿論文の分析」、３．は歴代編集委員長から寄せられた「編集活動」にまつわる内容、４．は学術集会長から寄せられた「学術集会」にまつわる内容、５．資料　と多彩な内容が盛り込まれています。この記念誌を皆様にお送りすることによって、これまでの足跡を振り返りつつ、これからのさらなる発展に向けた第一歩にしていきたいと考えております。

この記念誌発刊のために、名誉会員の松岡淳夫先生、同じく伊藤暁子先生、各歴代の編集委員長・学術集会長の皆様方に多くのご尽力をいただきました。また、計画段階から中心として関わっていただいた前将来構想検討委員会委員長　石井トク理事および同委員会の理事の皆様、田中裕二学会誌発行30周年記念事業実行委員長をはじめとする同実行委員の皆様さらに事務局の皆様には、種々、多くの時間を割いて、企画・編集作業に奔走していただきました。この場をお借りして、心からの感謝の意を表したいと思います。

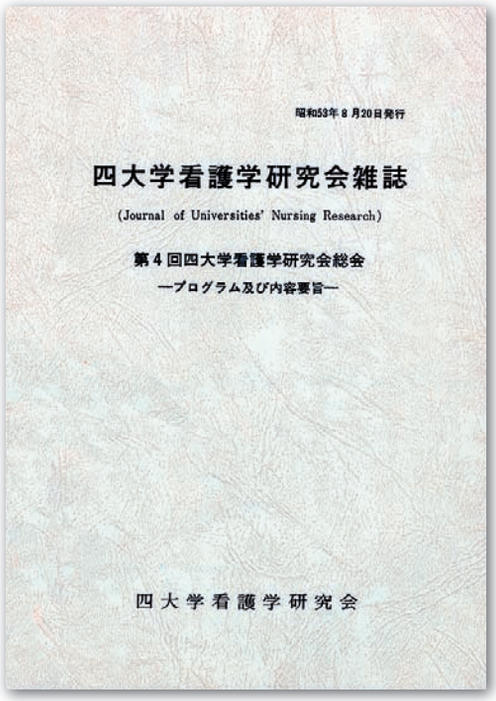
なお、本来は第33回学術集会開催（平成19年７月）に合わせての発刊の予定でしたが、より充実した内容での発刊を期して、今日に至りましたことをお詫びさせていただきます。本記念誌が会員の皆様の今後のご活躍の一助となれば幸いです。

平成20年３月 吉日

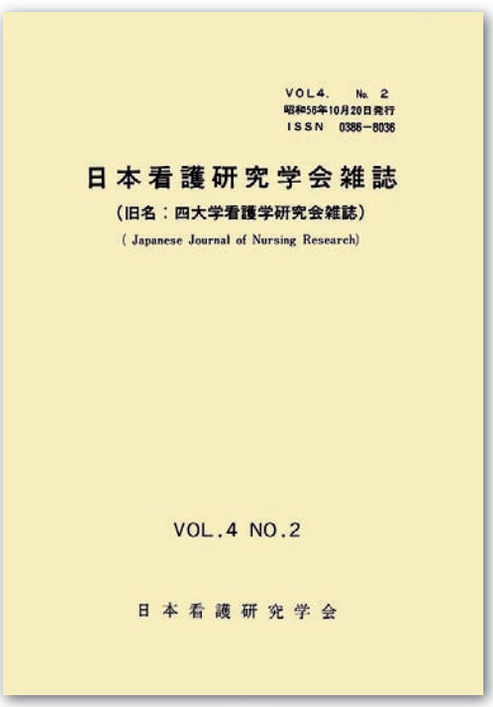
■■■ 学会誌の装丁の変遷 ■■■



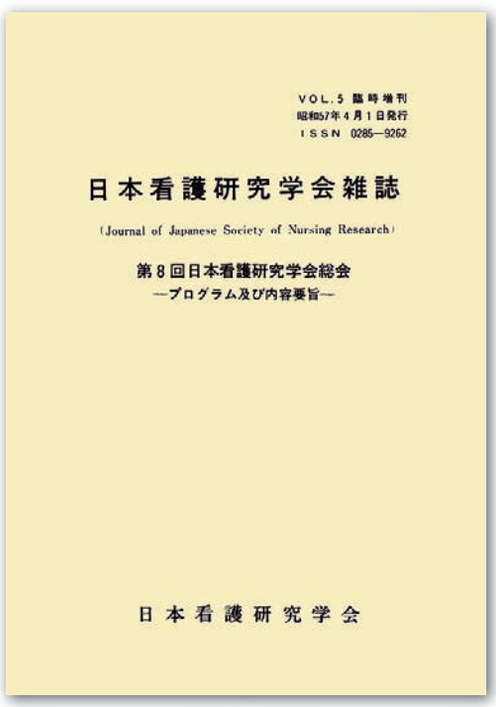
四大学看護学研究会雑誌（創刊号）



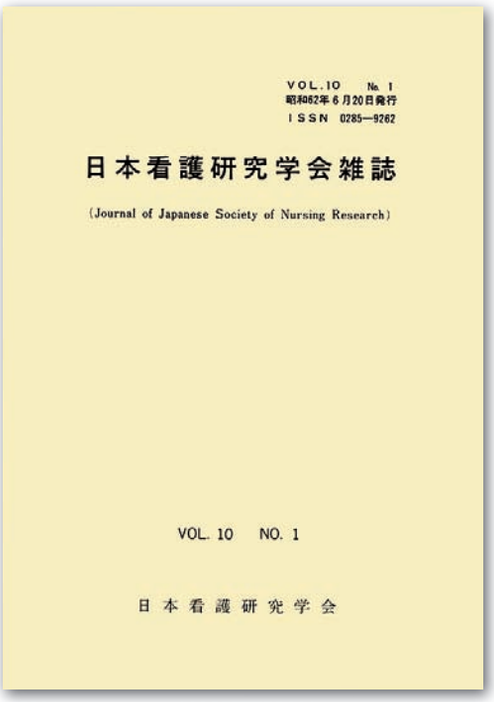
第４回四大学看護学研究会総会（１巻臨時増刊号）



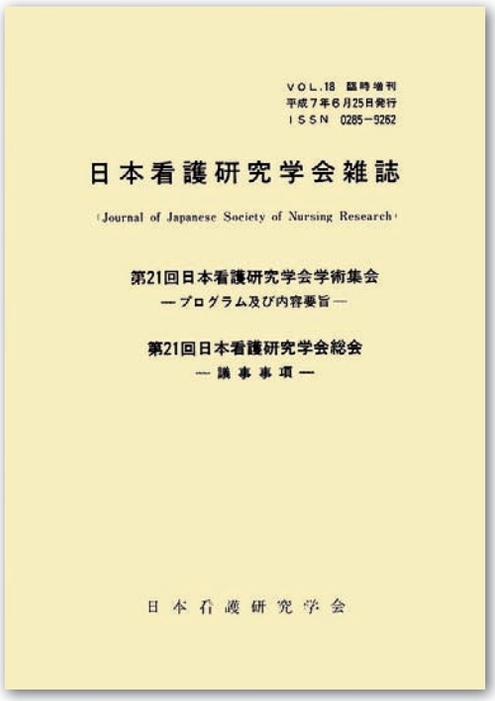
日本看護研究学会雑誌（４巻２号）
（タイトル変更）



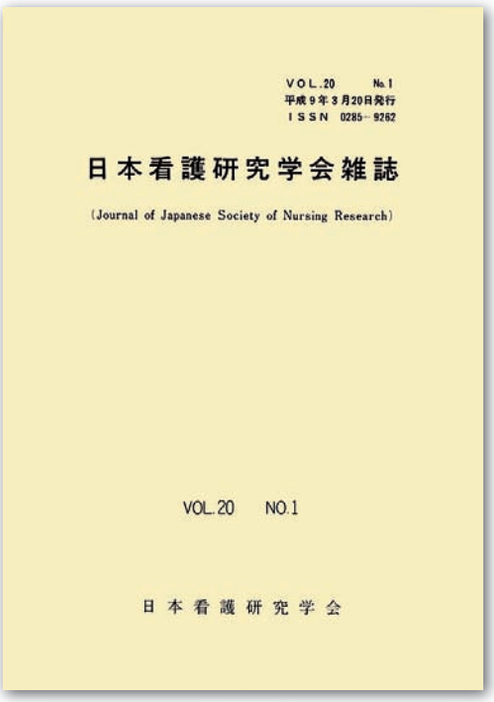
第８回日本看護研究学会総会（５巻臨時増刊号）



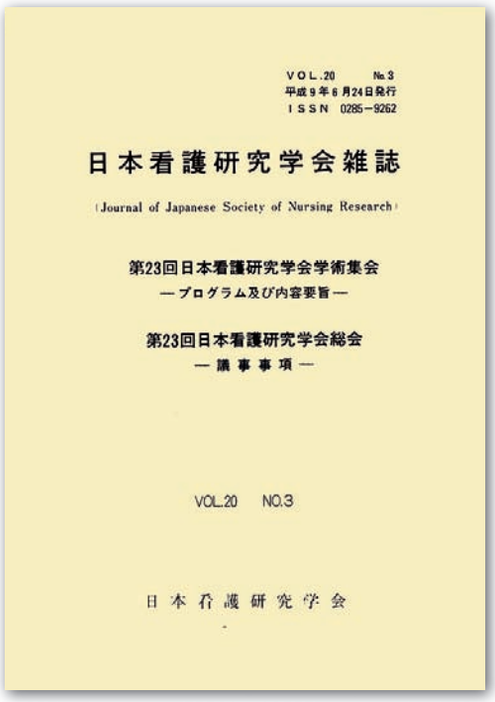
10巻1号



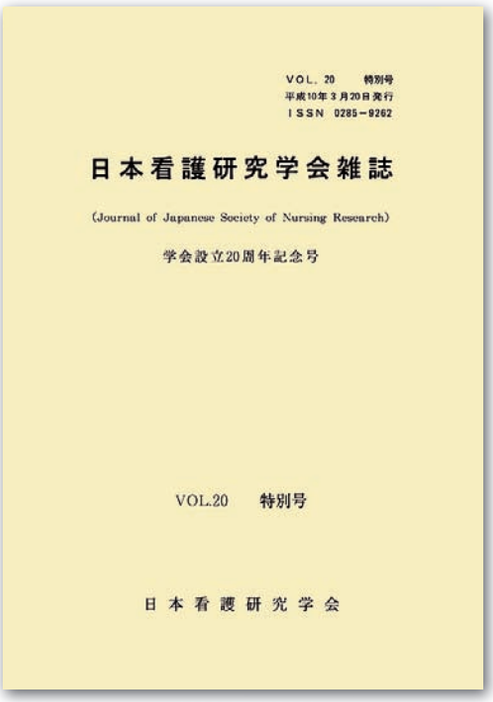
第21回日本看護研究学会学術集会
（18巻臨時増刊号）



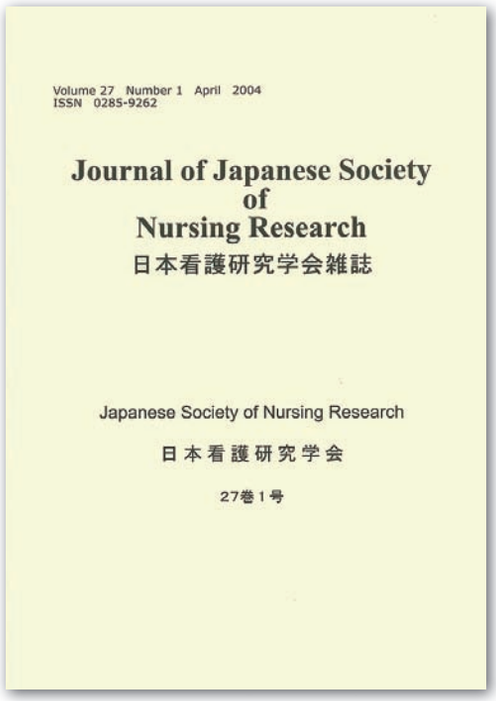
20巻1号



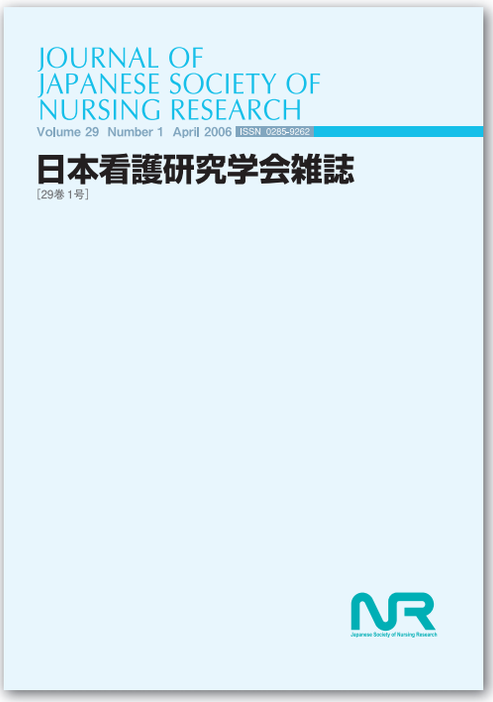
第23回日本看護研究学会学術集会
（臨時増刊号から「3号」に変更）



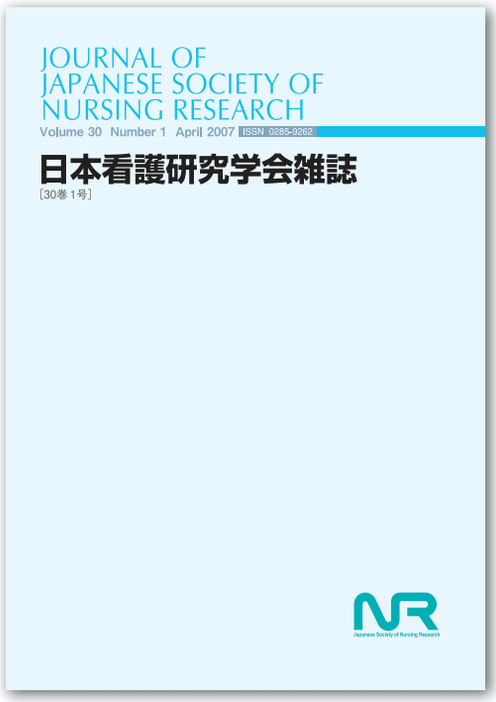
学会設立20周年記念号
（20巻特別号）



学会誌の大きさをA4判に変更（27巻１号）

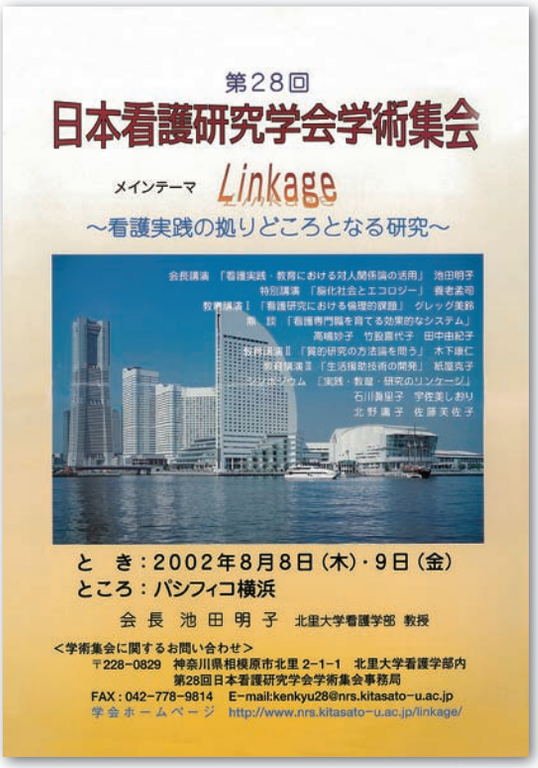


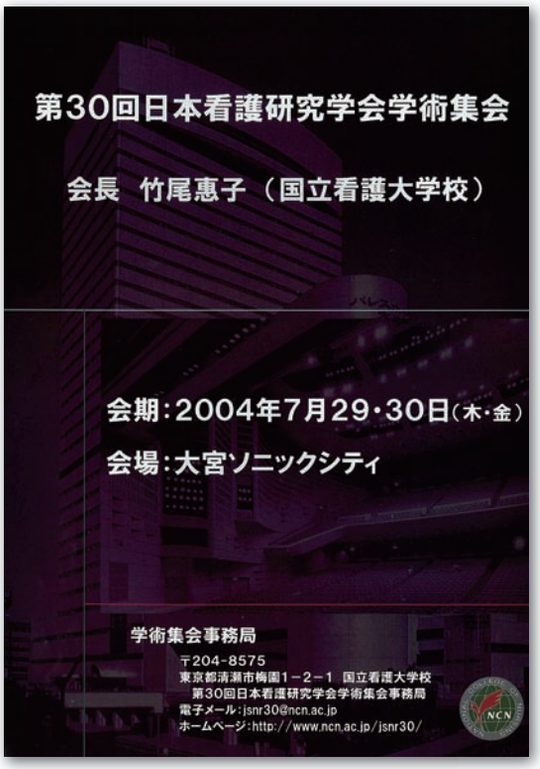
現在の表紙に変更（29巻１号）

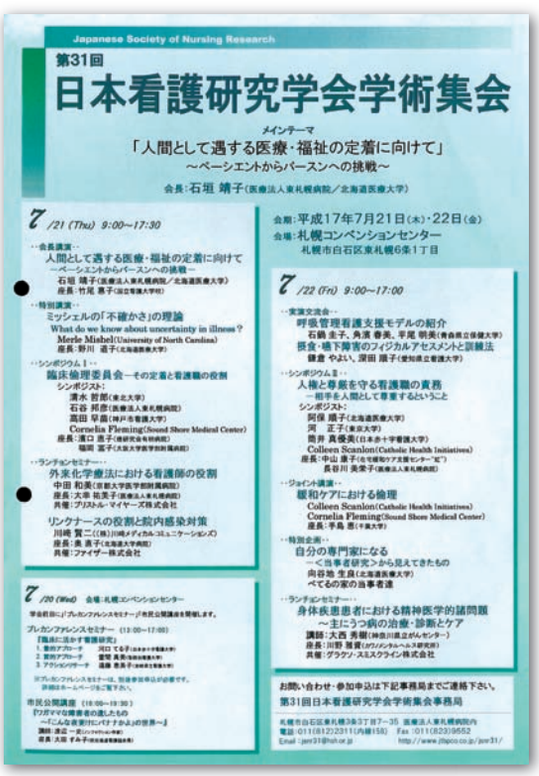


30巻１号

■■■ 学術集会開催案内ポスター ■■■







目　次

巻頭言：記念誌発刊に寄せて　山口桂子理事長 …… i
学会誌の装丁の変遷 …… iii
学術集会開催案内ポスター …… vi
目次 …… vii

1　座談会

●第１部：これまでの歩みを振り返る …… 3
松岡　淳夫（千葉大学名誉教授）、伊藤　暁子（看護教育・現任教育研究所所長）
司会：中野　正孝（三重大学医学部看護学科）

●第２部：これからの展望を語る …… 23
山口　桂子（日本看護研究学会　理事長）、川口　孝泰（日本看護研究学会雑誌　編集委員長）
司会：田中　裕二（千葉大学看護学部）

2　投稿論文の分析

年度別投稿論文受付数と学会誌掲載経過について …… 37

3　編集活動

理事長および編集長・編集委員長 …… 45
歴代編集委員長の思い出
松岡　淳夫：日本看護研究学会雑誌創刊30周年に想う …… 46
草刈　淳子：日本看護研究学会雑誌編集長（1986年１月～1988年12月）を担当して …… 48
玄田　公子：編集委員会の軌跡 …… 50
山口　桂子：学会雑誌と編集委員会の見直しの３年間（平成10年～12年度編集委員長） …… 52
内布　敦子：日本看護研究学会雑誌発行30周年記念誌によせて …… 54
川口　孝泰：日本看護研究学会編集委員での私の活動史 …… 56
査読システムの変遷 …… 58
査読者の人数 …… 59
学会員以外への査読依頼について …… 60

4　学術集会

第１回～第７回研究会　学会創生期について …… 田中　裕二 …… 63
第８回総会　日本看護研究学会の誕生をめぐって …… 石川　稔生 …… 64
第９回総会　初めての招聘講演　マリア・シュナイダー博士を迎えて …… 松岡　淳夫 …… 65
第10回総会　日本看護研究学会雑誌発行30周年に寄せる思い …… 木場　冨喜 …… 66

第11回総会　日本看護研究学会設立時の夢に寄せて …… 伊藤　暁子 …… 67
第12回総会　日本看護研究学会総会を顧みて …… 福島　松郎 …… 68
第13回総会　日本看護研究学会総会の思い出 …… 前原　澄子 …… 69
第14回総会　土屋先生の学会スライド …… 齋藤やよい …… 70
（日本看護研究学会第14回総会会長　土屋尚義先生）
第15回総会　日本看護研究学会の誕生をめぐって …… 内海　　滉 …… 71
第16回総会　日本看護研究学会は「C地区地方会」が担当 …… 玄田　公子 …… 72
第17回総会　日本看護研究学会雑誌発行30周年に思う …… 宮﨑　和子 …… 73
第19回総会　日本看護研究学会総会会長「成田栄子先生」を偲んで …… 井上　範江 …… 74
第20回総会　日本看護研究学会総会のトリを勤める …… 吉武香代子 …… 75
第21回学術集会　人々の健康の担い手としての看護研究を求めて
－北海道地区の承認と第21回日本看護研究学会学術集会の開催－ …… 山田　要子 …… 76
第22回学術集会　広島市で、生活者の視点から看護を再考する
－第22回学術集会のねらい－ …… 野島　良子 …… 77
第23回学術集会　日本看護研究学会・学会誌、その豊かな土壌の中で育まれる …… 河合千恵子 …… 78
第24回学術集会　学術集会を開催して
－のどかに、じっくりと学術の機会に触れる時間をもてた頃－ …… 大串　靖子 …… 79
第25回学術集会　学会発足から25年目の学術集会を担当して …… 田島　桂子 …… 80
第26回学術集会　「新たな世界を切り拓く看護職－Three Ways to Growth」を開催して …… 草刈　淳子 …… 81
第27回学術集会　金沢で開催した21世紀最初の学術集会の思い出 …… 泉　キヨ子 …… 82
第28回学術集会　サッカーワールドカップ2002 &“パシフィコ横浜” …… 池田　明子 …… 83
第29回学術集会　第29回の学術集会開催（大阪）の随想 …… 早川　和生 …… 84
第30回学術集会　日本看護研究学会第30回学術集会の目指したもの …… 竹尾　惠子 …… 85
第31回学術集会　第31回学術集会
～当事者達との協働～ …… 石垣　靖子 …… 86
第32回学術集会　第32回日本看護研究学会学術集会を振り返って …… 松岡　　緑 …… 87
第33回学術集会　第33回日本看護研究学会学術集会を終えて …… 石井　トク …… 88

5 資　料

原著論文目録（1巻～29巻）…… 91
学会誌と編集委員一覧 …… 114
学術集会 …… 122
学会開催地（第1回～第33回）…… 132

編集後記 …… 133

1 座談会

日本看護研究学会
学会誌発行30周年記念座談会

第１部　「これまでの歩みを振り返る」

松　岡　淳　夫（千葉大学名誉教授）
伊　藤　暁　子（看護教育・現任教育研究所所長）

司　会：中　野　正　孝（三重大学医学部看護学科）
日　時：平成19年５月30日（水）
場　所：千葉大学看護学部

○司会　本日は日本看護研究学会学会誌発行30周年の記念事業として、本学会にゆかりの深い松岡先生、伊藤先生にお越しいただき、座談会を開催させていただきます。

座談会は二部構成になっております。この第１部では、「これまでの歩みを振り返る」というテーマでお話しいただきます。第２部では、「これからの展望を語る」というテーマで、別の先生方にお話しいただくことを計画しております。

先生方のお話の中でもご紹介いただけると思いますが、松岡先生は千葉大学教育学部特別教科（看護）教員養成課程において教鞭をとられるとともに、学会協議会、本学会の母体ともなりました四大学看護学研究会の発足当初から、本学会の運営発展にご尽力されました。学会誌の創刊号から７巻まで編集責任者もしていただきました。さらに、1983年の第９回の学術集会において学会長もされており、まさに学会の重鎮であられ、会員の皆様もよくご存知だと思います。

伊藤先生は徳島大学教育学部特別教科（看護）教員養成課程において教鞭をとられ、学会の発足当時、第１回の学術集会からご活躍いただきました。先生におかれましても、本学会に多大なご功績があり、1985年には第11回の学術集会の会長、1996年には第２代の理事長をなさり、本学会の重鎮であられます。

まさに両先生は、この座談会にふさわしい方々ということになります。

なお、進行は私、三重大学の中野が務めさせていただきますが、本日はざっくばらんなところをお話しいただきたいと思います。

■教育学部特別教科看護教員養成課程（特看）における看護学教育の視点

○司会　それでは、テーマにそって、看護から看護学への変遷ということから、話を進めてまいります。先ほど申しましたように、本学会の母体となりましたのは四大学看護学研究会ということになります。すなわち、本学会の歴史的なものを踏まえますと、看護学教育・研究は教育学部から始まったと言うこともできま

す。まずは、教育という視点で先生方にその当時を振り返りながら、準備委員会ができるまでのいきさつをお話しいただきます。

では、松岡先生からお話を賜ります。

○松岡　そうですね。研究学会が出てくる前の私たちの環境といいますか、当時の環境というものが、まだしっかりとは整っていなかったように私は思います。その中で教育学部に看護教育構築を。当時、聖路加と高知女子大学と、そして東京大学の衛生看護学科、こういうところが大学生の看護教育をやっておった。これも雑誌ができる時までにはまだ六、七年の経過しかもっていない中で、教育学部に昭和50年には４つそろって４大学看護課程が成立した。これらが本当は研究学会の出来上がりとし雑誌の発行が整備されたという背景があったのではないかというふうに思っております。どうでしょうね、伊藤先生。

○伊藤　そうですね。私が徳島大学にお世話になったのは1972年から77年の５年間でしたが、当時、松岡先生がおっしゃられたように、教育学部の４大学の他に今先生のお挙げになった高知などの３大学があり７大学といわれ、今から見ると考えられないほど大学が少ない時代でございましたので、私自身も助教授で大学に行きましたときに看護学とは何なのかもよくわからない状況でした。したがって、この学会ができる前は看護学とはと探究するのに四苦八苦していた記憶がございます。本学会発足に伴って、暗中模索ながら何かそこに拠り所があるのではと、非常に学会設立に期待したという記憶があります。

私が徳島大学にいた頃は、皆さんご承知とは思いますが、教育学部での大学教育では衛生看護高校の先生を育てることが目的で、高校の教員免許取得ということでしたので、いわゆる前述した３大学と比べて性格が違うという特色がありました。今、改めて振り返ってみますと徳島大学に在籍した５年間が私にとっては大変大きな収穫だったと思います。そこで学ばせていただいて大きく変わるという体験をいたしました。たとえば、教員養成の大学ですから、他の学科がたくさんあるわけですね。看護ばかりではなくて、福祉・家政・音楽があったり、もちろん物理とか化学とか、いろいろの先生方がおいでになりまして、結果的に学問相互の交流ができました。私は教科教育法も担当しました。今でいう教育方法で、教育学部ではかなり重要な科目ですが…。ところが私は教科教育法って何を教えるかもわからなくて、いろいろの学問分野の教科教育法の担当教官の集まりに出させていただいて、ディスカッションなどもいたしました。それまでの私は、看護学そのものが未熟という劣等感を持っていたんです。ところが他の学問もまだまだ未熟なところがあることがわかりました。物理とか化学の分野では、教官を公募すればドクターを終えられた方が30人も40人も助手に応募されるくらい学問として進歩していましたけど、看護の場合は一本釣りで狙い撃ちをしないと教官が見つからないという時代でしたので、看護学は大変未熟で他に比べ遅れているという劣等感を持っていました。しかし家政学、福祉学も似たり寄ったりだと思ったし、人間を対象にする学問というのは確立するのは難しいということを私なりに実感できたのは、教育学部の大きなメリットだったと思います。そういう意味で今も感謝している次第です。

○松岡　確かにそうですね。私も昭和49年ですか、教育学部の方へ医学部の系統から入りました。そこに何を教えるべきものがあるかなと思って見ても、教えるべきラインがなくて、私は外科系看護学というものの柱になったんです。看護教育って一体看護の中でどうすればいいのかということがよくわかりませんでした。一方、看護の先生方は思い切って、治療法じゃない、看護のトリートメント、いわゆる看護を教えられる。だから医者は要らんとまで言われたんです。そこで私の立場を固執して、たまたまアメリカのいろんな情報を集めてみますと、そこに看護の大学がアメリカで初めて立ち上がったのはニューヨーク大学の教育学部の中で学科ができたわけですね。私はそれに倣うべきだという考え方をその時にしたわけです。しかし、そこで大学たるものが教える看護学が学問としてなっていないんじゃないかと。たまたまその時にあった４大学教育学部の看護学科協議会の中でそのことが問題になりました。最もそれについて熱心だったのが千葉大学の村越先生、熊本大学の山元先生、それから徳島大学の福井先生、そして弘前大学の川上先生。川上先生

は少しお若い感じだったですけど、随分熱心にその問題を、看護たるものはというところを出発点にして学問審議をしようという雰囲気ができました。そこへ西も東もわからない私が入りまして、医者の５人が「学問のないところに大学はない」というような主張を強くして、ここで看護学を構築しようじゃないかという気運を醸成したように思います。それが結局、看護学部あたりからすると、あまりいい雰囲気ではなかった。看護学部というよりも、看護界があまりいい雰囲気じゃなかったということで、相当私なんかは迫害されました。福井先生は武者修業と称して東京まで来られて、看護の論客に喧嘩を売っておられました。そんなような雰囲気の中で、教育学部の看護学科が、いわゆる看護研究学会を作ろうという気運ができてきました。それに続いて、学問を体系化するには学会誌をと、とんとん拍子の話が進んだと思います。

○司会　まあ、そのようなご批判もあったようですね。教育学部特別教科看護教員養成課程、いわゆる特看ができるまでは、主として高知、東京、聖路加が大学としての看護学教育を担ってきましたが、これは衛生看護学科でした。先生方のお話を伺いますと、やはり特看が教育学部の中にできたということで、看護学が教育学といろいろな面での接点ができ、医学や他の学問と広くミックスして、いい形で看護学の発展の基礎ができたと考えていいような気がいたします。

■特看における看護学教育の意義と成果

○司会　今、お話しいただいたような点で、初期の看護学教育には、いろいろご苦労があったかと思いますが、特看における教育をとおして、多くの学生が育っていったということになりましょう。先生方の看護学教育に対する思いや展望にそって、特看の卒業生は期待どおりの研究成果をあげていかれたと思いますが、いかがでしょうか。

○松岡　最初は教育学部の看護学科から出る学生は、卒業してすぐに病院とかに勤めますと、一体何を習ってきたのと言われるような学生だったんですね。学生というよりも看護婦さんですね。しかし、数年のうちにその中で、いわゆる分析的な目といいますか、職場を自分で眺める目ができたといいますか。もう一つは患

者さんに対する看護のやり方というものを自分で組立て、考えていくというような立場が築かれて、私たちが実は狙った、教育の成果が徐々に上がり始めました。大体二、三年であちこちの大学病院などの婦長さんから、「いい学生さんを紹介してもらった」という表現が聞かれてくるようになりました。そのように、教育の成果を考えています。いかがでしょうね。

○伊藤　ええ、私は徳島に行くまでは東京都立の看護専門学校の教務主任やっておりまして、ご縁があって徳島にお世話になりましたが、私自身が大学の教官に応募するための書類を準備しますね。今にしてみれば学問なるものがよくわかっていませんでしたので、何でもかんでも業績だと思って、とにかくいろいろ書いていましたからそれらを公募書類として提出したんですね。当時学科主任としておられた住友教授は、この先生は早く亡くなられたんですが、私を助教授で採用するべく大変ご苦労されたときいております。教授会で住友先生はいろいろ主張してくださって、幸いにして助教授で採用していただいたそうです。そのため着任後の私に住友先生が、研究しろよ、研究しろよとおっしゃったんですね。そして、君の出した業績の中で学問として認められるのは２つしかないと言われたんですよ。あとはすべて資料にすぎないと。私にとってそれがすごい衝撃だったんですね。それで、住友先生に励まされて、後には福井先生の下で本格的な研究活動をすることができました。また学生の方が私よりも学問がわかっていた様で、たとえば看護の独自性とか専門性とかを考えるディスカッションのテーマで看護の

学問体系に関しての私の基調講演に対し、学生から、「先生の看護学はおかしい」と反論されました。「学問というのは研究が蓄積されて徐々に形成されるはずなのに、なぜ先生の学問には枠組があるんですか」と言われて、学問について学生に教えられましたね。

つまり、徳島大学は総合大学なので学生自身が他の学問の人と日常的に付き合っていたこともあるとは思いますが、彼女らの方がずっと学問に対する目を持っていたと思います。だから、「先生はこの研究は看護学の研究じゃないとか、この研究は看護学の研究だとか、なぜ今の時点で言うことができるのか、後世の人が評価することでしょう」と、鋭い指摘をされました。それほど学生は優秀だったと思いますね。

当時小島操子さんが講師でいらしたのですが、小島さんも私も臨床を大事にする考え方でしたから、将来看護のリーダーになるには若い時に臨床の現場で泥まみれになれと主張していました。ですから、結構卒後に看護の現場に行ったんですね。今その人たちが現在の大学の教授になって、実質的に看護界のリーダーになり、活躍している卒業生が大勢出てきて、とても嬉しく思っています。しかし一方では看護高校の校長先生には、徳島大学の卒業生は採らないと言われたんですよ。衛生看護高校の先生を育てているのになぜ臨床の看護婦を育てるのかと言われましたし、また衛生看護高校は人間教育か准看護婦教育かと議論になったときに、やっぱり人間教育だと主張したら、学校長さんから責められたという記憶もあります。教育学部での教官体験は私にとってはメリットであると共に、一般の看護大学では体験しない辛さもありましたね。でも、おかげさまで卒業生は臨床にかなり行ってくれましたので、臨床に強く研究も臨床に密着しています。例えばある卒業生が修士コースでの睡眠の学習をしている時、彼女は患者さんをイメージして話を聞いていたのに、臨床経験のない人はモルモットやネズミはどうだろうかという発想でびっくりしたと言っておりました。臨床に密着した卒業生達が今はいい仕事をしてくれていますので、私は結果的には間違ってなかったと思っております。

○司会　逆に教育学という枠組の中で考えられて知り得たものもあったということですね。

○伊藤　そうだと思います。

■学会の礎となった特看における卒業研究

○司会　そこで、教育という視点でわが国の看護学教育が変化し、また、学生の研究という視点もしっかりしてきたということでしょうか。卒業研究などではやはりこれまでのわが国の看護研究にはない流れがでてきたということですね。

○伊藤　ありましたですね。

○松岡　私の卒論というときは、私自身がいわゆる看護の臨床的な研究、もしくはただ作文的な研究というような評価をしておりました。あれではだめなんだ。お前たち、これが研究論文だと思うのかというところから卒論指導を始めたんです。そこにはいろいろ客観性、再現性という、医学部では当然の問題ですけれども、これを学生によくしゃべって、卒論を始めました。１年かかっての卒論ですが、私の指導した学生には定量的実験的なやり方を指導できたと思っております。

褥瘡について、ずっと押しつけられ血液の循環が悪く、蒸れることでできるんだというようなことを体圧や湿度・温度について分類して調べた結果をみて、褥瘡研究というものを学生に定着させてきたと思います。それから看護の中にある手指消毒法、もしくは皮膚消毒法についても実際のやり方の中でそれで消毒ができているかどうか実験的に判定していく。細菌学的テーマも起こし、それを学生に分けて行わさせたり、また学生もそれを大変面白がって、更に展開し細菌学的な実証法を色々な場面で考え出していく者も出て、いわゆる卒論を中心にして私の中では学生に実験的な、もしくは測定的な研究を広げていったんです。その研究が結構雑誌に載りますと面白がられたんです。自分の考えているような問題をもっと定着させていくにはどうしたらいいだろうかと。４大学研究学会の発表にも出させていたんです。そうしたら、あちらの大学もこちらの大学でも似たような形でディスカッションのできる研究が出てくるようになりました。こうなると系統的に何か貯めていくべきではないかというのが、村越さんなんかがすごく主張されて、学会が雑誌を持たないとは何事だというのが皆さん、３回目か４回目ぐらいにがんがん言われましたね。そういう過程

がありました。

○伊藤　そうですね。だから先生方がかなり学会の兆をつくる土壌作りをされたという事実があったと思うんですね。私は、今でいう保健師、当時は保健婦ですから、私自身の研究テーマは地区の高齢者に関するものでした。カメが産卵するので有名な日和佐の保健所の婦長さんと一緒に研究させていただいた。日和佐地区全体を研究フィールドにして、いわゆる社会学的なアプローチなんですけど、家庭訪問し栄養の問題から血圧測定と、今でいうphysical assessmentに近い形でデータを集める研究をやったんですね。で、教授の福井先生も協力してくださって、日和佐地区の住民の健診もしましたし、とても有益だったと思います。当時は、あれは医療行為だといって保健婦は血圧測定もしない時代だったんですよ、今は素人でもしますけど、それで、私が測った血圧と福井教授が測った血圧値を比較して検証するなどしました。そして家庭訪問時に保健婦はきちんと血圧測定をすべきで、一週間も前の血圧値による保健指導をすべきではないと、公衆衛生看護学会で発表したんですけど見向きもされませんでした、当時は。今ようやく認めてくださっているという感じなんですけど。

実験研究で、足浴をしたときの垢の落ち具合の研究もしました。医学部の微生物学教室をお借りしてやらせていただいたんですね。被験者は学生ですが、学生の足の測定してやった結果は細い人の方が速く落ちるんですよ。最初の３分が勝負なんですね。あとは足の太さによって落ち方が違うというのを証明したら、微生物学の教授が「看護学って面白いね、何やったって研究になる」と仰言って、いろいろと協力して下さいました。福井先生が微生物学では細菌を裸にして裸にして裸にしなければならないほど研究は進んでいると。ところが、看護学はジャングルだ。何やっても研究素材になる、こんな面白い学問はないって仰言ったんですね。私なんかはそれを聞いて逆にびっくりしたというぐらい学問に対する考えなど幼稚だったと思います。でも私自身は研究に対しての基本姿勢や方法をここで鍛えられたなと感謝しております。

○司会　今でいうEBNということでしょうか。それを実証的に展開していくということですね。

○伊藤　そうです、そうです。

○司会　研究をきちっとやっていかなきゃいけないという意識があり、学生自身も教育学部で育って、他の分野のこともよく知っているということで、卒論の研究に反映されたのですね。

○伊藤　ええ、当時たまたま看護診断に関する卒論研究をした学生達が福井教授の指導を受けたのですが、その成果が1978年に雑誌にとりあげられておりますが、本当によく書けていますね。

福井先生が提唱された中でとても興味があるのは、「看護診断学と看護学を成立するためには、その基礎となる莫大な知識を看護以外の分野からも得ることができるし、意見を聞くこともできる。しかし、体系づけの過程は看護出身者によって行われるべきであることを強調したい」というくだりです。ここで福井先生がおっしゃっているのは、看護学は閉鎖的ではなくて、いろんな学問分野からの示唆を受けるべきで、その上で看護学の研究が体系づけるべきという深遠な考えを示していると考えます。約30年も前に私は素晴らしい指摘をなさっていることに改めて敬服しています。

■総合科学として看護学の位置づけ

○松岡　結局、私も看護はいわゆる総合科学であるということを絶えず申し上げたと思いますね。それは教育学部にいるから色々な学問の知恵が出てくる。総合科学として看護がくみ上げるには、看護の骨が必要。そこで私は看護の工学的な構造ということを主張して、私は看護工学というものへ向けての一歩を踏んだような気がするんですよ、自分の頭の中では。ＥＲ≒ｆＥ（Ｎ・Ｃ）という構造式を立てていろいろしゃべっていたんです。福井先生の看護診断というものが当時はnursing processということがやっと主張されるようになっていた中で、アセスメントという言葉が、nursing assessmentが主要であるということが看護の中では指導されていました。このnursing assessmentというものが一体何であろうかというものが私は（Ｃ・Ｎ）の関係を意味していると考えたんです。それを福井先生に、「お前、向こうの言葉でnursing diagnosisという言葉があるようだよ」といわれて、そこで向こうの

Medical Surgical Nursing（1970）を調べてみたんです。そうしたら、nursing assessmentの項目の中に、nursing diagnosisと、小さい字ではありましたが書いてありました。それで、やっぱりあるじゃないかということで福井先生と話合ったような状態でした。そこでNeed判定とCareの適合効果の関係構造に力学的な構造というのが入れるぞという考えを私は確信したんです。

それが結局、看護学部に統合されたときに看護管理というものに入っていったわけですけど、そういうこともまだまだ先走りの時代で、研究もやみくも、そこにある問題をいかに事実を事実として客観的に確認するかということにみんなが走っていたというような感じですね。

○伊藤　そうですね。私が1945年、コロンビア大学に留学したときにnursing diagnosisという言葉を使っていたことに天地が引っ繰り返るほどびっくりしました。その頃私たちは日本に帰ってきてから看護診断の導入と、日本に早く多くの大学をそして大学院を作らなくちゃいけないとある座談会で強調しました。そうでないと国際看護に遅れをとると言って。ところが若いナース達が生意気なことを言われる時代でしたからね。修士、博士課程もでき、看護診断も定着した現在、考えられない状況でしたね。

○松岡　だからnursing diagnosisと言えば医者の云う言葉になっていました。医者の専有していた診断という意味ですからね。

○伊藤　それで生意気と言われましたね。今はもう常識になっていますけどね。そのくらい学問に未熟で、学問はかくあるべきと将来を見すえた先生方の主張が排斥されるような時代でしたね。

○松岡　はい。

○伊藤　でも、４大学が看護学研究会の中でそれが具体的にアピールできるようになったということが本当に素晴しかったと思いますね。まだまだ看護学は何か暗中模索の時代いわば黎明期ともいえるそんな状態でしたね。

○司会　まさにそのとおりです。しかし、そこで育まれ、今の学会に脈々と受け継がれているということで、大きな意義があるということになりましょう。

■四大学看護学研究会の発足と研究会雑誌の創刊

○司会　今までの話にも出てまいりましたが、研究会準備委員会は、先ほど松岡先生から、とんとん拍子で進んでいったようにお伺いしました。1975年に第１回四大学看護学研究会が発足し、先ほどお名前が挙がったいろいろな先生方のご協力もあり、それで出来上がったというところでしょうが、何かご苦心なさった点などもお話ししてください。

○松岡　それは私ちょっと文章の中に書きましたけどね、山元先生のところで第３回の研究会をやった後、その前々年に徳島大学の眉山の頂上でやった第１回の研究会の時の内容を、あれは看護教育だったかで編集してくれたんですよ。

○伊藤　はい、特集でしたね。

○松岡　特集で。そうしたら、それを山元先生や私たちが見て、「おい、こんなものをよそに出させてたんじゃだめだ、おれたちで作らなきゃ」という話がここで出てきた。その話が出たのは、実は女性の先生たちに言うと刺激しちゃうから、もうちょっと言わないでおこうという意見もあったんですよ。そうしたら、木場先生が、これはやろうじゃないかと。雑誌社に売り込もうが、自分たちでやろうがいいじゃないか、やりましょうよということになりました。それで、その翌々日にあった協議会の時に私たちが話を出した。研究学会で雑誌を出そうよと。そうしたら先生方が、そんな余力があるんですか、慌てる必要ないんじゃないですかというから、責任は私が持つなんてことを言って。

○伊藤　先生がね。

○松岡　ええ、がんばっちゃったんですよね、出しましょうと。そうしたら、川上さんはあまりはね上がらない方がいいんじゃないのと言われたけど、まあ、しかし、やっていいということになればやりますと言って、そこでどっちかというと話があったように思ってるんです。

○伊藤　そうですね。

○松岡　まだ、研究学会の理事会というような役員会がほとんどなかったような。

○伊藤　ええ。振り返ってみますと、徳島市の眉山山頂の保養所で、浴衣がけで議論しながら、学会設立にという夢をみんなが語ったという記憶があります。その時の夢の１つが、まだ学問として未熟だから若い人を育てる学会を作るべきだと。それから、他の学問分野の人を排斥しないで、もっとオープンな学会にしよう、これを学会の特徴にしようという共通認識ができたような気がします。その考えが今も連綿と伝統として生きているのではないでしょうか。

○松岡　それともう１つ大事なのは、絶対学会でボスを作らないでおこうという。

○伊藤　そうそう、そうでした。ボスを絶対作らない。

○松岡　絶対にカリスマや会の権威者を作らない。みんなが平等に。

○伊藤　だから世話人にしようということになった。

○司会　その辺が世話人といった言葉になるのですね。それで、1975年には看護学研究会が発足していますが、その前に、先生がおっしゃられたように、こういうおいしいことをよその雑誌に出すのは何事かみたいなところで、四大学看護学研究会創刊号にも結びついていったというわけですね。

○松岡　はい。それでいわゆる学会に公募して、学会を開いた内容の中から第１巻の創刊号ができたような気がします。ちょっと内容を憶えていないけれども。

○司会　それで、第１回の四大学看護学研究会において、ボスを作らないで世話人という形を置こうという基本的な方針で、会則、組織、そして事務局だとかをきちんとしてきたというようなことだと思います。その当時、先生方が何か思い出になるようなことはございませんか。

○松岡　そうですね、どっちかと言えば、周りからはあやぶまれたんじゃないのかな。大学にそういうものを作りたいと思って考えてみたけれども、会則を作るにしても参考になるものがないんですよね、看護のが。

○伊藤　ないんです。名実ともに初めてですから。

○松岡　医学部の中で自分が所属していた学会の会則だとか、そういうものを拾い集めて、らしく作ったといいますかね。そして、それを各４大学の世話人の先生方にお配りして添削していただきながら作りました。いざ出してみたら、あんまり特徴のあるものにはならなかった。まあ会則ではあるけれども大分欠陥の多いものだったように思いますね、今から考えると。でも、曲がりなりにも会則ができたということは言える。

まあ事務局を千葉に置かせていただいたということが、どっちかと言えば勝手にやれたというか、こうだろうといって進められたんですね、先生方のお許を得ながら。

○伊藤　私は当時助教授で医師の教授がおいでになられたわけですが、看護職としては私が一番上だったんですね。そういう立場で徳島大学として学会設立に寄与しなければならなかったのですが、松岡先生が事務的な整備を含め縁の下の力持ち立場で、体制を整えていただいたとことに、当時も感謝しておりました。あの基盤作りが最初の段階で非常に大事だったんです。苦労を買って出てくださったという印象で、先生は孤軍奮闘の感じでしたよね。

○松岡　孤軍奮闘な形で、突っ走りが少し多かったのではと今反省していますけど、事実、これを会員の中へ出して話し合ってもこうしかならないだろうと思ったんです。というのは、おっかないですよね。一つのこういう組織を作って。だから私が責任持ちますとか、大丈夫ですとか何とか言いながら強引に引っ張ったような気がしますね、当時は。

それで、創刊号を作る前には、査読というようなややこしいことはしていません、はっきり言うと。その前の時には、卒論発表したようなものを整理して、投稿してもらった原稿を一応学会で発表して討論されていることだし、指導教官が添削指導している内容だからこれでいいじゃないかと思って、それを５本か４本くらいか入れて学会雑誌を作ったようなことで、進んだような気がします。

○伊藤　それで先生、確認なんですけど、４大学協議会というのがずっと続いていましたよね。

○松岡　はいはい。

○伊藤　あれとセットみたいな形でやっていましたね、最初の学会は。

○松岡　そうですね、はい。

○伊藤　協議会と離れて学会が独立したのはいつごろなのですか？多分、私が徳島大学を辞めてからだと思いますが……

○松岡　協議会から別れて独立したのは、えーと、石川さんの時は石川さんがやっているし……。

○伊藤　大分後ですか。

○松岡　７回か８回ぐらいまで続くんじゃないでしょうか。石川先生の時に、石川先生が協議会とは関係なかったから理事会が独立したんじゃないかと思いますね。

○伊藤　なるほど、なるほど。

○松岡　それまでは。

○伊藤　そうですね、４大学の関係者が中心で。

○松岡　ほぼ同じにやっていけたんじゃないですか。それで、石川さんがそういう形で先鞭をつけたんじゃないでしょうかね。

○伊藤　なるほど日本看護研究学会を分離するという。

○松岡　オープンすると同時に。

○伊藤　協議会からの独立が一つの節目だったですね。

○司会　1981年の第７回で、これは日本看護研究学会と改称していますが、その前年度ぐらいまでは４大学協議会が主催していて、そのあたりと少し別れてくるという形ですね。

○伊藤　で、会則も変えたんですね。それまでは学会が終わった後に４大学協議会をしていましたね。今でいう文部科学省の方が来て要望を出したり、そういうセットだったという記憶がありますね。

○司会　逆に言いますと、そういうセットだといろいろな話題も出て、今日の本学会の基盤整備につながったということですね

○伊藤　だから４大学のカラーが濃厚だったのはそこまでということになるんでしょうか？

○松岡　そういうことでしょうね。

○伊藤　結果的に。

■四大学看護学研究会雑誌の編集委員会および奨学基金の設置

○司会　創刊号の時にはそういう形で卒業研究をとにかくまとめてみたというところから始まったようにお伺いしましたが、翌年には編集委員会を設置していますね。

○松岡　理事会の前に編集委員会が開かれてやっておりました。

○司会　投稿規程も、ここら辺から現在の研究学会の雑誌の基盤ができたということですね。

○松岡　それまでは、先ほど言ったように、前回の学会の総会で発表された原稿が整理されて投稿されたもの、それから学会用の抄録を一緒にしたような形で年に２回出すという形でやった。この年に２回は最初からですね。

○司会　年２回は最初からですか。

○伊藤　もう１つ、ちょっと話題は変わるんですけど、若い研究者を育てましょうということがかなり意識的に強調された記憶があります。それで、奨学金制度というのができこの学会の大きな特徴になっていると思うんですけれども、実際には第７回に初めて奨学金基金による発表があったわけですね。

○松岡　野島さんが……、ちょっと待ってください。松倉、あ、この時２人じゃないでしょうか。

○伊藤　２人ですか。

○松岡　どうだったろう。最初の７回の奨学会、56年はお二人という、２人一緒に奨学会基金を出したんじゃ

ないかな。

○伊藤　そうですか。あ、２人ですね、野島さんと……

○松岡　松倉、野島さん。それからあと１人、１人、１人と、こういうふうにいって。

○伊藤　村越先生が基金を寄付をして下さって、その後、山元先生とか木場先生から寄付していただいて。その時代に奨学金基金による発表をされた皆さんが現在活動していらっしゃいますよね。成長されてという言い方はおかしいですけれども。本当によかったと思います。

○松岡　いずれにしてもこの学会は私たちのものではなくて、若い人たちを育てていくための学会であると。そのためにいろいろ手管を考えよう、ということが主体だったですよね、最初の。

○伊藤　そうですね。

○司会　今もお話に出ましたように、1980年に奨学基金を設立していますね。その第１回目の募集が始まりました。また、創刊号を発行したときに、いろいろな協力者ですとか、資金面だとか、かなり大変だったと思います。

○松岡　資金面は僕そんなに心配していなかったですよ。というのは、役員の先生方にスポンサーを見つけてくれるということをお願いして、雑誌の１ページを５万円じゃなかったかな、10万円だったかね、一番最初の頃の広告料。

○伊藤　ちょっとわからないです。

○事務局　今は２万5000円です。

○松岡　今は２万5000円？ いや、じゃあ５万ぐらいいただいたんじゃないかな。それで、それが大きい素材になって、それで雑誌が、いずれにしても研究学会の金の中ではそんなに懐が痛んでなかった。大体、だって300部ぐらいだからね。むしろ、紙代がもっとやった方が安くなるというぐらいのところで､10社で50万。もうちょっと金があったような気がするな。ちょっと細かいことは僕調べて文章には書いてある。

○伊藤　全然その辺知りませんでした、私。

○松岡　いろんな雑誌社の方で、そういうところが協力してくださって、11社だったか、10社ですね。

■四大学看護学研究会雑誌の投稿論文と編集方法

○司会　資金面の方では、その時にはあまり大変ではなかったというお話ですが、やはり、先ほどの編集委員会ですとか投稿規定というと、形式が現在の形に定着したのですね。大体同じような形式でしたか。

○松岡　形式だけは整えました。

○司会　やはり、看護学の論文というといろいろと幅がありますから、実験から実践のものまで、それを今のような形式でまとめるためには、何が参考になりましたか。

○松岡　いや、最初はそのままですね。受け取った原稿を編集委員会の方へ回して、編集委員会の方で査読した時もあったようで、前原先生がおやりになった時は、査読はそんなになかったような気がするんですよね。私の時は前年度のものをそっくり集めて出した。編集委員会ができてからは査読をした方がいいという話は出たけれども、最初のうちは編集委員会もそのまま出してくださったように思いますね。そのうちにやっぱり問題があると、そうしないと質が上がらないという話が出てきて。

○伊藤　学会の発表もほとんどフリーパスでしたものね、当時は。

○松岡　フリーパスです。

○伊藤　とにかく発表を数多くしなくちゃいけないということですから。あまり変なのは最初はなかったんですよね。

○松岡　というのは教官がものすごく締め上げて出していましたから。

○伊藤　私が学術集会長の時、この発表内容はどうなのかなというのが四、五題あったような記憶があります。でもまだ査読による選抜をしておりませんでした。議論した結果、発表を聞いた人が内容を評価することでいいのではないかとなってこれらを除外しないことにしました。

○松岡　学会の発表は抄録の中で調べながら出しているけどそんなに問題はなかったんですよ。こんなの出してというものはあまりなかったですね。７、８回、９回あたりは。

○司会　発表に至るまでのプロセスで練り上げられてきたということでしょうか。

○松岡　指導教官がまた名前を連ねていて、必死だったです。

○伊藤　そうですね。教育学部では卒論の発表会に、他の学問分野の教官がいらして、その場で指導教官にも質問がきたりして叩かれるわけですよ。教官も鍛えられますよね。

○松岡　それはもう。

○伊藤　卒業研究の結果がお粗末だと何を指導してたんだと、看護以外の学問の方から、きびしく批判されますし。

○松岡　あれはおかしいじゃないですか。

○伊藤　あれは厳しかったけど、ある意味では鍛えられました。

○司会　他の学問と整合性を重視したこと、それが先ほどの閉鎖的じゃない学会の基盤になるわけですね。

○松岡　教育学部でよかった。

○伊藤　あれはよかったところでしょうね、結果的に。

○司会　確かに医療系ですと、それだけで固まっちゃっているところがありますね。

○伊藤　そうそう。

○松岡　そんなところが最初のところで、査読ということを省いても学会で発表したということそのものが重かったです。それから、論文としてまとめて投稿してきたということはその次の問題で、その投稿までに指導教官が十分やっている。私が見た中で１つ問題になったのは、英文で全部書いてきたのがあって、いくら何でも英文で書いてここに載せてくれといっても、読む人が誰がいるかと。少なくとも和文抄録ぐらい付けるべきじゃないかと私は返した覚えがある。

○松岡　これが創刊号ですよ。

○伊藤　創刊号はまだ薄いですね。宝物ですね。これはいつでしょうか。昭和54年か。

○松岡　僕なんかも、ともかくその前の研究会で発表したやつですよ。発表したのを文章として出した。

○伊藤　そうですね。そうです、そうです。

○司会　当時、学会発表して、それを原著論文にするまでに至った研究は、どのぐらいの割合でしたか。やはり割合はかなり低かったですか。

○松岡　いや、だから少なくとも私の編集した中では、原著というのは少なくとも論文形式を整えていれば、原著として取り上げてあげた。なぜ通してあげられたかというと、学会で発表していらっしゃることが問題としてあって、大体今と同じでしょうね。そしてカテゴリーというのはまだ今でも決まっていないんじゃないでしょうか。どの分野はどなたが査読をするとか、また取り上げる本数を決めるとか。

○司会　これまでの看護研究学会雑誌の投稿論文の傾向をまとめるのも、やはりカテゴリーをどのようにするかが議論になりましたからね。当時、まだまとまっているというわけではないと思いますが、ある程度できたということでしょうか。

○伊藤　まだ原著論文として、はっきり区分した形というのは出ていませんでしたね。

○松岡　創刊号ではシンポジウムで。

○伊藤　そうですね、内容をまとめたような感じでしたね。

○松岡　きれいに整理していたというのが。

○伊藤　そうですね。この辺もそうですね。

○司会　創刊号では、まだ原著という言葉はでていませんか。

○伊藤　３巻でもまだ見れない。５巻ぐらいになると……。

○松岡　ここで出てまいります。

○伊藤　そうですか。５巻ですか。

○司会　年間に２巻出していて、例えば、この２号は昭和53年の４大学の研究会雑誌ですが、原著論文があります。今ご活躍の方々の名前も出てきました。１巻２号でも原著という表現はないようですね。結局、２巻

出していて、最初の１巻は学会のものをまとめた形になりますね。

○伊藤　本当だ。

○松岡　先生の論文出ていますか。

○司会　いくつかあります。

○松岡　ありますか。

○司会　論文が７～８本。

○伊藤　学会雑誌らしい内容が出てきたというのはやっぱり５巻ぐらいからなんでしょうかね。

○松岡　はっきり言ってそうかもしれませんね、学会らしく本当に整理されて。

○伊藤　その前は、今で言う、学会報告みたいな形ですね。

○松岡　その中で発表したものを整理して投稿されれば、それで原著として出したという形じゃなかったですかね。

○伊藤　ええ。昭和53年ということは1978年ですね。

○司会　創刊号もこの時代ですね。で、1979年には投稿規定が出てきますから。

○伊藤　ああ、そうですか。

○司会　昭和54年ですね。

○松岡　昭和54年はもう投稿規定は決まったんじゃないかな。いくらで別刷増冊ということまで決まったつもりがありますから。

○司会　その形式等もそうですね。

■四大学看護研究会雑誌から日本看護研究学会雑誌へ

○伊藤　松岡先生ご記憶におありですか？石川先生が学術集会長になられた時に、日本看護研究学会とかということで、もっとオープンにしようと議論され、一つの節目となりましたが、それまでは４大学の関係者だけでしたか。

○松岡　いや、そんなことはない。

○伊藤　そんなことないですね、４大学関係者以外の人達も学会に入ってましたね。

○松岡　ただ、日本看護研究学会として確立したのが石川さんの頃だと私記憶しているんですけれども、その時何をおやりになったかというと、世話人が理事会に変わったことでしょうか。

○司会　手もとの資料によりますと、1981年に日本看護研究学会、それで翌年の1982年には世話人会制を改組して、理事、評議員制を導入しています。

○松岡　それで、この世話人というのを理事にして、理事をブロック別に何人という形で選出するところからいろいろな役を決めることに変わった。

○司会　選挙管理委員会も設置されて。

○松岡　ええ。

○司会　組織が随分変化してきたということになりますね。やはり、その時には有志というか、４大学を初めとして有志の会のような形でずっと運営されてきましたが、第８回の石川先生のあたりから、今の学会の形式になってきたということでしょうか。それで、当時、先生は理事をされておられましたね。

○松岡　ええ、ずっと理事で。

○司会　理事の選出方法はどうでしたか。

○松岡　いや、あの時は、評議会は、評議員を選出して、その中から理事を選出したんですね、たしか。

○伊藤　あの後、何か組織を根本的に見直そうということで、例えば法人化の問題とか。

○松岡　それはずっと後でしょう。

○伊藤　後ですか。その時じゃないですか。

○松岡　石川君が会長をやる前のところで決まったことは、８回ですから、何巻ですかね。

○司会　昭和57年で、５巻です。

○松岡　５巻あたりですか。そこのね。

○伊藤　10周年の歩みの時に石川先生がいろいろ書いていらっしゃいますが、探したけど見つからなくて、ちょっと記憶が定かではないんだけど。昭和56年の９月に、世話人の解消ですね、吉武さんの会長の時の20周年を見ると。

○司会　そのあたりで今の組織が大体出来上がってきたということでしょうか。この辺はどのようでしたか、編集委員会は成立していましたか。

○松岡　まだできていない。

○司会　できていない。それでは、理事の中でやっておられたのですね。

○伊藤　編集委員会は昭和60年ですね。

○司会　ああ、そうです。1985年ですね。名誉会員制度、地方会制度の新設です。

○伊藤　ええ、地方会が発足しています。

○司会　そこまでとすると、査読、編集委員はどなたでしたか。

○伊藤　まだやってない。

○松岡　そんなにやっていなくて、だんだんね、そういう意味では、私のところで整理して出すということが、編集委員、査読委員を拵えたり、編集委員をしっかりしろということが理事会の中でも問題になりました。

○司会　量的にも増えてきたということですね。

○松岡　そうそう。

○司会　それで査読の本数も増えて。

○松岡　あの時頃になって、いわゆる発行者が勝手に集めてやるのはどうかというような陰口というか。（笑）

○伊藤　ああ、そうですか。（笑）

○松岡　それまではね、僕も何かみんな黙っていて、その頃からいろんな問題が発生しました。

○司会　その査読方法ですが、その時に選んでやっていただいたということで一応きちんとした形ではやられていたものの、まだ組織的にまだまだということでしょうか。

○松岡　だから先ほど申し上げたように、学会で口頭発表している内容が論文として整理して投稿されたもの、これは一応載せてやろうじゃないかという私の考え方なんですよね。その次には、少なくとも大学の教官あたりから出していただく原稿はというような、何かそういうやり方をしていたんじゃないかと思うんですがね。

○司会　発表していただくことで、全会員が目を通して、それで議論もされて、オープンな場でということですね。

○伊藤　いろいろ書いてあるんだ。

○司会　それを見ていただきながら、思いはいかがですか。

○松岡　巻末にね、確か学会の連絡の、何といったかな、忘れちゃったな、すべて出していたんですよね、理事会の会報だということで。理事会というか会報です。終わりの方に学会会報がついているんですよね、この内容をちょっと調べていただけるとそこらのところはわかってくるんじゃないでしょうかね。

○司会　はい。そのところのいきさつなんかですね。

○松岡　議事録が所々入っていますから。その中で、陰でもってそろそろ出てくると思います。

■日本看護研究学会および学会雑誌の整備

○司会　それで現在のように、1985年に雑誌編集委員会規定というのができて、あと地方会が再編成ということで、1991年には日本学術会議、学術研究団体統一のために組織整理に向けて検討委員会が設置されたというようなことが資料からわかります。

○伊藤　何年ですか。

○司会　1991年ですね。

○松岡　もうその辺になると伊藤先生の独壇場。

○伊藤　そんなことないですけどね。

○松岡　いや、独壇場って、全国の情勢をつかんでいますよね。

○伊藤　そうですね。

○松岡　私は1980年ぐらいですので、あまり前線には出てない。

○伊藤　そうでしたか？　いや、そんなことないと思いますよ、先生やっぱり地区割の時とか、法人にするとご熱心にやっていらしたじゃないですか。

○松岡　やってはいましたけど、ずっとそれは発言者の方に回って。

○司会　1991年には組織検討委員会で、1993年には学術会議に承認を受けていますね。

○松岡　そうですよね。

○伊藤　千葉大学の土屋先生が結構頑張っていらっしゃいましたね。その頃は土屋先生が中心でした。

○松岡　そうですね、法人の問題とか。

○司会　1992年にはちょうど事務局が今のところに移転しています。そして、理事長制度が1992年にはできているんですね。

○伊藤　要するに学術会議に認めてもらうには理事長を置かなくちゃいけないということになって、これもいろいろありましたですけどね。

○司会　金川先生が初代の理事長ということで、1996年、先生が２代目ですね。

○松岡　一番先は誰。

○司会　金川克子先生です。

○伊藤　確か学術学議に通すには理事長制を置かなくちゃいけないということで、金川先生が初代理事長を受けて下さった記憶がありますね。

○司会　先生が２代目で、その時はどんなご苦労がありましたか。

○伊藤　そうですねー、第一、理事長って何をしていいかわかりませんでしたものね。私は当時厚生省も辞めまして、木村看護教育振興財団というところにいたんですよ。ですから、財団の職員が理事長になるというのは不適切だと私は思ったんですね。それで固辞したんですけど、どういう訳か決まってしまって、２年間やらせていただきました。副理事長が千葉大学の草刈先生で、助けていただいて理事長を勤めさせて頂きました。そうですね。あんまり印象に残っている苦労というのはありません。でも、理事長制度の路線引きをしなくちゃいけないなという思いはあって、理事の職務、役割、理事会の構成、運営などいろいろと検討し決定した記憶があります。多くの方々に協力していただきながら。

○司会　先生方は学術集会（総会）において学会長をされていますね。松岡先生は第９回ですが、やはり第１回から比べると雰囲気的にも随分違ってきたと思われます。

○伊藤　先生考えてみたら結構後だったんですね、もっと早く学術集会……。

○松岡　石川君の方が先にやった。

○伊藤　そうですね。何か４大学持ち回りみたいな形でいってましたからね。

○松岡　だから、それを破るためには石川君がいいねとなりましたね。そうですね。変わったことといえば、発足当時の者が1980年過ぎぐらいまでは結構ものを言っていたんですよ。私たちが表面に立たなくても、いざとなればしゃべっていました。先ほどの法人化の問題なんか本質的な変革を起して会が変わるというような状態でなくて維持されているというようなところが強かったです。例えば奨学会ができて、奨学会の応募者が少ないというような問題もその頃からぽつぽつ出てきました。どうやったら応募者が増えるかとか、もっと本当は増えるだろうと思ったのが、そんなに応募がなかった。やっぱり遠慮されているのかな、奨学会の動きとは何だかをもっと活発にPRしてくれるといいな等と思いながら後ろの方でかけ声をかけていた、そんなことでしたね。研究者育成を目的とした奨学会ですからね。他には特に変わったと思わないで、何か自分でははね上がりっぱなしのような感じでずっと過ごして、やり切ったような気がします。

■日本看護研究学会学術集会における招聘講演

○司会　その当時の学会雑誌では、投稿規定だとか査読の体制がかなりできてきたという状況があったと思います。創刊号から比べて、研究の内容についてはどうでしたか、質的にレベルは大分変化したと思われますが、いかがでしょうか。

○松岡　いや、研究内容の質というのは随分上がってきたと僕は思いましたよ。それで、むしろ僕は学会そのものをもうちょっと医学会のような活発なものにしていきたいというのが私の、第９回ですか、９回の時にシュナイダーという外人を呼んだ。その呼ぶ時も学会自身が、外人講演者を招聘するというような予算化ができないということで、自分たちだけががんばってやっていました。何とかそこまでいかないかなと。ちょうどたまたま野島さんがアメリカの方の知り合いがあるということで、野島さんに頼んだんです、誰かセカンドクラス。ファーストクラスとは言わない、セカンドクラスで、これから先を嘱望されるような人の活発な研究を発表してもらえないだろうかということを考えたんです。で、そういう方はともかく外国で発表するということは大変名誉なことで、いいことだ、プラスになるはずだから、それをお礼の代わりに使お

うじゃないかというような魂胆があって、それで飛行機賃以外には謝礼は出ませんと。ただし、日本に来て、日光と京都の案内はいたしましょう。それをお礼の代わりにして、他には謝礼はありませんが、それでもいいかという質問に、とても光栄だと。それでシュナイダーさんが、今でも時々日本に来られているようですね。

○伊藤　そうですか。

○松岡　ええ。来られて発表した、これが学会としては皮切りだったと思うんですよ。

○司会　先生の第９回の招聘講演が最初ですか。

○松岡　ええ。それはなぜかというと、医学部の学会なんかでも招聘講演会をするんですけど、その場では研究の方向性が教えられ、そして、自分たちにプラスになるもので、ただ敬って聞いて感動しているものではないと私の経験でしていたので看護の方でも、あの当時、ヘンダーソンさんとか、米国のオーソリティを100万くらい出してお呼びするというお話があったんですけど、そんな金は出せないと。まあ、せいぜい何とかうまくいかないかということで野島さんにお願いしたんです。そうしたら、たまたまシュナイダーさんが喜んでうかがいたいということで来てくださいました。そして、それだけの接待で快くやっていただいた。その後私のところに手紙をくれて、その発表されたことが帰国された後、教授昇任の実績に認められたことで、本人からも日本に行って発表したことがみんなに褒められて、それで私は幸福であったという手紙を頂きました。その後リンダさんは、ミネソタ大学の学部長を経て、そして退官されて次の仕事されているとの事です。日本の若手もやればやれるぞという刺激になるように考え、工夫をしたんです。それはどんな工夫かというと、まず、雑誌に論文の発表内容を原文のままでこの発表には構成してもらい、そして当日は通訳を。学会場には、結構、ディスカッション全部は通訳なしでした。いわゆる学会の雰囲気としては、一応、英文の中から引っ張って話を聞いて討論という雰囲気を作れたということが大変よかった。その翌年も同じような形式で、あれはどこだったかな。

○伊藤　熊本。

○松岡　熊本でしたね、熊本でもどなたか呼んで。

○松岡　これが宣伝になってルートが築けた。

■日本看護研究学会学術集会の参加者および演題数の変遷

○司会　先ほど、国際的な視点という、そういった試みで、学会が拡大していったようですね。

○松岡　そういう、やっぱり刺激を作りたいなというのが大きな目的でした。そういうことをさせたというのは核で。

○伊藤　私はね、松岡先生の学会で、外国人をお呼びになられたということもとても刺激的だったんですけど、何かまだ手作りの学会という印象があるんですね。千葉大学内で物をあちこちから運んでいらしたという、ある意味では家庭的な身近な学会だったという気があるんですね。ところが翌年、木場先生が郵便貯金会館で開催されたのですね。会員も多くなったからと。私、その後を受け継いで勤務先の施設内で学会をやるつもりでしたが、それではだめだと思われてきて苦労しました。松岡先生位までは、こじんまりと手作りの学会だったと思います。

○松岡　約400人か500人ぐらいの聴衆が集まったんですよね。教育学部の視聴覚教室を借りましてね。

○伊藤　それまでは、大学を会場にして大体カバーできていたんですよね。

○松岡　ええ、教室で。

○伊藤　会員もそんな感じで、大学が基本でしたね。

○司会　千葉、徳島、弘前では、大学で開催されていますね。

○伊藤　木場先生の10回の時に郵便貯金会館を借りて、初めて大学外での開催になりましたね。私は翌年11回の開催に向け、会場探しをしなければと新たな悩みが出てきてしまいましたが、考えようによっては、学会らしい会場での開催が定着したのかもしれませんね。

○司会　教育会館で開催されていますね。

○伊藤　そこで虎ノ門の教育会館での学集会開催の運びに。

○司会　まあ、そのように会場も大きくなると資金面でも大変ですね。

○伊藤　そうなんです、お金の問題も含めてちょっと苦労しました。でも、何とか赤字にはならなかった。

○松岡　私が事務局の方の会計その他に目を通していた当時、外人を招聘された方、収支はとんとんでしたということですが、赤字になって困ったという先生はいらっしゃらなかったような気がします。

○伊藤　洩れ聞いたところお一人いらした様ですよ。会長が自腹を切ったって後で聞きましたけど、その真偽のほどは……。

○司会　そうすると学会は健全運営ということですね。

○松岡　そうそう。どうせやるなら自分の集めたお金の中でやる習慣でしたから、その当時は。そんなに大きなことは。

○司会　15回も、同じく教育会館でやっていますね。

○伊藤　そうです。内海会長の時です。あそこは比較的会場費などが他に比べ安かったのですが、６カ月か前でしか予約できないんですよ。私が学会長の時はセンターの教官の田島桂子さんが英語もできるので、彼女の紹介で外国から講師を招きました。この招聘講演で大体100万円ぐらいでしたかしら？予算が。

○松岡　招聘で。

○伊藤　ええ、招聘講演だけの。

○松岡　随分かかりましたね。

○伊藤　ええ、旅費・謝金の両方で。お陰様で研修研究センターですから研修生がおりますでしょう。その人たちがみんなボランティアで協力してくれました。そういう意味では人件費節減ができましたね。

○松岡　私の時は招聘講演で、うーんと日光と、それから京都の、いわゆる外人観光ツアーですね、両方で10万ぐらい。

○伊藤　でも旅費分もありますでしょう、往復の。

○松岡　えーと、25万円ぐらい。ちゃんと向こうで知ってて、安いチケット買いますからと。

○伊藤　そうですか。100万円というのは私の思い違いかな。

○松岡　だから、50万円足らず、40万円ちょっとで。

○伊藤　謝金も払ったと思うんですね、その時は。

○松岡　それが、謝金だとどうしても金額がね。ドルに換算しますからね。

○伊藤　先月30周年の記事に書かせていただいたんですけど、私は徳島大学に昭和47年から52年までお世話になって、つまり４大学を離れて七、八年たった時点で第11回学術集会長をさせて頂きました。センターは全国の教員養成コースなので、当時看護学教育とはと模索していましたので会長講演を「看護学教育研究への模索」といたしました。センターには幹部看護教員養成課程がありますけど、全国各地の看護学校の教務主任といわれる教育の責任者の人たちの１年間の研修コースなんです。このコースではカリキュラムの開発と、それから研究ですね、これがメインの学科目になります。そこで指導教官が個別に指導した研究の中から第三者に示しても納得して頂けそうな客観的な事実を証明している研究を選んで会長講演で紹介しました。

例えば、保健婦学生が家庭訪問に行ったときに情報を集めますよね。それらの情報の枠組みを関連図式に示し、家庭訪問時にどの側面の情報をどの位集めてくるのか検証しました。結果は学生により個人差があることまた社会面の情報が集めにくことがわかりました。入試における面接試験の判断と、入学後の整合性をみて、面接試験の限界を明らかにした研究とか、あるいは授業の中で形成的評価を導入すると成績が上るという実験研究とかです。まだ看護学教育に関する研究が手つかずの時代でしたから私自身にも混乱はありましたが、第11回学会で看護学教育の研究をメインテーマとし、会長講演もこれに沿ったのは今振りかえって良かったかなと思います。

○司会　特看時代の看護学教育と、センターに移られてからは違ったということでしょうか。

○伊藤　そうですね、徳島大学で教科教育法を担当したのが契機で、教育方法に興味をもちそれが結果的にセンターでつなげられたと。

○司会　この辺で将来看護の幹部教員になる方たちが、たくさん研究会に入られたのですね。

○伊藤　そうなんです、入りましたですね、お陰様で。この点でも感謝しております。第11回での発表数は、先ほどもお話した様に、査読をしておりませんので多くなっておりました。そのため、会場数の確保にも、苦労しました。内容的に学会発表に叶うものかとセンター内で議論はしたが結果的に全数受入れることになりました。つまりこの頃から応募すれば全て発表できるという段取りに疑問があったわけです。

○松岡　増えましたね、今。
○伊藤　ええ。私の時にはまだポスターセッションなんていうことは考えてませんでしたね。
○司会　そうすると、セッションもそんなに数が多くなくということですか。
○松岡　私のやったころは。
○伊藤　だから議論もできてよかったですね。
○松岡　80題ぐらいだったような気がするよ。必死になって、それを２日でやった。
○司会　先生方の時はポスターセッションはやってなかったかもしれません。
○伊藤　ポスターセッションは早川さんの時に随分やったという記憶があるんですよね。
○松岡　題もここにあります。
○司会　29回です。
○伊藤　ああ、そんな後ですか。熊本大学の成田さんの時なのかな。慈恵医大の吉武さんの時もなかったような気がするんですけどね、私。
○司会　講演だったですね。
○伊藤　ええ。
○松岡　これだ。
○伊藤　まだ七十何題なんですね、今はもう400いくつ？
○松岡　そうですよね。
○伊藤　400以上の発表でしょう。大変ねー。大学もたくさんできたからこういう学会雑誌に掲載するということが業績にも結果的になるので、学会雑誌の役割というか、期待される中身が大分変わっていますね。

■看護研究学会における査読のあり方

○司会　そうですね。今では、発表とともに、原著にしないと業績にならないということになりますね。
○松岡　原著していくという。だからやっぱり査読委員というものが、少なくともしっかりした査読をして、査読委員の名前と、その査読能力というものが評価される雑誌になっていくという必要があると思うんですよね。ただ査読というのは点数が辛ければいいんじゃなくて、やっぱり査読というもののあり方は、今、この人の述べようとすることが正当に述べられているか、表題で。そして、その述べたことが社会的にどういう意味があるか、そこが査読されるべきであって、あんまり内容でもってこういう実験にはこういう実験の方がよかったんじゃないかというような査読はしない方がいいと思うんですよね。
○伊藤　そういう議論ってあまりされていないんでしょうかね。
○松岡　何かあるみたいなことを聞いてね、一時それで査読された人の方から不満が出たりなんかもしたことがあったみたいですよ。
○伊藤　そうですか。
○松岡　やっぱり僕はその人がやった研究方針でそれが目的にかなっており、内容的に誤った判断をしていないということが査読されれば、僕は通していいと。
○伊藤　要するに学問ということでね。
○松岡　ええ。それで、もしおかしいなと思ったら落とせばいいことで、ここはこうやった方がいいじゃないかとか。
○伊藤　ああ、指導ですか？指導というのはね―――
○松岡　指導まで入っちゃうと問題が大きくなる。
○司会　いわゆる内的整合性があればそれでいいと。それがないものねだりしてしまうような査読もありますので困ることもあります。
○松岡　どうもそういうところがあって。
○司会　人のものを見るというのは非常に大変なことですね、査読の方の質も問われると思います。
○伊藤　最低２人ぐらいは見てるの？
○司会　編集者も読んでいます。しかし、一時は査読するのにすごく時間がかかったようですが、今は随分速くなったようです。

○松岡　査読に大体時間はどれぐらい要してる？
○事務局　１カ月。
○松岡　１カ月。ああ、いいじゃないの、それじゃあ。
○司会　前は１年とか。
○松岡　半年以上かかったよ、今のような話で。大変細かくおやりになって、ちらりと聞くと内容に入り過ぎちゃうという感じがしますね。
○司会　別の論文になってしまうような、そういうところがなきにしもあらずといったとろでしょうか。
○松岡　それにもう一つは指導教官がしっかりやってることですからね。
○伊藤　そうですね。
○松岡　ええ。
○伊藤　確かに、例えばこれは学会雑誌ではないんですけど、『臨床看護の進歩』という雑誌がありまして、この雑誌の意図はいわゆる病院で働くナースの研究をサポートするということでした。たまたま私が指導した研究を雑誌担当者が注目してくれて、口腔マッサージをして嚥下機能が改善したという研究なんですけど、その雑誌に掲載したことがありました。その研究について２名の方が講評しているんですけどね、１名の講評内容が看護観の違いなのか、研究観の違いなのかわかりませんが、この研究は無意味と酷評しているのですね。それで研究者も私もがっくりした記憶があります。こんな形の査読はマイナスになるので気をつけないといけませんね。
○松岡　だからやっぱり査読というのはよほどそういう点を注意してやっていかないと。
○司会　査読者が自分の領域に引き入れてしまうことがあります。
○松岡　そうそう、自分の領域の中で。
○司会　その研究の意義というものを理解して、一線を置かなきゃいけないのですが、やはり客観性というものを保つのが、なかなか難しいようなところがありますね。

■これからの看護研究学会雑誌への思い

○司会　さて、いろいろな話題が出ましたが、伊藤先生が２代目理事長をやっていただいて、2003年にはホームページも開設されていますね。やはり学会の全体的な傾向でしょうか。学会雑誌もこのような冊子体というのは、結構お金がかかったりして大変なことがあって、学会によってはデジタル化しようかという話も出ているようです。CDみたいものですと、単価が安くできるようです。また、ホームページを見ることによって学会雑誌が閲覧できますね。でも、これは一般には公開はされていなくて、IDとパスワードが必要です。
○松岡　それを使わないと入れないんだ。
○司会　ですから、冊子体がなくても会員の方だと、第１巻から見られるます。
○伊藤　今、年間学術雑誌は４回でしたっけ、５回。会費の割合に安いですよね、これだけのものを見返りでいただくというのはね、本当に安いと思う。
○司会　この学会では、学術集会の抄録集もいただけますから、ありがたいです。一般の学会ですと別に購入しなきゃならないところもあります。
○松岡　まあ、会員としてはメリットがあるんですよ。
○伊藤　でも今、年間何人か退会者がおりますでしょう？
○事務局　去年の新入会が621名で、退会者が300人ぐらいです。
○松岡　それでも300人は歩留まりしている。それはね、どうしても学会に発表することで、会員でなくちゃいけないとあるでしょう。その部分だけで入ってこられる方が多いんじゃないですか。しかし、それもいいんじゃないでしょうか、社会的な貢献ですよね。
○司会　そうですね。
○伊藤　学会入会が手段であれ何であれ、よろしいのではないでしょうか？
○司会　わが国の看護研究は、当初出版社の雑誌を中心に展開されてきた部分がありますから、原稿料が貰えることが多くありました。しかし、自らが会費や投稿料を負担することで、学術的な意義や価値が高まっていくということも認識していただき、ぜひ学会に継続して参加していただきたいですね。そのようなところで、発足当時の目的というものが脈々と流れているということでありましょう。如何でしょうか。
○松岡　維持できていると私は思いますね。まあ、学会雑誌というのは、例えば私肺ガン学会だとか、いろ

んな学会に入っていますけど、もう新しい知識になっていくと、積んどくか、そのまま封を切らないような状態が出てきてますけどね。やっぱり学会雑誌という形の中に名を連ねて集積されている業績、これは永久に残っていますからね。会員の目に触れる、触れないにかかわらず、これは図書館にはありますね。それでインデックスで引いてみれば顔を出してくれますからね。だから私はこういう冊子をもっともっと会員も利用するし、社会が利用できる形になっていけばいいなと思いますね。会員はまだ利用していないんじゃないか。せいぜい自分が発表をこの中に残して、周囲がどんな反応になるだろうかというような意気込みをもっていただきたい。ここに投稿すれば、どうしてもため息ついて二休みも三休みもしてしまっているんじゃないかという感じがしていますね。私もほとんど目次を見るけれど、知っている人が顔を出しているときにちょっと何があるかなとチラッと見る程度ですけど、若い方々が継続的に出していくと見えるのはあまりないもので、ちょっと継続性があって、研究に持続性を持っていただくと、創設に関わった者としては望みですね。

○伊藤　当初申し上げたように、発足当時はまさかこんなに会員数が膨れ上がる学会になることは夢想だにしなかったんで、本当に夢みたいです。私も名誉会員に推薦していただいて、今は客観的に学会を拝見しておりますと、学会そのものが看護界に大きく貢献していることがわかります。一部質的に課題はあるかもしれませんが看護学構築に、看護研究の発展に貢献している学会によくも育ったなと、とてもうれしく思います。

　ただ、春日の局みたいになっちゃうのでためらいもありますが運営面について理事会の記録とか総会に出席した時に危惧する時があるんですよね。何というんでしょうか。当初の夢である若い研究者を育てるという側面は最初ほどニーズが高くないのかな。でも、やはり育ってもらいたいという思いはあるんですけど、時には無用論みたいなことが話題になったりしていますよね。また開放的な学会であってほしいと思うのですが時々看護学について未熟な人は入れないとか、入会を厳しくするとか議論されたこともありますよね。関心がある人は入っていただいていいと思うんだけれども、入会のための審査をするというような動きがちらちらと出てきたりするのが心配なんですね。学会に来ても発表もしない、ただオブザーバー的に来る人もいるかもしれないけれども、やっぱり学会に入ってもらって、今こういう動きがあるとか。臨床のナースが学会で得た研究産物を臨床に使おうとか考える場であってもよいのではないでしょうか？学会に参加することでニュースが手に入りますよね。だから、私は、関心のある方はいま、研究や大学に関係しない人でも看護以外の方でもオープンに入れてもらいたいなという思いはいまだに強いのですが。学会はエリートを育てるところではありませんから。

○司会　そうですね。しかし、他の看護系の学会では閉鎖的なものもありますね。

○伊藤　理事会で審査しないと入会できない学会もありますでしょう。それはその学会の特徴なんでしょうけどね。それをとやかく言う気持はありませんけど、この学会は設立当時の夢をずっと今後も保っていただけると有難いです。

○松岡　学会場で、ああ、最近は元気がなくなったんですけど、誰でも質問をしたり、下らない質問だなと思うことでもあそこで話したりする学会であり、そして、それで花を咲かせるような学会であれば、今度はそれのためにまた新しい視点が出てくると思うんです。そういう気にも止めない、またはむしろ軽蔑するような発言があっても、それを学会の中では受けとめてやる、聞いてやる。何もそれを批判して排除するのではないというようないき方を維持してもらいたいですね。

○伊藤　だから建設的な批判をベースにしたディスカッションは大いにすべきと思いますが。時々感情的な発言が出てきますけど、それをどうやっていい形で変えていくか今後の課題としてはあるのかなと感じることがあります。

○松岡　パネルディスカッションもね、とてもいい方法だと思いますけど、パネルディスカッションにあまり主力を傾けてやると、本当の意味でみんなの耳に入るディスカッションというものがどこか行っちゃうんですよね。あの場で終わりなんですよ、言いっ放しなんですよ。そういう学会になっていくと僕はポスター

セッションというもののあり方なんかについても、もしポスターセッションでやっていくなら、ポスターセッションの結果というものを雑誌の中に何とか残していく方法を将来は考えていくべきではないか。そうすれば、ポスターセッションというものの意味ももっと強くなる。あそこでディスカッションすることが。

○伊藤　そうですね。

○松岡　そうじゃないと、何か今は数が多くなったからポスターセッションというふうに流れても困るからね、流れ過ぎる、数が多いと。

○伊藤　要するに数をこなせばいいみたいになっちゃいますね。

○松岡　その方が問題だと。

○伊藤　その辺の兼ね合いがね。

○松岡　だから、そこは上手にやっぱり。

○伊藤　会場のセッティングの問題とかね、難しいところですよね。これは第２部の座談会で話すべきことなのかもしれませんけど。時々見ていて気になって、敢えてふれました。

○司会　ポスターセッションも座長がまとめて出すなり、何らかの方法があるかもしれませんね。

○松岡　もし何だったら、座長にもっと責任を負わせてね、きょうのポスターセッションの中ではこういうもの、私のやった範囲内でこういう面白い話題があって、ディスカッションは、こんなディスカッションがあったが、会場の皆さんどうですかといいうような、一つのパートとされてもいいんですよ。そうすればポスターセッションの意味が全体の中で共有できる。何か今はやりっ放しですね。

○司会　学会でそういう発言があっていいと思います。それを学会雑誌に載せるアイデアもいいですね。それで、「ああ、そういう議論があったのか」というようなことで記事として取り込めたりすると確かにいいのかもしれません。

○松岡　学会雑誌の中にポスターセッションの目新しい、もしくは座長から申告があったものを紹介するページをつくる、この中に。データだけでいいんですからね、こういう形でこういうことがあってと。で、そこに座長のコメントを入れればいい。

○司会　それも新しいやり方としての学会雑誌の役割かもしれません。

○松岡　ポスターセッションを活かしてというね。

○伊藤　お役所言葉に廊下鳶というのがあって、ご存知ですか？予算獲得に忙しく動き回る人達をいいます。ポスターセッションは場合によっては廊下鳶みたいに、あっちへ行ったり、こっちへ行ったり。すごく忙しい思いをしますでしょう。やっぱりポスターセッションってメリットもあるけどデメリットもあるなと。

○松岡　だから興味を持って入って、そして、ああ、これは面白いなと聞こうとして見て、そして説明を受けて、ディスカッションして帰ってくる人はとてもいいんですよ。そういう人のためになる。ところが、だったら、それは何も学会というね、ああいう大勢のところでやらなくてもいいんじゃないかと。

○伊藤　まあ、そうですわね、考え方によってはね。

○松岡　だから、せっかくああいう広い所でみんながわいわいやっているところですから、何かまとめがあっていいんじゃないかという気がする。学会雑誌の中でまとめるとか。そうすると座長さんが容易じゃなくなる。

○伊藤　そう、座長の引き受け手がなくなる。

○司会　総説でもない、原著でもない、そういう学会記みたいなものも一つの実績として認めていくことがよいのかもしれません。座長が事後の処理に苦労することになりますが、自分の裁量の中で、何に問題点・論点があるのかみたいなことでまとめる能力、そういうものも必要になっていって、それが認められてくるようになるといいかもしれませんね。

■まとめにかえての一言

○司会　さて、いろいろお話が尽きないところなのですが、まとめに入らせていただきます。これまでの問題点とその後ということですね、看護研究を含めまして、学会雑誌への思いということで語っていただきましたが、まだ話し足りないところを是非お願いいたします。

○松岡　もう大体しゃべった。

○伊藤　私も取りとめなく。

○司会　いえいえ、たいへん貴重なお話をお伺いしまし

た。

○松岡　ただ、今度この雑誌がＡ４判の雑誌になったんですよね。本棚に入れるのにすごく苦労してるの。どうしてＡ４判じゃなけりゃいけないんだろうという気がするんだがね。

○司会　国際規格になっているようですから。

○松岡　国際規格って、他のところはこれでしてるところもある。

○司会　まだＢ５判を堅持しているところもありますね。

○松岡　だから、何も僕はＡ４判にこだわる必要はないんじゃないかなと。Ｂ５の形でコンパクトに書棚に収まるようにしてもらえるとありがたいなと思ってはいるんです。これは一つの望みなんですけれども、いつもこんなのが来ると、はて、どこに置こうかと、横にしようかなと。

○司会　そうですね。

○伊藤　最後に一言。私は、幸運にも創設期からずっとこの学会に参加させていただいて、私自身がこの学会を通してすごく成長させていただいたと思います。ご縁があって徳島大学に行ったという、あの５年間が私にとっては大変貴重な体験になっています。そして、それをベースにして今度は教員を育てるという仕事をさせていただいた経過の中で、徳大にいたころに教授に研究のイロハからたたき込まれ、教えてもらったことが出発点となりました。これらが今の私の支えになっていますので、本当に感謝しております。この学会のますますいい意味で発展するよう、陰ながらお祈りしております。

○司会　どうも長時間に渡って、ありがとうございました。貴重なお話をいただきましたが、いただいたご意見は次の２部に反映させていただいて、学会雑誌の運営にも是非採用していただくようにしていきたいと思います。どうもありがとうございました。

日本看護研究学会
学会誌発行30周年記念座談会

第２部　「これからの展望を語る」

山　口　桂　子（日本看護研究学会　理事長）
川　口　孝　泰（日本看護研究学会雑誌　編集委員長）

司　会：田　中　裕　二（千葉大学看護学部）
日　時：平成19年６月４日（月）
場　所：丸の内ビル　コンファレンススクエア

○司会　お二方の先生にお集まりいただきまして、日本看護研究学会雑誌発行30周年特別記念号の第２部の座談会を始めたいと思います。

ご出席は現理事長の山口桂子先生と現編集委員長の川口孝泰先生です。山口先生は編集委員長も1998年から2001年までお務めになり、2004年からは理事長をされております。また、川口先生は2004年から編集委員長を務められ、現在２期目の編集委員長を担当されています。

座談会の第１部では松岡淳夫先生と伊藤暁子先生に本学会の発足、その後の学会の発展や学会雑誌について歴史的なお話をしていただきました。第２部では将来のことについてお話をしていただきたいと思います。

まず最初に、本学会雑誌が今年で30巻の発刊を迎えるということですが、最近の編集に携っている川口先生から見て、例えば研究の動向とか、この学会として今後どのような方向に研究が進んでいくかということについて、今までの経験をふまえたお考えがあればお話しいただきたいと思います。

■投稿論文の現状について

○川口　そうですね。最近、この10年ぐらいの学会雑誌をめぐる動向をみると、投稿数が増えてきたということ。それは看護系の大学が多くなってきたということです。大学教員となるためには、論文業績が必要です。しかし、業績を上げる一方では、研究の形式論が強くなってきて、数が非常に増えてきたが、オリジナリティがなくなってきて、10年前の課題を現代風にアレンジしているようなものが増えてきています。それらを不採用にすると、何も載らなくなってしまうというのが現状にあります。

日本看護研究学会の独自性は、会員に臨床家が多いということです。このことは前から言われているのですけれども、山口先生が編集委員長の時に、そのことが議論となって、技術系の論文も、もっと柔軟に受け入れていこう・・・ということで、投稿規定の中に、ジャンル分けを新たにつくりました。それにもかかわらず、技術分野で投稿してくる数がいまだにほとんどない状況です。そのため、結果として、臨床家の技術論文が投稿されないので、学会の独自性を打ち出せないのはわかっていても、いまだに実現できないところに、看護研究学会雑誌の将来に向けての課題があると思っています。

臨床から持ち上がってくる臨床看護研究が非常に少ない理由はなぜか・・・。臨床家から大学の教員にシフトした時に、臨床家が技術系の論文を書いてくだされば良いのですが、旧来の自然科学の方法論を持ち出して形だけ整えて出してしまうところに問題の起点があるように思えます。日本看護研究学会が、日本看護

科学学会とどこが違うのかという話題がよく上がります。科学学会の特徴は、敢えて言うなら質的研究・理論的研究に重みを置いて研究を行っています。一方で看護研究学会は、いわゆる量的研究が科学学会に比して多い。しかし、それは悪いことではなくて、本学会の特徴の１つに、看護の関連領域の学問分野で看護に興味を持っている多くの人たちが会員となっている点にあります。それらが看護の実践領域の研究を盛り上げていくという形が見えてくればいいのですが、なかなか見えてこない。最近特に感じるのは、日本看護研究学会らしい論文集をどう構成していくのか、あるいは投稿を求めていくのかというのが、編集に関わる者としての大きな悩みです。これは学会の独自性というものが、編集の内容と密接に関わってくるからです。

これらの検討を受けて、学会雑誌を現在の「学術論文集」のほかに、「技術論文集」、いわゆる学術版と技術版の２冊に分けて論文集を出してみたらどうかという話もあったんです。窓口がはっきり見えていれば、技術分野での論文投稿が増えることが期待できるのではないかということです。そのための準備として、初期のころは、積極的に投稿依頼という形をとって、具体的な見本ができれば、多くの実践家がトライしようとするきっかけになると思うのです。今、私は編集委員長２期目に入っています。１期目は査読システムやオンライン化に向かうための準備に力を注いできました。２期目には何をするかということをいろいろ考えるのですが、学会の独自性を示すために臨床看護研究を積極的に載せていくために、技術報告を積極的に載せる新たな雑誌を作ってもいいのではないかと思っています。投げかけられた質問と答えは違うかもしれませんが、今思っていることはそんなところです。

○司会　山口先生はどのようにお考えですか。

○山口　そうですね。私が編集委員長であった1998年からの３年間というのは、今から振り返ってみると、編集委員会に関して、さまざまな変化のあった３年間だったことがわかります。当時は会員数、評議員数に応じて理事数が変わる規約でしたので、理事が19名に増えたわけですが、その増員となった３名がそのまま編集委員会に割り当てられて、委員が６名から９名に増え、そこに、川口先生を初めとする錚々たるメンバーが入ってきたわけです。その中で、日本看護研究学会がどういう学会を目指すのか、それが雑誌にどう反映されてくるべきなのかといった、かなり本質的な論議を重ねて、形式的にも内容的にもさまざまな試みを行ったわけです。その取り組みの一つとして、この学会の特性を何らかの形で明らかにしたいということで、川口先生を中心として看護科学学会と本学会の雑誌に掲載されている論文の内容的な違いを過去10年分比較するという大変な仕事をまとめてくれました（本学会雑誌23巻４号参照）。それを見ると、やはり今言われたように、臨床の方が著者である論文、共著者も含みますが、これが随分あって、そこが大きな特徴だったわけです。その経緯で投稿規定の中に2000年から技術・実践報告というジャンルを設けたことは先ほ

どもお話しがありましたが、それに反して起こってきた論文の傾向というのは、ひとつは看護教育の大学化の波の中で、本学会雑誌が教員に求められる評価基準に耐え得る学会雑誌であったということであり、そのためには技術・実践報告ではなく、原著や研究報告での掲載に対するニーズがあったわけですが、質の維持を保って、そのことを果たしてきたことには十分な意義はあったと思っています。

しかし、その中でも本学会が何をめざしていくのかを明確にしなければならないということはあり、先ほど川口先生がおっしゃられた課題の中に端的に言い表わされていると思います。今回、あらためて、最近の雑誌掲載論文について振り返ってみたのですが、この数年の掲載論文の著者の方は、もうほとんどが教育機関に所属されていて、科学学会との差がほとんど見られなくなっています・・が、学術集会への発表は、毎年変わらず100題前後が臨床現場の方との共同で行われています。ですから、そういう臨床の方が発表されたものを、編集担当者の側から多少のアドバイスを加えてでもいいので論文化していくという作業を学会の方針として行っていくべきかもしれません。本学会のキーワードの１つは「臨床」だと思うので、それを雑誌の中に形として残していきたいとは思います。

■学会発表と論文投稿について

○司会　特に臨床の方々は、発表した研究をどのようにまとめていくかうまく指導してくれるような人が近くに見当たらないために論文として残っていかないのではないかと思います。看護は実践の科学であるので、大学で行っている研究も重要ですが、実際に臨床でどのような実践を行い、このような結果が得られたと発表されますが、論文にならないというところが一番問題であると思います。では、今後どのようにしたらよいかというところで、何かお考えはありますか。

○川口　技術指向の論文集を出さなきゃいけないようですね。研究指向の論文は、新しい発見を読んでもらうわけですから、どうしても抽象的でわかりにくいものになってしまうのは仕方ないとは思うのですが、技術指向の論文集は、具体的で、わかりやすくないと駄目だと思うのです。わかりやすいことは、研究的じゃないと思っている人が大勢いるんですよね。技術を他の専門家に伝達したいと思っている人はいっぱいいると思います。こんなに、面白い技術をしている人がいるよ！！があったら、具体的にどんな技術か未熟でも説明したり表現したりしてみればよいと思います。そのようなものが世に出れば、誰かがその新規性を言語化して説明（科学）するチャンスも生まれるのです。日本看護研究学会には、それらの技術を紹介し、そしてそれらを科学的に説明することのできる人材も揃っていると思います。１編でも見本ができれば次が続くかな・・・と。

○司会　学会雑誌に載せるとなると難しく考えてしまうのでは……。

○川口　学会雑誌は、イコール、アカデミズム、というふうに思ってしまうんだけど、肩を張り過ぎてしまうから形式に縛られてしまうのです。論文にする必要もないという考え方もあって、まず出発点は、例えば帰納的な視点で・・・ということを考えたら、難しく考えずに、今あるそのままをどう書くか・見せるかというところが出発点なのかなと思います。看護だけに限らないのですが、実学は、例えばこんな橋を作りました。この橋が本当に丈夫で理想の橋なのか・・・という、これまでの経験の積み重ねの知識を借りて作ります。橋とか建物とか実態を見える形にして、そこから新しい研究が始まってもいいと思います。技術の成果が何も見えないで、理論だけで説明しようとすると、広範囲理論のような抽象論ばかりが前面に出てしまって、実際に役に立つ方向での狭範囲理論が出てこないというのが最大の欠点なんでしょうね、今の論文集の。

○山口　最近、教員評価がということが言われるようになりましたよね。その評価基準を大学が決めようとする時に、他大学とも共通のもの、あるいは通用するものを使わなければいけないというような了解があって、例えば、インパクトファクターの高い外国の雑誌へ英文で投稿したら最高点で・・○○点みたいなことですが。でも、教員評価は研究者としての評価のみではないので、教育を一生懸命やっていますという、教育者としての評価ももちろんしなければならない。にもかかわらず、教育にどれくらい十分に携ったかという評価ポイントのコンセンサスが得られにくいという

傾向があるように思います。つまり、看護学教育に携わる教員に対する評価の基準は、独自にその分野の中にあるということだと思うのですが、それと同じで、その学会がもっと「私たちは実践の部分を、教育であれ臨床であれ、とにかく実践している中身を提示して、その善し悪しを論じ合うことに重きを置くんだ」というような価値観を出さない限りは、今、一般的に使われている自然科学で活用されている評価基準がそのままの価値観で使われるようになり、看護学における研究者も同じように、自然科学的な方法論をとった、形式が重視されるような論文を目指すことが続いていくのではないかと思います。そこのところを学会が変えていくような取組みをしないと価値観が変わっていかないと思うんですね。

○司会　千葉大学でも教員評価を実施していますが、どのような尺度で評価をするかといったときに、例えば自然科学系の教員がある評価指標を出してきたときに、看護は実践教育のウェートが大きいために、その評価指標では使えないと反論したら、ではあなたたちの評価に合うような評価指標、すなわち看護独自の評価指標を提案すればよいと言われました。

それから、さきほど学会雑誌を、例えば、技術編と研究編とに分けるような話が出ましたが、大変ではないでしょうか。

■学会雑誌の将来

○川口　雑誌の印刷にかかる経費の問題が障壁となってきました。しかし、これからは印刷された雑誌は要らないかもしれないです。というのは、IT化を考えるならば、ｅジャーナル化する事も将来計画のひとつだと思います。正文社（現担当の印刷会社）さんにとっては、ちょっと複雑な気持ちかもしれないけど、私たちとしては別に雑誌の媒体で扱わなくても、2011年にはほとんどのテレビがデジタル化される予定なのですから、テレビでも見れるようになります。最近、インターネットを見ていてびっくりしたんですが、国立情報学研究所が、素晴らしい論文データベースを作っているんです。しばらくぶりに見て、その進歩に驚きました。多分、米国のMEDLINEのようなシステム化への取り組みだと思います。もう１つ、論文のデータベース化と連動させて、その背景には、具体的で役に立つような、クリニカルガイドライン（日本医療機能評価機構）との連動もあるようにも思います。

日本看護研究学会の論文誌は将来的にはｅジャーナルにして、ホームページを窓口にして、他のデータベースとの連携を果たしていくことで、社会貢献をしていくことができる形になると思います。

○司会　海外の雑誌にはそのようなものはありますね。リファレンスをクリックするとその論文に飛ぶという、そういうのは随分盛んになっています。今、川口先生が言われたようにすべてを電子化するかといった場合に、日本ではどうなのかなと思います。私は日本生理学会員でもあるのですが、英文誌が電子ジャーナル化されたのですが、でも冊子体が欲しいという人がいるということで残っています。コストダウンということになれば電子化は進んでいく道だと思いますが、でも冊子体は手で持ってぱらぱらとめくることができるので見易いという利点もあります。

○川口　かつては会費を払って、会員だけが受けられる特典というのを考えるのですが、だから会員じゃなければ学会雑誌を持っていない・・・。もうそんなことを言っていたらだめだと思うのです。１つの学会が内向きに見ていたら、情報が共有できずに研究なんか全然発展しないと思います。

■学会員のメリットとは

○司会　逆に会員以外の人たちに引用してもらうというようなことが重要だと思います。

○川口　そう。しかし会員であるための特典は考えなきゃいけないのですが、どんどん外の学会などと交流を持っていくということも、情報化が進むなかでの学会のあり方で、2011年にテレビが変われば大きな意識の変革が求められると思います。

○司会　今後、学会雑誌がどのようになっていくかという話でしたが、では研究の動向、すなわち、研究が今後どのように進んでいくかということについてはどのようにお考えでしょうか。

○山口　昨年度からのホームページのリニューアルなど、ハードの部分ではどんどん変化して便利になっていく、これはすばらしいことですが、一方ではやは

り、何を発信していくのかというところがやっぱり大事になってくる。だから、今までどおり、この学会の掲載論文が教員採用や資格審査でとても価値があると評価されて行くことは大切ですが、そういうニーズ以外のところで、先ほどから出ているような実践報告の積み重ねに使えるような情報提供はできないかと思います。現状では、本学会に限らず、実践の報告がまだ完成されないレベルのものも多いのでそのままメタ分析に生かすことはできないと思うのですが、たくさんの報告がその媒体を通じて見られるようになったときに、それぞれの人がメタ分析に近い形で活用できるような情報が、1つのキーワードを介してたくさん出てくるというように、それぞれの学会がもつ論文の中だけででも活用できるようになっていけば、それをベースにしてまたレベルの高い実践ができるように思います。

今回、創刊号からのすべてが、ホームページを介して見られるようになったというのはすばらしいことですね。私も本学会の雑誌のほとんどを冊子として持っていますが、パソコンの前に座りながら見られるようになったというのはやっぱりすごい進歩だと思うし、川口先生たちが、目標を明確にして「この3年間の中でやるぞ」と決めてやってくれたからできたことだろうと思います。お金もかかりますけれども、お金をどう使うかというところをやっぱり意図的に掲げることが大切ですね。

科学学会が英文誌と2つ出していますよね。本学会もそこを目指すかと言われると、国際化という課題が従来から指摘されているように、それだけの力量が会員の中にあるかという問題があります。では、何を目指すのか・・同じことを繰り返して話していますが。

○司会　例えばこの学会が設立された当時、看護系の大きな学会といえば、日本看護研究学会とそれから数年遅れて設立された日本看護科学学会しかありませんでしたが、看護の領域がだんだんと分化した今日では、専門分化した看護系の学会が数多く設立されています。それは臨床に直結したところがあって、例えば臨床領域の人たちはやはり自分が所属している分野の看護系学会に入った方がメリットがあると思っているのではないでしょうか。それに対して日本看護研究学会や日本看護科学学会はちょっと敷居が高いというような感じがあると思います。そういうような状況で、この学会がどのような方向性をもって進んでいくのかということや日本看護科学研究学会とどう違いを出していくかというようなことについてお話いただけたらと思います。

○山口　臨床の人たちが学会に参加する理由というのは、発表するよりも勉強したいという意識も強いように思います。特に、学会の目的や活動範囲が特定の看護問題や領域に限定されているような学会では、臨床の方が、これを学ぶといった目的を持って参加する傾向が強いのではないかと思います。本学会は総合的な学会なのでそうとも言えないかもしれませんが、そういう意味からいって、本当に「あ、これは面白いな」とピックアップできて、参加したい、学びたい、自分たちの研究を更にレベルアップさせるために役立ちそうと感じて、参加してもらう事が必要だと思います。第1部の座談会で松岡先生たちのお話の中で、「発表しっ放しなのではないか」というご指摘があったことを聞いたのですが、それは、本学会に限らず、演題数が増えてきている学会はそういう傾向は否めないですね。示説では座長のいない発表もあります。細かい運営は、学術集会に一任されているので理事会などからの方針を出してはいないのですが、座長をおくことで、その群や演題のポイントや課題のようなことをお互いに確認しあうことをしていけば「発表しっ放し」ではなくなるのかもしれないと。

■学会発表の記録と学会雑誌との関係

○司会　松岡先生の発言で出たのは、ポスターセッションのことです。ポスター発表で座長はいますが、学会発表が本当にそこにいるフロアの人だけで終ってしまい、あとは何も形に残っていないということです。例えば、座長が担当したセッションをまとめて学会雑誌に掲載させるということが必要ではないかということです。本学会雑誌も以前は発表要旨、質疑応答が掲載されていましたが、現在はありません。例えばセッションの座長が、講演も含めて簡単にどういう内容の発表があり、感想や意見が述べられていると学術集会の記録として残るのでよいと思います。ある学会雑誌の編集委員を担当していますが、一号は学術集会の内

容を特集した企画を行っています。編集を担当している出版社の方が言うには学術集会の内容を特集した学会雑誌の方が売れるらしいです。そのような話を聞くと、やはり、学術集会でどういう研究が発表されているのかというのは、特に臨床の人には興味があるのかなと思います。ですから、日本看護研究学会も学術集会終了後に発表内容をどのように記録保存していくかということは、今後の学会雑誌の中での一つのテーマなのかなというような感じがします。どうでしょう、川口先生。

○川口　英文誌のことから言うと、まだその段階ではないというのは悔しいけど、日本語を書けてもいないのに英語どころの話じゃないというのがまず１つあります。それから内容をまず議論しなければいけなくて、母国語である日本語で内容のすばらしいものも出せないのに外国誌に載せてどうなるんだ！というのもあります。正直言って、医学の現状を見ていても、国際学会で発表して評価されているのはほんの一部の人たちのように思います。あとは英文を書かなきゃいけないという、半ば脅迫的に言われている人たちは、とにかく英語で出すのです。けど、その人たちの書いた日本語を見ると読めないぐらいのものだったりするのです。だから、英語で書くことがイコール国際化とは僕はまったく思っていなくて、日本語の良い論文が出たら、極端な言い方をすれば、翻訳会社に頼んで翻訳してもらって海外に発表すればよいのではないか・・・と思うのです。

学会が、その窓口になってもいいぐらいだと私は思っています。つまり、研究学会においても毎年のように300題もの研究が発表されています。その中から、チョイスされたものが正式な論文になったときに、国際的な学会にも出せる支援をするという仕組みが（判断できる目も必要だが）必要だと思います。英文誌＝国際化ということから言うと、そういう流れを、学会がきちんと作るべきだと思います。

○司会　医学系の論文でも外国雑誌に投稿する人は、英文校閲に出しています。

○川口　だから、向こうはちゃんとした校正者がいて英文誌の編集をしていると思うんです。日本人が出してきたら半分以上直されちゃいますから。だけど、それでもしようがないと言えばしようがないんです。誰かが背中を押すか、英文を書く専門家に見てもらって手助けしてもらうなどの支援を受ければ大丈夫じゃないですか。だって母国語でない英文をそのまま書けないですよ。

もう１つこれから大事だと思うのは、毎回毎回学術集会ごとに分類が違うじゃないですか。やっぱり大きな大分類と中分類が、学会はこういうジャンル分けでやっていくんだという何かがあって、それが教育にもつながることだと思うんです。小分類を変えてもよいのですけど、大分類まで変えてやるというのはばかげていると思うんです。

○司会　統計を取ろうと思っても難しいです。

○川口　そうそう。だから、もうめちゃくちゃなんです。

○山口　このあたりは、本学会の特徴で、いいところでもあり悪いところでもあると思うのですが、「自由度の高さ」ということの影響なんだと思います。学術集会も、これまではその会長にすべてを任せてきたのですが、最近、学術集会を担当しようと準備している会長さんのところから、「こんなに大きな学会なのに、学術集会に対しての決まり事がないのか」というクレームが度々寄せられているということがあります。

○川口　丸投げなんですね。

○山口　そう、だからその分自由度が高く、どんなふうにやってもらっても構いませんということなのですが、反面、うまくいかなかった場合も学術集会の責任で処理してくださいということになっていて、こういうスタンスを取ってきた・・今もそうですが、このことについて最近論議になったんですよね。今後のことで言えば、法人化することが決まっていますが、そうすると学術集会の収支も含めて学会の収支としてみるようになる訳なので、学術集会に対するある程度の会計上の関与が必要になってくると思います。例えば学会員以外の方に講演をお願いしたときの謝礼の基準を決めたり、内容的なところで、先ほど話しにでた演題の分類の仕方などの方針を学術集会に対して提示する必要が出てくるのではないかと思います。特に、分類のことは遅過ぎる感がありますが、論文の体系化になかなかつながっていかない理由もそのあたりにあるのかもしれないと思いますね。

○川口　私は建築学会しか知らないのですけど、建築学会は３分冊あって、構造と計画と環境があります。構造は物理学ですので、何が書いてあるのかはさっぱりわからない。それと同じように看護も専門分野別になると何もわからないじゃないですか。これから専門分化していくと、看護もわからなくなると思うんです。建築では「構造」はサイエンスなんです。「計画」はアートなんですよ。計画系の論文内容は心理とか社会とか実態調査から始まって哲学もあるわけですよ。「環境」を考えた場合、人間が生活する環境周りを物理量としてとらえ、いわゆる工学、環境工学としての、中分類があるわけです。中分類も１、２、３とか、細かく訳のわからない言葉を設定しないというのが学会の目指している役割だと思います。他の看護系の学会で言うと、看護技術学会みたいなところは毎回変わって、もう会長の色があるのは、アーティストの学会だからだと私は思っているから、あれはあれでもいいんだ・・・と思うのです。研究学会はやっぱり大きな学会で学術を体系化の方向で検討するとしたら、やはり赤、黄、緑みたいな学術学会としての窓口を準備しないと、学問的な収束がいくら経っても見えてこないんじゃないかと思います。

○山口　同様のことが、昨年あたりから活動している看保連の話し合いの中でも出てきて、診療報酬のなかに何を技術として出していくのかを考えるときに、本学会の掲載論文が、何かに集約して体系化がされてきていないといったことが指摘されているようですが、先ほどの分類や分野の定義付けのようなことを学会の中で明確にする必要があったかなと感じます。

○司会　今回の学会雑誌発刊30周年記念誌を作成するにあたり、今までに掲載された論文を１巻から分類分けをしたときに、やはりどのように分類分けするかというところから考えましたた。その時に、日本看護系学会協議会に加入している学会のリストから選んで分類を作成したという経緯があります。研究領域の分類分けがなされていれば、論文の分類分けももう少しスムースにいったのかもしれません。

○川口　発表しただけで終わるというよりは、そういう営みにつながっていけば発表しただけでは終わらない。だからやっぱりどんな学問でもリファレンスというか、今まではどうだったのかなというのを定期的に分析していくことで分類が出来上がれば無駄じゃなかったと思います。

○山口　10年ほど前、20巻まで発刊されたところで、学会雑誌発刊20巻記念特集号としてタイトルとキーワード集をはじめて作り、その後年度末に巻末をつけるようになったのですが、あのようなことからでも中身の分析につなげられるとよかったと思います。川口先生たちが2000年に掲載論文の傾向を看護科学学会と比較してくれたときに、多少その内容分析をしてくれたのですが、そこを学会の仕事として継続してやっていかないといけないというのは感じます。

○司会　今回、学会誌発行30周年という記念号を作成するにあたり、１巻から29巻の内容分析まではできませんでしたが、論文の抄録を分析して、先ほどの研究領域の分類に分けてみました。それを記念誌の巻末に掲載しようと思っています。

○山口　そういうものをベースにして、これからは投稿するとき既にそこから入ってきてもらうという方法がとれるといいですね。

○司会　他の学会誌や雑誌から引用するだけではなく、自分たちが所属する学会の学会誌に掲載された論文を引用して、自分たちの研究が今までの研究からどのように進んできたかという流れを書いていただきたいと思います。

○山口　分冊というのはすごくいいですね。建築学の中でも計画のところがアートだという話は、興味がありますね。最近のテレビコマーシャルで、熟年世代が離婚しないためにリビング内に何メーターの距離が必要・・という提言を具体化しているものがあったのですが、それなどは人間の意識から発していることだと思うんですね。建築学会の中にそれだけのパーツがあって、分野があって、それぞれの発想や思考過程が全然違っているというのはすごく興味深い。看護って本当にそういう類のことがあるじゃないですか。分野の違いをちゃんと分冊にして、これはこの分野の研究集なんだよというふうなことを、大きな学会の中でできるといいですね。

○川口　建築学会の場合には2,000題とか3,000題のオーダーですから、抄録集を出すのはやめちゃったんで

す。３つ頼んだら片腕で抱えられないくらいの厚さなんですよ。で、聞くところは決まっているので、それを引き破いて、持てるぐらいにして学会に行くんです。さすがにそれでは・・・というので建築学会では冊子体はやめちゃったんですよ。で、CD-ROMです。CDが３つ届くので、その中で３つのCD-ROMに分かれているから、必要な部分を印刷などして持っていけばよいのですよ。

○山口　会員であることの特典として雑誌が配布されるということにこだわらなければ、それでいいですよね。以前、プログラム集などのCD-ROM化の話が出たときに、会員以外の人にもコピーできることが問題になって実現しなかったのですが、もうそんな時代ではないということですね。

○川口　そうなんですよ。だから発表したりということにやっぱり会員としてのメリットというか、発表できるという喜びを。

○司会　学術集会に単に参加することではなく、とにかく発表するということですね。

○川口　外で見ている人はどうぞ見てくださいと。

○山口　発表の場があるというところが会員の特典なんだという認識を持つことですね。

○川口　自分の言葉から、電子化されて多くの人に伝わるんだというために窓口を開いているわけですから。消極的に勉強するだけだったら、そんなことを言ったら会員数が減ってしまうかもしれないけど、やっぱり誰でも見れるようにしたらよいのではないでしょうか。

○司会　私自身のことを振り返ってみると、最初は自分で発表するというのは何か恥ずかしくて嫌だなという感じがありましたが、最近のように忙しくなってくると、自分が発表しないのならば、学術集会に行ってもしようがないみたいな感じになってきます。やはり自分たちが発表するということが大切ですね。

○川口　そういうところで発表して衆目にさらされれば良いのであって、発表するということが、もし教員とか大学の職員として大事だったら会員になるしかないわけです。臨床家も含めてそうですが、臨床家の教育ポストをもっと早く得なきゃいけないと思います。それぞれの教育施設の努力だとは思うのですが、一生懸命主任クラスの人たちが教育・研究しているわけですから、その方たちが報われるような体制を作らなければ、臨床で働きながら研究発表していくことの意味が見えてこないように思えます。臨床で実践を行いながら、教育歴と研究歴をつけた人こそが将来、学術界のみならず教育界においても、リーダーシップをとっていくと思うんですよね。

■看護基礎教育のレベルアップと学会の役割

○司会　それが最近、よく聞かれるようになった臨床教授というものですか。

○川口　某医科大学などでは、すごいアバウトな基準なんですけど、こんなのでいいのかと思うのですが、看護の臨床教授の人事規定があるんです。ここだけでなくて、ほかの大学も。多分、教育ポストにある人のみでは、教育でききれないんだと思う、臨床の。今までは看護学校の流れで、看護学校の先生たちが学生を置いていったらあとはお任せみたいなところがあるじゃないですか。もしそうだとするならば、任せられる人が教育の資格があって、そしてちゃんとしたポストが与えられるべきなのではないでしょうか。はじめはアバウトな基準だけど、将来はもっと細かくできていくんだろうなとは思いますけどね。

○山口　最近、専門看護師課程が増えてきて、臨床力をもった修士修了生が現場に帰ってきたときに、大学と離れないで研究をずっと続けていく。そういうところで大学の役割、大学だけでなく学会はそういう人たちをどんどん吸い上げて、その臨床力みたいなところを大切にしたいと思います。

　実は、今年度は選挙のあとなので、４月から新体制になり、新理事長・副理事長のレベルで方針を話し合う機会もあったわけですが、国際化という継続の課題と共にもう１つ出されたことは、昨今特に基礎教育のレベルで盛んにいわれている、国内の看護実践能力をどう上げるかということです。学会がどういう役割をすれば国内の臨床力そのものを上げていくことに関与できるのかということが話題になりました。もっと足元を見て、自分たちが看護をやれているかやれていないかというところに学会が直結するべきだといった話ですが、これから法人化をしていくときに、学会が一体何を目指すのかというところです。会員のニーズも

確認する必要はありますが、発信する側の問題でもあります。

■法人化について

○司会　今話題の中で法人化ということが出てきましたけれども、日本看護科学学会は去年12月15日に、有限責任中間法人日本看護科学学会の定款が承認されましたということで、法人化されました。これからは、学会の将来的なことについて、すなわち、法人化ということと国際化というテーマで最後まとめていきたいと思います。まずは、法人化ということについて、研究学会としてはどのように考えていらっしゃるのかということを理事長から伺いたいと思います。

○山口　法人化に関しては、歴史的なところで言えば10年ほど前に本学会は文部科学省を監督省庁とする公益法人を目指そうという検討をしましたが、その時点でいくつかの条件をクリアしなければならないことがわかり、例えば、2,000万円の固定資産を有すること、それから独自の事務局があり常勤の事務局員が雇用されていることなど、他にもいくつかあり、まずはそれらを整備することが優先であろうということで、その時点での法人化を断念しています。しかし、完全に断念したということではなく、将来構想の中で継続して検討を続けてきたという経緯があります。約５年ほど前に科学学会の法人化の動きによって本学会の姿勢を問われる機会があり、それに連動する形で前々期の川村佐和子理事長や早川和生理事が具体的な検討を始め、前期に引き継がれてきたわけです。科学学会とは数回にわたって話し合いを持ちましたが、ちょうどそのあたりで公益法人制度の改革に関する法律が変わることがわかり、本学会はその法律に向けて準備していく方針をとることにして、今は、昨年度制定された法律の施行に向けて準備をはじめたところです。

　そういったような経緯はともかく、私たちは法人化するんだというところの意思は従来からの理事会の中にあったわけですが、一時的に科学学会との統合などの話も出た中で、別で行くのか、一緒になってもいいのかと問われたときの回答として、どういう形の法人になるのかということについて即答できなかったということがあると思います。

　昨年度から公認会計士さんとも話を進めているのですが、会計の形は学会の事業のやり方で決まるわけですから、それを学会として早く起案・意思決定していかなければならないということだと思います。つまり、非営利ではあるけれどもどういった事業を行い、どのように社会に還元していくのかによって、公益性が問われ、公益認定が受けられるかどうかが決まるわけです。これは法人化そのものとは別のことなのですが。先ほどからずっとお話をしてきた研究や学会雑誌の動向、それから学会が目指すことというのが即この法人の形になってくる。なので、そのあたりの討論をしっかりとやって、その上で法人の形も決めていかなければいけないと思います。

○司会　本当に早急に、この１年ぐらいでどうするかはっきりさせなくてはいけないということですね。

○山口　川口先生が先ほどから言われているような学会雑誌の目指す方向の根底にあるところに今のヒントがものすごくたくさん入っていたので、そういうようなことを事業展開する形に具体化して、字に落としていって、こういうこともある、こういうこともある、どこを一体目指すんだというところを理事会・評議員会へ具体的に提案する形で、進めていきたいと思います。

○川口　……事業をしないと法人になる意味がないので、冊子体は今みたいな媒体ではなくて、無くなるというよりは別の形に冊子体は残していいのかもしれない部分はあって、それは無料で配るのではなくて、出版事業として５年分の論文の中で優れたものを本みたいにして売ってしまうのもよいですよね。で、「日本看護研究学会出版会」みたいなものを作って社会にPRしていく。あるいは専門知識がある集団なので、何かそれに類する出来事が起こったら果敢に出ていって専門家としての役割を果たすとか、やはり事業が具体的にみえないと公益、非営利公益というのは見えにくいですよね。お宅はどのような社会貢献をしているのですかと言われちゃう。

○司会　最近、新聞を見ると学会主催の公開講座や市民講座の広告がよく掲載されています。

○川口　科学学会でも必死になって社会貢献について検討しています。私の勝手な思い込みですが、何か科学

学会はそんなことではなくて、もっとアカデミズムを追求すればいいんじゃないのかな・・・。と、思ったりもします。

○山口　公益性をアピールするということはなかなか難しいですね。

○川口　事業を明確にするということがすごく大事なんでしょうね。学会は、学会としての公益性というのを発揮するためには、やはりその学会が何を社会にしてくれるのかと。それが総会前日に行なうシンポジウムでお茶を濁していていいのかは疑問です。市民講座などを行なっても、もうあれも本当にどれだけ市民のためになっているのか全然分からないと私は思うのですが・・・。

○山口　市民に貢献するということはその専門性を高めるということだというふうに解釈してもいいと思うんですよね。だから専門性を高めたり看護の質を良くすることは、結果的にそれは会員の媒体を通してなんだけど、実際は市民に還元されている・・そこのところが抜きにされて、市民に還元されていないように思われているのではないかと。

○川口　米国のデータベースなんか見ていると、MEDLINEも市民向けのMEDLINEがあるじゃないですか。何か専門家が見るものと普通の人が理解できるものとは分けた方が良いと思います。もし事業としてホームページを情報媒体とするなら、市民向けのものがある必要があると思うんです。

○山口　書かれた論文がどのぐらいの一般性をもっているのかとか、どれぐらい蓄積された結果としての論文なのかというところは市民から見えにくいでしょう。で、今ってインターネットでキーワードを入れればいろんなものが出てきて、その信憑性なく情報提供されていると思うのですが、その弊害が学生にも出ていて、学生が判断力のないところでいろんな情報を引いてくるわけです。それは市民の方でも一緒で、これだけセカンドオピニオンだとか、いろんな情報が大事だよといわれると、情報を持って自分たちが主体的に医療に参加しなければならないと思うわけですが、取り込んでいい情報なのかどうかは、本当に見えにくいですよね。そういうことがわかりやすく発信できるようにすることが本当の社会貢献なのかなという気はしますけどね。

■国際化について

○司会　もう１つのテーマとして、国際性ということに関してはどのようにお考えですか。

○山口　そうですね。国際化ということについて中心になってそのことをやっていただける人を１名は指名理事としてお願いしました。また、副理事長である田島桂子先生が非常に国際性豊かな経験をお持ちで、現在も活動をしていらっしゃるので、いろんな情報を持った人たちに集まってもらって、どのような交流、もしくは学会参加などの形があるのかを検討してもらいたいと思っています。学会が行っていることを海外のある場所へ発信することや、もう１つは文化比較研究のような活動を共同でできるような支援をしていくとか・・。それで、お金がかかるとは思うのですが、効率よくやれたらいいと思っています。例えば、本学会の学術集会に外国の人に参加してもらおうと思うと、それが英語圏の方が１人でも、アジアの方が一人でも、やっぱりすべてのサービスをしないと失礼だし、参加できないと思うのですが、それではいかにも効率が悪い。それよりは海外の方と共同研究をしようとしたときに学会がサポートできるようなシステムはないかとか、もう少し、研究を行う側の立場からの交流もあるのではと、話し合いをはじめたところです。

○司会　例えばアジアの各国の看護系学会とうまく連携して合同の国際学会を開催するとかはいかがでしょうか。

○山口　先日、科学学会からの世界看護科学学会の提案がありました。予算に関わることであり、２週間くらいの期間での回答を求められたこともあって、今年度は辞退というお返事を差し上げたのですが、いろんなやり方があると思うので、本学会としてどんな形から進めていくのかを検討し、この３年間の課題はとにかく一歩を踏み出すことがまず必要なのではないかと思っています。

○司会　そろそろ時間になってしまいましたが、最後にまとめとして、まず川口先生から将来に向かって本学会がどうしていくかということについて簡単にお話していただけたらと思います。例えば、これから３年間

編集委員長を担当されるわけですが、この３年間で何か計画されていることがあればお話しください。

○川口　言い残したものはないのですが、あと３年で確実に日本看護研究学会の役割が、会員にも、それから国民にも見てわかるような学会のあり方を模索し、編集委員長として、これまでの研究成果が社会に還元できるような仕掛けを見える形でアピールしていく事が大事だと思っています。

　それから、他の学会を見ていて思ったのですが、学会で国際プロジェクト研究のための資金を取ってくるとか、大型の研究費を取って、学会の力を結集して成果を挙げていくことも大事だと思います。それが国際推進になったらいいなと思います。

○司会　最後に山口理事長，いかがですか。

○山口　今日はこれからのことを話し合う中でいろんなヒントが出てきてよかったなと思います。特に、会員の特典が今までのように、学会雑誌をもらうとか、研究成果をいただくことではなく、発信する側になれることが最大のメリットなんだということをもう一度確認することで、何か細かいいろんなことを捨てることができるという感じがしてきました。だとすれば本当にそういう発表の場をしっかりとこちらが意図を作って整備していくことが大事になります。その１つがさきほどの分類の話でもあり、分冊のことでもあるのですが、別の２冊目を出すのだとすればどういう類のものを出さなければいけないのかだとか、そういったようなことがそのまま日本看護研究学会がこの後目指していく方向性みたいなところに直結してくるだろうと思います。30年間のことを振り返った結果として、そういうものが今までできていないことだからこれからやっていかなければいけないということもあるし、更に発展していくための自分たちの独自の色合いみたいなところをもう一度しっかり話し合って、納得できるところでやっていきたいですね。これを機に次のステップへ向かうための３年間、またやっていかなければいけないなという気がしましたね。

○司会　本日はお忙しいところ、どうもありがとうございました。

2　投稿論文の分析

年度別投稿論文受付数と学会誌掲載経過について
（昭和53（1978）年～平成20（2008）年）

2008年９月１日現在

年	度	投稿総数	採用数	発行巻号	掲載論文数	備考	
1978	昭和53			１巻 １号・２号	7		
1979	54			２巻 １号・２号	8		
1980	55			３巻 １号～３号	14		
1981	56			４巻 １号～３号	12		
1982	57			５巻 １号～３号	10		
1983	58			６巻 １号～３号	12		
1984	59	詳細について報告書類なし		７巻 １号～４号	18	（１・２合併号）	
1985	60			８巻 １号～４号	10	（１・２，３・４合併号）	
1986	61			９巻 １号～４号	15	（１・２合併号）	
1987	62			10巻 １号～４号	13		20巻特別号（原著目録）
1988	63			11巻 １号～４号	12		
1989	平成元			12巻 １号～４号	13	（１・２合併号）	
1990	2			13巻 １号～４号	11		
1991	3	35	17	14巻 １号～４号	17		
1992	4	13	11	15巻 １号～４号	13		
1993	5	17	8	16巻 １号～４号	9		
1994	6	17	12	17巻 １号～４号	12		
1995	7	24	15	18巻 １号～４号	10		
1996	8	15	8	19巻 １号～４号	15		
1997	9	24	11	20巻 １号～５号	8	臨時号 → ３号とし，１号～５号	
1998	10	28	14	21巻 １号～５号	7	原著７	
1999	11	45	26	22巻 １号～５号	15	原著13・総説２	
2000	12	47	16	23巻 １号～５号	22	原著18・研究報告３・資料１	
2001	13	57	36	24巻 １号～５号	19	原著13・研究報告５・技術実践報告１	
2002	14	70	38	25巻 １号～５号	30	原著21・研究報告６・技術実践報告１・総説１・資料１	
2003	15	70	33	26巻 １号～５号	37	原著10・研究報告23・技術実践報告１・資料３	年度 ４月20日 １号発行
2004	16	52	32	27巻 １号～５号	40	原著13・研究報告20・技術実践報告２・総説１・資料４	Ａ４判
2005	17	78	40	28巻 １号～５号	35	原著14・研究報告18・資料３	
2006	18	71	36	29巻 １号～５号	40	原著13・研究報告19・技術実践報告２・資料６	表紙改訂
2007	19	79	30	30巻 １号～５号	39	原著17・研究報告18・技術実践報告３・総説１	
2008	20	36		31巻 １号～５号	28	原著10・研究報告17・技術実践報告１	９月１日 31巻４号
合	計	778	383		551		

＊但し、年度投稿分の内、学会誌掲載は査読の経過により次年度、次々年度の場合もあり、結果的に採用掲載された数である。

■はじめに

日本看護研究学会雑誌が発刊されて2007年（平成19年）で30周年を迎えた。本記念誌は、これまでに発刊された学会誌、編集委員会および学術集会の足跡を振り返えることによって、本学会の学術的な蓄積を明らかにすることを目的として企画された。ここでは過去29年間に投稿された論文を分析することで、本学会の特徴や30年間の研究内容の推移について記述する。

■方　法

1．分析対象論文

学会誌１巻１号（1978年；昭和53年）から29巻５号（2006年；平成18年）に掲載された原著論文364編を分析対象とした。

2．分析方法

論文のタイトルおよび要旨から研究領域および研究デザインを判断した。

3．研究領域

投稿された論文を分類するために研究領域を15に分け、この研究領域にあてはまらないものは「その他」に分類した。15領域は下記のとおりである。

① 看護理論
② 看護管理
③ 看護技術
④ 看護教育
⑤ 看護倫理
⑥ 精神保健看護
⑦ 母性・周産期看護
⑧ 家族看護
⑨ 小児看護
⑩ 急性期看護・クリティカルケア
⑪ 慢性期看護・リハビリテーション看護
⑫ 緩和ケア・ホスピスケア・がん看護
⑬ 高齢者看護
⑭ 地域看護・在宅看護
⑮ 感染看護
⑯ その他

4．研究デザイン

研究デザインは、「質、量、実験・準実験、混合、その他」の５つに分類し、研究デザインを区分できないものを「不明」とした。実験・準実験研究は量研究に含まず、別に分類した[1)]。また混合は、質研究と量研究の２つのデザインを含むものとした。

■結　果

1．領域別論文数（表１）

分析した364論文で最も多い研究領域は「看護技術」の71編で、以下、「看護教育」(57編)、「慢性期看護・リハビリテーション看護」(32編)、「地域看護・在宅看護」(31編)、「精神保健看護」(24編）であり、この５領域で全体の59.1％を占めた。

実験研究および準実験研究の定義

*実 験 研 究：現象にかかわる多くの要因の中から、いくつかの要因だけを選び出して、それ以外の要因は同じ状態に保つようにコントロールした状態で、選び出した要因間の関係性を検証していく研究

*準実験研究：実験操作を行うが、実験に伴う統制群の設定や無作為化などは強く規定しないで行う研究

表１　領域別論文数

看護理論	8	小児看護	13
看護管理	22	急性期看護・クリティカルケア	7
看護技術	71	慢性期看護・リハビリテーション看護	32
看護教育	57	緩和ケア・ホスピスケア・がん看護	15
看護倫理	3	高齢者看護	16
精神保健看護	24	地域看護・在宅看護	31
母性・周産期看護	15	感染看護	22
家族看護	6	その他	22

表２　領域別論文数－５年ごとの推移

	1978 -1982	1983 -1987	1988 -1992	1993 -1997	1998 -2002	2003 -2006	合計
看護理論	4	4	0	0	0	0	8
看護管理	0	2	6	3	7	4	22
看護技術	8	18	22	8	8	7	71
看護教育	8	4	9	17	12	7	57
看護倫理	0	0	1	0	0	2	3
精神保健看護	2	0	2	4	8	8	24
母性・周産期看護	4	5	3	1	2	0	15
家族看護	0	2	0	0	3	1	6
小児看護	5	3	1	1	2	1	13
急性期看護・クリティカルケア	2	2	2	0	1	0	7
慢性期看護・リハビリテーション看護	3	4	5	3	11	6	32
緩和ケア・ホスピスケア・がん看護	4	0	5	2	0	4	15
高齢者看護	3	4	2	1	4	2	16
地域看護・在宅看護	2	7	5	8	6	3	31
感染看護	5	9	0	2	4	2	22
その他	2	6	3	4	4	3	22
合計	52	70	66	54	72	50	364

２．５年ごとの領域別論文数の推移（表２、図１）

１）第１期：1978年～1982年

掲載論文数は52編であった。領域別では、「看護技術」と「看護教育」がそれぞれ８編で、続いて、「小児看護」および「感染看護」がそれぞれ５編であった。この４つの領域の掲載論文数は26編で、この５年間の掲載論文数の半分を占めていた。

２）第２期：1983年～1987年

掲載論文数は70編に増加した。領域別では、「看護技術」が18編で、続いて、「感染看護」が９編、「地域看護・在宅看護」が７編であった。この３つの領域の掲載論文数は34編で、この５年間の掲載論文数の約半分を占めた。

３）第３期：1988年～1992年

掲載論文数は66編であった。領域別では、「看護技術」が22編で、続いて、「看護教育」が９編、「看護管理」が６編であった。この５年間では、「看護技術」に関する論文が1/3を占めた。

４）第４期：1993年～1997年

掲載論文数は54編で、1988年～1992年の５年間と比較して12編も減少した。領域別では、「看護教育」が17編と

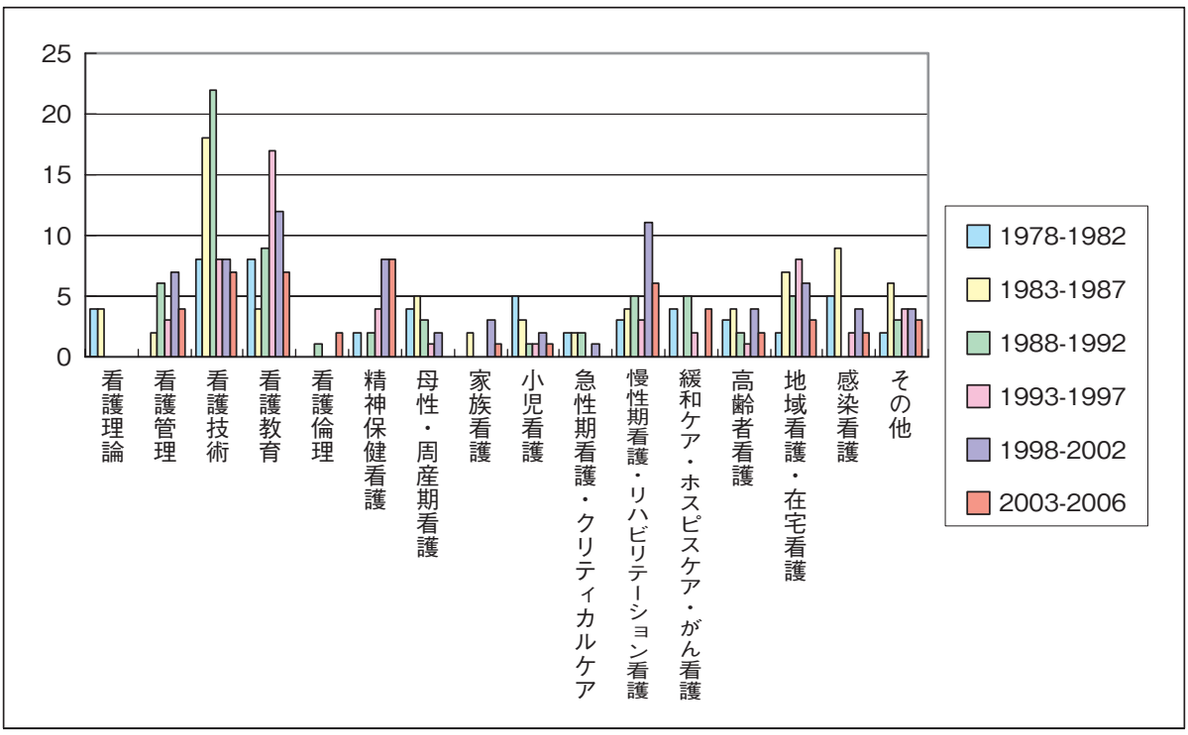


図１　領域別論文数－５年ごとの推移

増加し、「看護技術」および「地域看護・在宅看護」がそれぞれ８編であった。この５年間では、「看護教育」に関する論文が約1/3を占めた。また、この３領域の掲載論文数は33編で、この５年間の掲載論文数の61.1％を占めた。

5）第5期：1998年～2002年

掲載論文数は72編で、1993年～1997年の５年間と比較して18編も増加した。領域別では、「看護教育」が12編、「慢性期看護・リハビリテーション看護」が11編、「看護技術」および「精神保健看護」がそれぞれ８編であった。この５年間でも引き続き「看護教育」に関する論文が最も多かった。また、この４領域の掲載論文数は39編で、この５年間の掲載論文数の54.2％を占めた。

6）第6期：2003年～2006年（４年間）

この期間は４年間であるため1978年～2002年までの５年間のデータとは直接比較することはできないが、特徴を記述する。掲載論文数は50編であった。研究領域別に比較してみると、これまでの結果とは異なり、領域間に掲載数の差があまりはっきりみられなかった。最も多かった領域は、「精神保健看護」の８編、続いて、「看護技術」と「看護教育」の７編、「慢性期看護・リハビリテーション看護」が６編であった。この５年間でも引き続き「看護教育」に関する論文が最も多かった。また、この４領域の掲載論文数は28編で、この５年間の掲載論文数の56.0％を占めた。

３．研究デザイン別論分数（表３）

分析した364編のうち、量的研究が192編（52.7％）、実験・準実験が118編（32.4％）あり、この両者を合わせると310編で、全体の約85％を占めている。質的研究は39編で、全体の10.7％であった。

表３　研究デザイン別論分数

質	39
量	192
実験・準実験	118
混合	9
その他	3
不明	3

４．５年ごとの研究デザイン別論文数の推移（表４、図２）

量的研究が、第１期（1978年～1982年）から第５期（1998年～2002年）まで増加傾向がみられた。

表４　研究デザイン別論文数－５年ごとの推移

	1978 -1982	1983 -1987	1988 -1992	1993 -1997	1998 -2002	2003 -2006	合計
質	11	9	0	1	7	11	39
量	20	28	38	37	45	24	192
実験・準実験	13	30	27	16	18	14	118
混合	5	1	0	0	2	1	9
その他	3	0	0	0	0	0	3
不明		2	1	0	0	0	3
合計	52	70	66	54	72	50	364

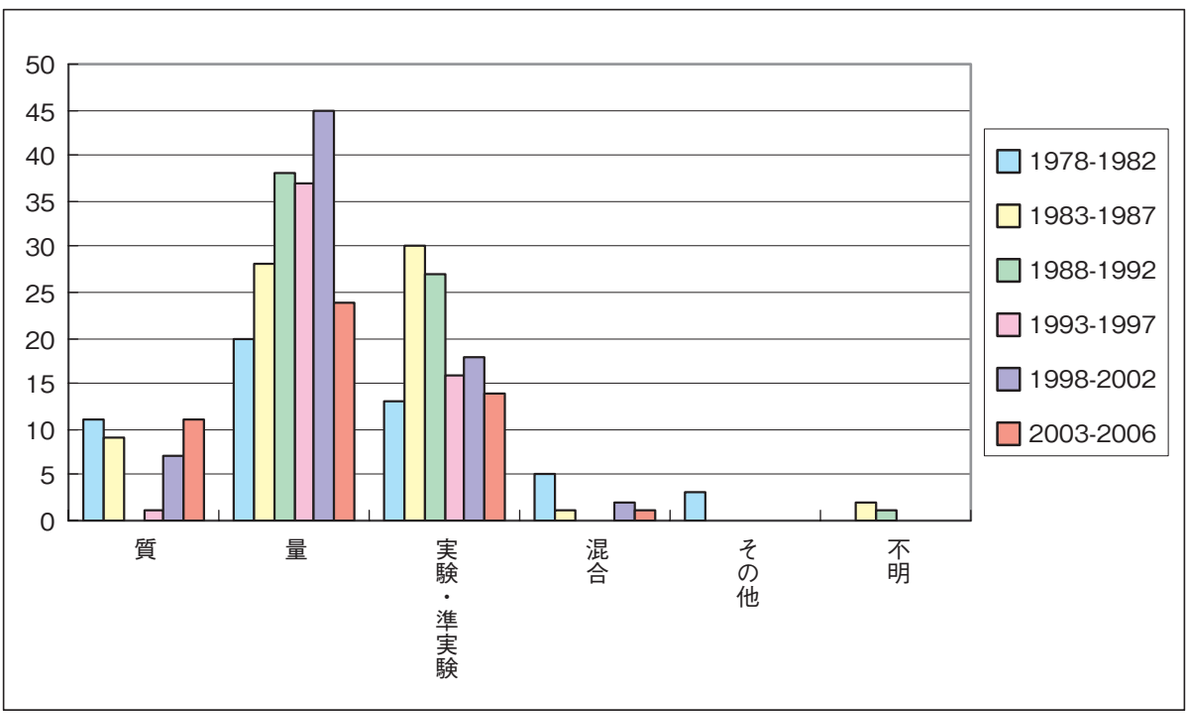


図２　研究デザイン別論文数－５年ごとの推移

■考　察

１．領域別論文数（表１）

分析した364論文で最も多い研究領域は「看護技術」の71編で、次いで、「看護教育」の57編であった。「看護技術」の論文数は全体の19.5％、「看護教育」は15.7％であった。看護技術に関する論文数が多いのは、看護の最も基本的な看護技術を研究対象とする教育者や研究者が多いことや、また、看護技術の評価を数値として示しやすいことが関係しているのではないかと思われる。

次に多かった研究領域は「看護教育」であったが、このことは本学会員の多くは教育者であるために、看護学生や教員を対象にした研究が多くなったのではないかと思われる。また、本学会の母体が四大学（弘前大学、千葉大学、徳島大学、熊本大学）の教育学部特別教科（看護）教員養成課程の先生方が主体になっていることも影響していると思われる。

２．５年毎の論文数の推移（表２、図１）

第６期（2002年～2006年；４年間）は50編であるが、だいたい各５年間で、50編～70編の投稿がみられた。第４期

（1993年～1997年）は第３期（1988年～1992年）よりも原著論文が12編も減少したことは、この時期に看護大学の急激な増加による教員の移動などによる時間的な制約が関係していたのではないだろうか。

３．５年毎の領域別論文数の推移（表２、図１）

１）研究領域数の変化

研究領域は15領域とし、15領域に含まれないものを「その他」として、16領域に分けて原著論文を分類した。第４期（1993年～1997年）は「その他」を含めて12領域あり、その他の期では13領域もあり、本学会誌へは多くの領域からの投稿があり、看護学全般の学術雑誌といえるのではないだろうか。

２）研究領域の変遷

また、研究領域を詳しく分析すると、「看護技術」と「看護教育」が分析した全期間に渡って多くの論文掲載がみられた。本学会誌には多くの領域からの投稿があることを前述したが、「看護技術」と「看護教育」に関する論文が多いことは本学会員の多くが教員であることが関係しているのではないだろうか。

そのほかに、第１期、第２期（1978年～1987年）では、「感染看護」や「地域看護・在宅看護」に関する論文が多くみられたが、第５期、第６期（1998年～2006年）では、「慢性期看護・リハビリテーション看護」、「精神保健看護」や「看護管理」など新たな研究領域からの投稿が増加している。

４．研究デザイン（表３、図２）

本学会誌では質研究が少なく、量研究が多いことが特徴である。その中でも、「実験・準実験」を主体とした原著論文が多いことが他の雑誌に比べて特徴である。研究において、人に関する種々のデータを数値化して示すことは、多くの人が理解しやすい手法である。また、本学会員は看護職者と限定せず、学際領域の研究者や教育者、臨床実践者が多数加わっていることも関係していると思われる。

■まとめ

本学会誌の１巻１号（1978年；昭和53年）から29巻５号（2006年；平成18年）までに掲載された原著論文364編の内容分析を行った。

掲載された原著論文の研究領域は、「看護技術」と「看護教育」が多く、５年毎に分析してもすべての年代で上位を占めていた。また、研究領域は多数に渡り、本学会誌は看護学全般の学術雑誌ではないだろうか。

文　献

１）川口孝泰：看護研究ガイドマップ，医学書院（東京），2002.

3 編集活動

理事長および編集長・編集委員長

■歴代理事長

初　代	金　川　克　子	1992年（平成４年）８月２日～1995年（平成７年）３月31日
第２代	伊　藤　暁　子	1995年（平成７年）４月１日～1998年（平成10年）３月31日
第３代	草　刈　淳　子	1998年（平成10年）４月１日～2001年（平成13年）３月31日
第４代	川　村　佐和子	2001年（平成13年）４月１日～2004年（平成16年）３月31日
第５代	山　口　桂　子	2004年（平成16年）４月１日～2007年（平成19年）３月31日
第６代	山　口　桂　子	2007年（平成19年）４月１日～2010年（平成22年）３月31日

■歴代編集長

編集人・発行責任者：

松　岡　淳　夫	1978年（昭和53年）～1985年（昭和60年）12月31日 １巻１号～８巻臨時増刊号（1978年３月20日～1985年７月20日）※
前　原　澄　子	８巻１，２号（1985年10月20日）※

編集委員長：

草　刈　淳　子	1986年（昭和61年）１月１日～1988年（昭和63年）12月31日 ８巻３，４号～12巻１号（1986年３月20日～1989年３月20日）※
内　海　　滉	1989年（昭和64年）１月１日～1991年（平成３年）12月31日
内　海　　滉	1992年（平成４年）１月１日～1995年（平成７年）３月31日 12巻２号～17巻４号（1989年６月20日～1994年12月20日）※
玄　田　公　子	1995年（平成７年）４月１日～1998年（平成10年）３月31日 18巻１号～21巻１号（1995年３月20日～1998年３月20日）※
山　口　桂　子	1998年（平成10年）４月１日～2001年（平成13年）３月31日 21巻２号～24巻１号（1998年６月20日～2001年３月20日）※
内　布　敦　子	2001年（平成13年）４月１日～2004年（平成16年）３月31日 24巻２号～27巻１号（2001年６月20日～2004年４月20日）※
川　口　孝　泰	2004年（平成16年）４月１日～2007年（平成19年）３月31日
川　口　孝　泰	2007年（平成19年）４月１日～2010年（平成22年）３月31日 27巻２号～（2004年６月20日～）※

［註］※は奥付に記載されていた編集人・発行責任者または編集委員長が担当した学会誌の巻号および発行年月日を示す。任期と異なる場合もある。

日本看護研究学会雑誌 創刊30周年に想う

千葉大学名誉教授
松　岡　淳　夫

学会雑誌が輝かしい創刊30周年を迎えた事は、学会の輝かしい歴史と、その成熟の象徴であり、大変に誇らしいこととお慶び申し上げます。私は、学会の創生に関わり、学会と共に生きてきた者として、自分の歳を感じると共に、打ち込んだ若かった時代の各節目が思い起こされて感慨無量です。

創刊号（1978年；昭和53年）から８巻臨時増刊号（1985年；昭和60年）迄の編集責任者としての思いを書けとのご依頼ですが、私には、学会草創から定着に至る世話人（現理事）会の熱っぽい活動が印象深く思い出されます。当時活躍された世話人は故人となられた方もあり、少なくなりました。そこで、当時の事務局を担当した世話人として学会雑誌創刊の頃の経緯を思い起こすままに書き残したいと思いました。

教育学部特別教科看護教員養成課程（特看）の学科協議会が1975年（昭和50年）に四大学看護学研究会を発足させましたが、その研究会世話人会（後に理事会に改称）のメンバーは、「私達大学で看護教育に当たるものは、看護学の確立発展と看護技術の向上進歩の為に、率先した学会活動が必要」と、共通の考えを常に持って話し合っていました。1977年度（昭和52年度）からは、その組織体制を整え、会則を定めて、看護の研究を志すものに門戸を開き公開して、その領域、立場を問わず会員を募って、全国に380名の会員を擁する学術学会に改め、第３回研究会総会（1978年；昭和53年）を開きました．当時、看護の領域には広く公開された学会は乏しく閉鎖的で、数少ない学術集会についても発表、討議の内容や原著の公開は、時々に商業専門雑誌に選択を委ねていた状況で、他の学問領域での学会活動とはかけ離れた状態でした。当学会でも第１回、第２回研究会での講演発表の内容は、何れも専門雑誌〈看護教育〉（医学書院㈱）により、学会取材と記者の依頼で論文が掲載されました。

然しこれを受けて、世話人会では、山元重光会長（故人）始め、村越康一（元千葉大学教授）、川上澄（故人弘前大学教授）、その他の世話人から、学会を強化するにはこの際、学会独自の機関誌を持つべきだ、との強い提案がされました。これを受けて「学会員の原著論文や研究報告の公刊と保存維持」の為に、学会事業の１つに「機関誌の発行」を加えて、学会機関誌の発刊を決定しました。この早急な決定は、第３回研究会総会（会長熊本大学山元重光教授）の充実した編成と、各講演の高度な内容が学会雑誌発行の良い機会に捉えて、機運が高まったと想われます。

当時、研究会事務局は千葉大学教育学部看護課程に置かれ、私が事務局担当世話人でした。 事務局では、当時看護課程に配属されていた佃久子事務官が、極めて好意的な協力を頂いて、会員の整理、会費の徴収、世話人会議の議事記録の整理など、学会発足初期の事務処理に追われる中で、学会雑誌発刊の準備を進めました。第３回研究会終了後まず、季刊で機関誌発刊の方針の概略を世話人会の許しを得て、後は、どちらかといえば私の独断で計画を進め、事後に世話人会の承認を得るやり方でした。 準備に当たって、看護の領域では参考になるものは見つからず、他の領域学会、特に私の所属した医学会の機関誌の扱いを参考にするほかありませんでした。これが発会後、日本看護研究学会は「特看の医者共の作った学会」と長く他の看護研究集団から誹られた原因だったとも想われます。

学会発足に当たって、収入は年会費2,000円（入会費

なし)、世話人会費5,000円で、380人の会員数では約80万円に過ぎませんでした、世話人会諸費用や事務人件費は奉仕手弁当でお願いし、学術集会の開催費用は担当会長の案配に任せて別会計とすること等、経常経費の削減が世話人会で了承されていたとはいえ、その上の機関誌発行は危惧する世話人もいました。そこで、収入を増やす為、会則に賛助会員（会費５万円）を加えて、懇意な出版社、教材、医療機械業者等に参加をお願いし、その代償に機関誌に１頁広告を掲載をすることを世話人会に認めて頂きました。これで賛助会員11社が加わり、1978年度総収入が135万円の計画ができました。

掲載する原稿の収集は、第３回研究会総会でのシンポジウム「大学における看護教育の検討ー特にカリキュラムについて」のシンポジスト、木場冨喜教授（熊本大学)、松岡淳夫教授（千葉大学)、小島操子助教授（徳島大学)、木村宏子助教授（弘前大学）は何れも世話人で、講演の原著論文を寄稿して頂きました。特別発言をされた野島良子さん（当時一般会員）も学会雑誌掲載のために、会場で配られた発言要旨とは別に、その原著論文を出してくださいました。また、総会事務担当の成田先生（熊本大学）からシンポジウムでの壇上、会場の質疑応答の詳細と一般演題８題の討論質疑の内容を速記をおこし、整理された原稿が届きました。これに会長講演の原稿を頂いて、第３回学会のメインテーマ「看護研究について」に沿った内容の濃い学会雑誌の体裁が整いました。そして、巻頭言を世話人の村越康一教授にお願いしました。他の学会雑誌に倣って、形式、順序、見出しや文字ポイント指定等、一応の編集をがむしゃらに進めましたが、学内で紀要や会雑誌の印刷に関わっていた印刷業者、正文社（有限）に相談し、応援を受けました。当時の手書きの原稿の束を整理し、中見出し頁や賛助会員の広告を挟んで約60頁となることが判りました。印刷部数については、会員配布380部と無料配本先を国会図書館、看護系大学、短期大学図書館、看護協会図書館、国立看護研修センター等約50カ所に絞って500部を計画しました。費用見積もりは、部数に対して版組料が膨大となり、頁や表紙の紙質を落としても、50万円を大幅に超えると聞かされました。然し、これで私はある程度、季刊発行の予算的な見越しが出来て、正文社との打ち合わせに入りました。雑誌の長期保存が出来るため、厚めの表紙、各頁とも上質紙を使うことを要件として、更に50万円以下で印刷をしてもらうことを学会の予算全体を見せて是非にもと、無理にお願いしました。長い付き合いになるので将来を期待して、一応その程度でと受けてもらいました。

表紙は淡いセピア色用紙で四大学看護学研究会雑誌、(Journal of Universities' Nursing Research）と会誌名を入れました。昭和53年２月開かれた世話人会で校正ゲラ刷りを点検していただいて、安堵とご承認を頂きました。実際発送は４月に懸かったと想いますが、昭和53年３月20日（1978年）に創刊号が発行されました。雑誌の発送にも極力経費削減を計るため、会員の所属や職場等でまとめて代表者をお願いして一括小包郵便で送り、配布していただきました。その作業を学部の事務職員佃さんに万事手伝ってもらい確か２日位懸かったと思います。そして、別刷りも有料頒布することが出来ました。苦労しましたが、出版の喜びで快哉を叫び有頂天でした。

以後歴代の役員と学会員の努力で、会員数も増え、投稿原著も増加し、編集委員、査読委員の制度も整って、それが今の確固たる看護学の学会雑誌に続いたのです。学会雑誌創刊に至る頃の経緯を、老骨の耄碌頭を絞って想出すまま書き綴りました。誤りや思い違いがあるかと考えますが、ご容赦の上、参考になれば幸いに思います。

日本看護研究学会雑誌編集長（1986年1月－1988年12月）を担当して

神奈川県立保健福祉大学特任教授
愛知県立看護大学名誉教授・前学長
草　刈　淳　子

日本看護研究学会雑誌創刊30周年記念と伺い、もう30年も経ったのかと、感慨も一入です。看護界では最も歴史ある、会員数の多い学会の機関誌として一里塚を築いたことになります。

執筆はともかく編集には全く経験のなかった私に突然編集委員長のお役目が廻ってきたのは、当時、私が勤務していた千葉大学に事務局が置かれていたからであったと思われます。正直なところ、最初はとても戸惑いました。しかし、すでに８巻まで松岡淳夫先生によってレールが敷かれていたので、また、中島さん・高橋さんなど有能な事務局職員の協力で任にあたりました。

まず、編集委員長となって最初にしたことは、前々から気になっていた、従来の年度切り替えの故に、年が明けたばかりなのに「第４号」から始まることの解消についてでした。私が編集委員長になったからには、何としても、「毎年１号から揃えて出せるようにしたい」と考えました。

そこで、理事会に諮り、何とか９巻からそうしたいと言うことで、皆様のご支援を得て、８巻は合併号として発刊することとしました。かなりの無理をお願いしましたが、ようやく所期の目的を果たせたことは何よりでした。

当時の日本看護研究学会の理事達の会費は、責任ある仕事が多いにも拘わらず、本学会が「四大学看護学研究会」として、４つの国立大学教育学部特別教科（看護）教員養成課程の教官達の自主的な研究会を基盤に発展してきた経緯から、一般会員より高い額でした。しかし、学会の台所事情は、まだ自転車操業の時代でしたので、なるべく一番経費のかかる通信費を押さえるよう努力した記憶があります。査読者に原稿を見て頂いて、折り返し何編か纏めて返送して頂くなど、ささやかではありましたが、実質的な倹約を心がけたのでした。その結果、査読期間が短くて無理をお願いし、クレームをいただいたこともありました。本学会の懐具合を懸念してのことで、査読をしてくださった先生方には大変ご苦労をおかけしたことをお詫びし、お許し頂きたいと思います。お陰様で、このような皆様のご協力により、以後、毎年第１号から始まるようになったことは、嬉しい限りです。

ところで、学会費はほぼ同額でありながら、他学会が年に１・２冊の学会雑誌発行であるにも拘わらず、本学会は、年間５冊も発行してきたと言うこれまでの実績は、大いに会員に評価されて良いことだと思っています。これは、私よりあとに編集委員長になられた方々のご努力と、委員の皆様、そして投稿してくださる多くの会員の皆様のご協力によるものといえ、大いに誇れることです。

最初の頃は、学会での口頭発表のあとの質疑応答や、シンポジュウムの際の質問など、全てテープにとって、それらを挿入して報告していたので、出席できなかった方も、それを読めば、学会発表のどこが議論の争点になったのか、どういう視点からそれが論議されたのかがよくわかる、臨場感に満ちたものでした。「質問」という刺激を通している参加者に、異なる視点の存在に気づかせ、それにより新たな視野が開けるか、あるいは他の問題の所在を示唆するなど、まさに学会雑誌を会員のために活きたものとしていたといえます。しかし、これは学術集会開催者側のテープ起こしなど、かなりエネルギーを必要とする仕事でもあったと思われます。少ないスタッフで日常の仕事を抱えながらのこうしたご努力を重ねてこられた担当理事の方々には頭が下がる思いでした。

学会が回を重ね、時代の進展と共に看護系大学が増設され、それに伴い報告数が増え、さらに医療・看護の高度化・複雑化に伴い、従来の半頁では、報告内容すら十分に述べられない状況が生じたため、学会報告要旨のスペースに１頁を当てるように変更しました。その結果、残念ながら第21巻からは、発表概要と質疑応答の部分は割愛することになったようです。残念なことですが、やむを得ないものと思われます。今後は、学会に出席して、直接議論に加わり、積極的に参画することが求められます。

日本看護研究学会雑誌の装丁も27巻から従来のＢ５サイズからＡ４サイズに、また､29巻からは、ライトブルーのＪＲに似たロゴマークも入った表紙となりました。いよいよ新しい21世紀の学術雑誌に相応しいものに成長していくことが求められましょう。

現在の看護を巡る情勢は、本学会が発足した30年以上も前の頃とは大きく事情が変化してきています。本学会の６年後に発足した日本看護科学学会や日本看護協会が主催する日本看護学会など、数えるほどしか学会がなかった時代から、医療の高度化・複雑化に伴い、ますます細分化し深化してきています。それに伴い、専門学会は今日、日本学術会議に登録されている学会だけでも32を数えるに到っていることはご承知の通りです。

今後、本学会自体が時代の要請に合わせてどのように変革していくのか、それによって学会雑誌の内容も大きく変わることでしょう。

今年は、第16回ＩＣＮ東京大会が1977年に開催されてからちょうど30年で、去る５月27日から６月３日にかけてＩＣＮ代表者会議と学術集会が横浜で開催されました。東京大会のテーマは「看護の限りない可能性を求めて！」でしたが、今回の大会テーマは、自然災害、テロ、世界的な感染症が共通課題となった今日、「最前線の看護者たち：予期せぬ事態に立ち向かう」となっています。

過去30年間の日本社会における看護の発展の足跡をここに見ることができます。看護が限りない可能性を求めて大きく伸展し、地震・洪水など自然災害で非難を余儀なくされた人々の健康のために、24時間被災地の避難場所で保健活動に従事する保健師の活動が報道されています。がん看護、高齢者のための在宅看護、終末期看護など、看護が不可欠な社会サービスの１つとなった今日、「30にして立つ」この時を契機に、これからの学会の報告内容も大きく変わることでしょう。本誌もまたそれによって変化していくものと期待されます。

若い会員、力の付いた働き盛りの理事達によって、本学会活動が一層盛んとなり、本誌の内容もますます充実し、看護界へのさらなる貢献に繋がることを期待しています。

編集委員会の軌跡

玄　田　公　子

ここでは、編集委員会として行ったことを「日本看護研究学会会報」の記録からまとめることにしました。

1．はじめに

前委員会からの引き継ぎ事項は、以下の３点でした。

1）編集委員会のあり方について

2）新査読委員の選出について

3）20周年記念事業（索引集の発行）について

2．引き継ぎ事項を中心に、編集委員会として行ったこと

1）編集委員会のあり方について

⑴　最初に問題になったのは、委員長と事務局との連携をどうするかと言うことでした。それは、学会が始まって以来初めて事務局と委員長が地理的に離れるため、原稿の受領・送付等をどうするかについての検討でした。

⑵　編集委員会開催の必要性　編集委員長が替わることによって、機関誌の学術雑誌としての質を維持するため、委員会開催回数を増やし、編集委員会としての役割を果たせるようにする必要があるとして、予算化（平成８年はまず年２回とし、その後年６回にする）を理事会へ提案し、承認・実施されました。

2）査読について

⑴　新査読委員の選出

学会員の増加により、投稿される論文の領域が拡がり、現在の査読委員に追加する必要が出てきていました。そこで、現査読委員にも改めて査読を担当して頂ける領域を調査し、担当領域を明らかにしていただきました。新しく依頼した査読委員も合わせて、新査読委員として平成８年度の理事会に提案し、承認を受けました。その後、委員長から文書で正式に依頼しました。

査読委員の氏名は、引き続き各巻１号に掲載されています。

⑵　査読マニュアルの作成

査読の際、マニュアルが必要との意見が出され、「査読マニュアル」を作成し、平成８年度から査読を依頼する際に同封することにしました。

⑶　投稿規定および執筆規定の変更

査読マニュアルの検討中に、次の３点の追加が必要となり、規定の変更を諮り実施しました。

投稿規定の変更内容は、「希望する原稿種別を朱書きし、キーワード３つ以内」を記載すること、執筆規定の変更内容は、英文抄録「並びにキーワード３語以内」を記入することとしました。

3）「臨時増刊号」の扱いの変更

機関誌の発行は、毎年４号と「臨時増刊号」の５冊でしたが、平成９年度発行の20巻から「臨時増刊号」を巻号に組み入れ、年５号の発行となりました。

4）20周年記念事業の索引集の発行

これは前委員会からの決定事項であり、ここには、第20巻特別号の編集後記を再載することにします。

編　集　後　記

この索引集は、日本看護研究学会の創立20周年の記念事業として計画され、日本看護研究学会雑誌「第１巻１号から第20巻５号」をもって一区切りとしたものである。

ところで、本学会は、昭和50年９月に第１回「四大学

看護研究会」が弘前で始められ、その後千葉・徳島・熊本の４つの大学で教育学部特別教科（看護）教員養成課程の研修会として続けられていた。が、第８回（昭和57年：石川稔生会長）から、四大学の枠を取り除き学会への入会者の枠が拡げられ、「日本看護研究学会」と名称を変更して今日に至っている。一方、雑誌は、昭和52年に第１巻が発行された。従って、実際の20周年記念事業との間に時間差ができた。

索引整理の作業は、平成７年度の編集委員が担当した。なかでも、第１回からの会員であった内海　滉および山口桂子委員によって資料が調えられ、編集委員の皆様には何回も校正をお願いした。また、実際の資料整理は事務局の中嶋、高橋姉のご尽力によって、出来上がった。ここに記して御礼申し上げたい。

今後、雑誌第21巻からは、巻末の第５号にその巻毎の索引を記載することになっている。

本索引集が多くの方々に活用されることと、本学会の更なる発展を祈念し、編集後記としたい。

（平成10年３月20日　文責：玄田公子）

３．まとめ

編集委員会のあり方は、引き続き検討が必要とされ、新委員会へ申し継ぎました。

学会雑誌と編集委員会の見直しの３年間

（平成10年～12年度編集委員長）

愛知県立看護大学
山　口　桂　子

私の担当は平成10年～12年度（第21巻２号から第24巻１号）であり、昨今の投稿数の大幅増加の兆しが見え始めた３年間でもありました。

学会雑誌発刊30周年を記念して当時を振り返る機会をいただき、あらためて議事録や学会雑誌を眺めてみると、学会雑誌としても編集委員会としてもさまざまな変革の始まった時期であったことが思い起こされます。学会をとりまく社会情勢や看護学教育の変化の波に対応するために、変わらざるを得なかった３年間の主な活動を記しておきたいと思います。

１．組織： 委員会人数の増員と副委員長制度

従来、本学会の理事数は評議員数の10％と決められており、前期16名から19名に増えた時でしたが、その３名の増員が全て編集委員会委員として配置されました。川嶋みどり先生を初め石井トク先生、泉キヨ子先生、金川克子先生、紙屋克子先生、川口孝泰先生、河合千恵子先生、近田敬子先生と私を加えた９名が新編集委員会メンバーとして顔をそろえた第１回目に、皆様のご意向で私が編集委員長に就任することになりましたが、同時に副委員長制度を提案して川嶋先生に就任していただきました。

２．編集委員会の機能：学会雑誌の編集は誰が行う？

編集委員会の役割は、雑誌全体の編集ではなく、主に投稿論文の採否の決定であるという引き継ぎを受けました。学会の開始当初、経済的に貧しかった頃は、「印刷代を気にせず論文の採否をきめる」ということで、委員会の役割を論文採否決定に限定したとうかがいましたが、委員会自体が行っていた査読を、査読委員に依頼するようになってからは、委員長と査読者において実質的に採否が決定されることも多く、委員長の負担の大きさとは裏腹に委員会の役割はあまり明確ではなかった感がありました（私も一員でしたが）。

そこで、今期第一回目の委員会では、各委員から「編集委員会の役割を見直し、学会雑誌の内容の検討を十分に行うべき」といった意見や要望が出され、それに伴って活動内容と予算の修正が理事会に提案されました。その結果、従来年２回であった編集委員会の開催を増やし、活動を活発化させるための委員会予算の倍増が認められることになりました。

３．会員のニーズ：会員との意見交換とニーズ調査

上記を受けて、会員にとっての学会雑誌の価値を論議する中で、平成11年の第25回学術集会で、編集委員会主催「あなたは学会雑誌が待ち遠しいですか？－より魅力的な学会雑誌を作るために－」を開催しましたが、委員会が企画して学術集会中に学会雑誌への会員の意見を聞くという試みは初めてのことでもありました。また、同学術集会中に参加者に対しアンケート調査を実施しました。この２つの企画からはいずれも、まだ看護学の世界では定着していなかった査読制度、論文の採否決定方法に対する会員の異議や質問が多く出されました。このことは、当時ピークを迎えつつあった看護大学設立ラッシュに直結した投稿論文数の増加のなかで、会員のニーズ、学会掲載論文に求められるレベル、査読者の選択と意識など、混沌としていた状況を浮き彫りにした結果でもありました。

４．査読制度の整備：投稿規程の改定と査読基準の明確化

翌年、第26回学術集会中には、拡大編集委員会と銘打って、編集委員と査読者の意見交換会を開催し、両者の共通理解を得る試みを実施しました。その中では、査読者の方々からも査読制度や査読方法に対する戸惑いや迷いが述べられ、また、自らが投稿者になった場合に受けた査読に対する指摘も多くあったことから、何らかの形で編集委員会としての方針や基準を打ち出す必要があることが明らかになりました。

そこで、これらの問題を改善するために、平成12年度には雑誌投稿規定を大幅に変更し、原稿種別ごとに査読の基準を明確に示す一方、結果に対する「異議申し立て」を受けることにしました。また、年４回の締切日を決めたのもこの時期ですが、編集委員会の中での論議を生かした査読者決定のためには編集委員会開催にあわせた原稿の募集が必要との判断によるものでした。（但しこれは、５年後、メール会議開催が容易になったことや、締切日の間の３ヶ月間が会員へのサービス低下につながる、として廃止になりましたが。）

一方、査読者の選出と依頼は、本学会の会員の研究分野の多様性と投稿論文数の増加に伴って、委員会にとってはかなり困難な問題でした。現在は委嘱と承諾が明確に行われるようになりましたが、この時期はまだそのしくみがなかったために、委員会で選出された査読委員への査読依頼や調整のための電話で、委員長と事務局は、随分、時間と気力を使ったものでした。また、査読結果の回収も期限厳守が難しく、これも大きな作業でした。

５．学会と学会雑誌のめざすもの

形式的な整備を行いながらも「本学会雑誌が大切にしたいこと」については、学会雑誌の内容から検討したいと考え、川口孝泰委員が中心となって、過去の掲載論文の内容分析を行いました（詳細は本学会雑誌23巻４号参照）。その結果、本学会員の持つ「臨床」という特性のひとつが明らかになり、それを生かすための原稿種別「技術・実践報告」の新設につながったのではないかと思います。これについてはさらなる活用を期待したいところです。

時代の要請による変化は常に必要なことではありますが、この時にあわせて、投稿規定の変更や原稿種別の追加を行い、委員会の活動を形として残すことができたことは貴重なことであったと思います。このような実りある活動ができたことについては、ひとえに川嶋副委員長を初めとする委員の皆様のおかげであり、このメンバーであったからこその成果であったと感謝しております。しかし、このような精力的な活動を全国各地区に在籍する理事のみの委員によって行うことの、日程調整や経費などさまざまな限界を感じた時でもあり、委員会構成メンバーについての現行の案を提案して引き継ぐことになりました。

最後に、上記の委員の皆様と事務局の方々に心より感謝申し上げます。

	前期 （平成６年度～９年度）	今期 （平成10年度～12年度）
委員会開催数	年２回	年５回
委　員　数	６名	９名（副委員長の決定）
年 間 予 算	約30万円	60万円～85万円
投稿論文数	平均20編	平成10年度：28編、11年度：45編、12年度：47編
査　　読	主に査読委員（２名）と委員長	委員の中から論文担当者を決定、査読者とともに判断
原稿の受付	随時受付	学会の年間スケジュールや編集委員会日程を加味した締め切り日を決定：年４回

日本看護研究学会雑誌発行30周年記念誌によせて

兵庫県立大学看護学部
内布敦子

日本看護研究学会学会雑誌30周年を迎えられ、お喜びを申し上げます。日本看護研究学会は、日本の看護界において、最も早い時期に学術的な活動を始めた学会として、学会雑誌の発行にも早い時期から取り組んでこられました。私は2001年６月から2004年４月までに発行された学会雑誌にかかわらせていただきました。すでに前任の先生方によって編集のシステムが整えられ、現行の受領、査読、掲載までの手順についても亥鼻の学会事務局で手際よくやってくださっておりました。しかし、掲載になるまでの手順、特に査読の先生とやりとりをする作業は大変複雑で、大変な作業だと直感しまして、３年間も持ちこたえられるだろうかと心配になったことを覚えています。投稿された論文は、それぞれの著者にとって大事な研究の成果ですので、丁重に扱い、大事に査読のプロセスを踏ませていただきました。

編集の一番強力な味方はなんといっても編集委員の先生方と亥鼻事務局の方々です。年間約４回の編集会議の出席率はきわめて高く、遠くの大学から皆さんが兵庫県立大学の明石キャンパスまで駆けつけてくださったことは今でも本当に感謝しています。私の任期中の編集委員の先生方は以下の方々でした。

＊（　）内は当時の御所属です。
玄田公子 先生（神戸市看護大学）（副委員長）
　以下あいうえお順
東　玲子 先生（山口大学医学部保健学科）
川口孝泰 先生（兵庫県立看護大学）
成田　伸 先生（自治医科大学看護学科）
平河勝美 先生（神戸市看護大学）
深井喜代子 先生（岡山大学医学部保健学科）
横手芳恵 先生（岡山県立大学保健福祉学部看護学科）
若村智子 先生（兵庫県立看護大学）

編集委員の先生方は精力的に作業を進めてくださいました。査読者の選定、交渉を行い、委員会で査読の結果を踏まえて判断を総合的にまとめていただき、各委員の先生が分担した投稿論文を一つ一つプレゼンテーションしていただくことは、多変な作業であったと思います。委員会ではそれぞれのプレゼンテーションをもとにディスカッションを繰り返し、慎重に採否を決定しました。このディスカッションの内容がきちんと投稿者に伝わるように文書化する作業を編集委員長が行いましたが、十分意図が伝わらず、投稿者の皆様にご迷惑をおかけすることもあったかと思います。

私が編集委員長をお引き受けした2001年は、飛躍的に投稿数が伸びた年度でもありました。引き継ぎ前までは30代の投稿数であったと思いますが、突然嵐のように投稿数が増え、いったい何事が起きたかとびっくりしたのを覚えています。今にして思えば、看護系の大学が急増した時期に一致しており、教育研究職につかれた看護職が急激に増えたのが原因ではなかったかと思います。それにしても突然２倍から３倍の投稿数になり、編集作業に大変多くの時間を要するようになりました。しかし編集会議を開く予算は限られていますので決裁にあげるにはどうしても次の編集委員会を待たなければならず、投稿者の皆様を待たせることになったこともありました。幸い編集委員会の決定でこれまで３回行っていた査読を２回にしたので、何回も査読を繰り返し掲載までに１年近く経ってしまうというようなことはほとんどなくなり、掲載までの時間は以前より短縮されましたが、投稿

者の皆さんにとってはきっと長い時間であったと思います。

日本看護研究学会は看護学のほぼ全領域をカバーしていますので、研究デザインも様々で質的研究もあれば量的研究もあります。領域も全領域ということで、母性、小児、成人、がん、老人、精神、地域、在宅、基礎、代謝学、生理学、公衆衛生や疫学、と本当に幅が広い雑誌です。このような雑誌で一番苦慮するのが査読者選びですが、編集委員の先生方が各領域から参加してくださっていましたし、また人脈も広く、大変助けられました。そのころはでたばかりのモバイルコンピューターで若村委員がインターネットで検索して、その領域の先生の情報をＰＣに呼び出しながら会議が進むという具合でした。

私が知る範囲では、査読を依頼されると海外の研究者は、原則快く引き受けてくれて、査読をむしろエンジョイしてくれます。それは若手の研究者の柔軟な発想に刺激されて、新しい発想が生まれることがあるからだそうです。もちろんアイデアを盗んではいけませんが、掲載されて著者名がわかると早速著者と連絡を取り、共同研究を申し出るなど、自分の研究が発展することがあるようです。しかし、日本の場合、査読はしんどい仕事の一つで、忙しい時は本当にため息が出てしまう研究者も多いのではないでしょうか。依頼の際にご気分を害されて査読の先生から叱責され、断られることもありました。この編集長の仕事をしてから、私は査読を断るのは研究者として恥と思い、長期海外出張でもない限り、快くお引き受けすることにしています。そして、もう一つ心がけるようになったのは、とにかく「査読は早く返す」ということです。編集委員も困りますし、投稿者も困りますので、査読を長く自分のところにもっておくことはしないようにしようと決めています。

投稿論文は、精錬されていることにこしたことはありませんが、私はむしろ荒削りでも研究デザイン、方法がしっかりしていれば、積極的に掲載したらいいと思います。おもしろい着眼点をもった研究がたくさん出てきて、その中から看護の知識体系に貢献できる知見が拾い出せれば、学会雑誌として成功しているのではないでしょうか。

日本看護研究学会は今後もますます発展していかれると思います。地区ごとの研究発表会も大変活発に行われていますし、なによりも発足当時からこの学会を愛し、育てていこうと力を注いでおられる先生方が多くいらっしゃいます。どうぞ40周年、50周年にむけて、学会の発展を着実に支えることのできる学会雑誌として、今後も発展していきますようにお祈りいたします。

日本看護研究学会 編集委員での私の活動史

筑波大学大学院人間総合科学研究科
教授（看護科学系長）
川　口　孝　泰

日本看護研究学会雑誌の30年間の編集活動の歴史を振り返ると、私は、発刊当初から、学会雑誌の編集過程を目の当たりにしてきた数少ない会員である。先ず、学会雑誌の基礎を築いてくださった松岡淳夫先生の功績は、とても大きい。私は、1978年に千葉大学教育学部特別教科（看護）教員養成課程に入学した。その年に１巻１号が発刊された。そして、私が大学３年になった年から、松岡先生のもとで卒業研究の御指導をうけた。そこで、学会雑誌の在り方や研究を公表していく際の、先生のご苦労を目の当たりにして、多くのことを学ぶことが出来た。私が現在、研究者の端くれとして、現職を得られたのも、このころの教えが随分と大きい。

松岡先生の後、草刈先生、内海先生が編集委員長をお務めになった。両先生は、私の看護観に大きな影響を与えてくださった私の恩師である。その頃私は、千葉大学工学部建築学科に所属しており、建築学の勉強で精一杯だった。しかし看護研究の動向は、そんな私にとって、何よりも気になる存在であった。その頃は、日本看護研究学会雑誌の発刊が待ち遠しく、手にしたときには急いで目を通して、看護の最新の研究事情を、ワクワクしながら読んでいた記憶がある。とくに、その頃に学んでいた建築計画学と比較することで、看護学を客観的に見つめることが出来、そのアイデンティーも認識できるようになった。このことは、まさに学際性を生身で感じた経験であり、今日、大学教育において注目を浴び始めているデュアル・ディグリーの必要性を証明できた感覚であった。建築学の学びは、かえって私の看護観を加速度的に高める結果ともなり、結果的には建築学で私が専門にした領域は、病院・病室のインテリア計画であった（建築学の学位を取得する際の審査会では、看護の研究なのか・・・建築の研究なのか・・もめたらしい・・・という噂があったらしい）。

その後、現理事長である山口先生が編集委員長を務められた際に、私は編集委員の一員となった。山口先生は、私の大学の先輩でもあり、教育学部時代の恩師兼相談役（何かあったら悩みを相談できる先生・・・）であったので、私の無茶な発言を受け止めて下さって、「投稿規定」や「執筆要領」などの改訂に際して、積極的なご理解とご支援を頂き、大きな改訂が可能となった。その後、内布先生が編集委員長になった際にも、私は編集委員として残留した。このころから、看護学教育の大学化が急速に進み出し、投稿論文数が急速に増え始め、論文の処理だけでも膨大な時間が必要となった。そのような中で、内布委員長は、英語論文の投稿規定や国際的な文献データベースに情報を提供するべく、精力的に準備を進めてくださったが、それにも増して、投稿論文の処理をいかにスムーズに行っていくかについての、投稿・査読システムの整備が重要な課題となっていた。

私は、その後、第27巻～第30巻の編集委員長を務めさせて頂いた。この時期は、様々な学際分野の学会が創設され、学術学会雑誌も変革を求められる状況であった。そのきっかけとなったのが急速な情報技術革新である。私は、「とんでもないときに編集委員長になってしまったな・・・・・」と思った。と言うのも、学会創設30周年記念事業として、ホームページのリニューアルや学会のロゴマークの作成、学会封筒や学会雑誌のデザインの改変、および、これまでの掲載論文等の検索システムの構築など、多くが編集委員会メインで行わねばならないことばかりだったからである。それにも増して、毎年80を越える投稿論文を抱えて、それらの査読を処理す

るだけでも膨大な仕事量であった。投稿論文数が多いことは、掲載論文が足りなくて困るよりは喜ばしいことではあるが、掲載までの手続きが多様で、何にも増して事務作業が膨大であり、事務局の松岡さんには、おんぶに抱っこの状況で、大変な迷惑をおかけしている。

私には、編集委員長の３年間で、編集委員長としてできる限りのことはしてきたつもりである。まさか今期の改選においても、編集委員長に拝命されるとは思っていなかった。しかし、内心では、最後に査読システムがオンライン上でできる仕組みや、オンラインジャーナルによる論文配信の仕組みを完成できなかったことは心残りではあった。これまでの30年間にわたって私を育ててくれた日本看護研究学会に恩返しをする意味でも、ここは、もうひと頑張りせねばならないだろうと、今期の編集委員長もお引き受けするしだいです。本音は、少し休みたい思いで一杯ですが、何とか次代につなげられる編集委員会にしていきたいと思っている。

査読システムの変遷

査読システムの変遷については、「歴代編集委員長の思い出」で、玄田公子先生、山口桂子先生、内布敦子先生、川口孝泰先生が詳細に記述されていますので、その箇所をご参照ください。ここでは、査読システムの変遷の概要について記載します。

■玄田公子委員長（任期：1995年４月～1998年３月）

1．新査読委員の選出：学会員の増加により新たに査読委員を追加し、査読の担当領域を明らかにした。
2．査読マニュアルの作成：1996年度（平成８年度）から査読を依頼する際に同封することにした。
3．投稿規定および執筆規定の変更：投稿規定の変更は、「希望する原稿種別を朱書きし、キーワード３つ以内」を記載すること、執筆規定の変更内容は、英文抄録「並びにキーワード３語以内」を記入することとした。

■山口桂子委員長（任期：1998年４月～2001年３月）

1．会員のニーズ調査を実施（第25回学術集会；1999年）：まだ看護学の世界では定着していなかった査読制度、論文の採否決定方法に対する会員の異議や質問が多く出された。
2．査読制度の整備：投稿規定の改定と査読基準の明確化
　第26回学術集会（2000年）では、拡大編集委員会と銘打って、編集委員と査読者の意見交換会を開催し、両者の共通理解を得る試みを実施した。これを参考に、平成12年度（2000年度）には雑誌投稿規定を大幅に変更し、原稿種別ごとに査読の基準を明確に示す一方、結果に対する「異議申し立て」を受けることにした。

■内布敦子委員長（任期：2001年４月～2004年３月）

1．査読回数の変更：今まで３回行っていた査読を２回に変更した。
2．査読者の選出：インターネットを使用して、査読領域の先生方の情報を検索した。

■川口孝泰委員長（任期：2004年４月～2007年３月、2007年４月～現在）

1．投稿論文の増加による投稿・査読システムの整備
2．これまでの掲載論文等の検索システムの構築

査読者の人数

			査読者名掲載雑誌
1995年度～1997年度 （委員長：玄田公子）	査読委員	48名	21巻１号（1998年）
1998年度～2000年度 （委員長：山口桂子）	査読委員 委員会依頼査読者	57名 42名	24巻１号（2001年）
2001年度～2003年度 （委員長：内布敦子）	査読委員 委員会依頼査読者	90名 182名	27巻１号（2004年）
2004年度～2006年度 （委員長：川口孝泰）	査読委員 委員会依頼査読者	127名 47名	30巻１号（2007年）
合　計		593名	

［註］　年度は４月１日～翌年３月31日

学会員以外への査読依頼について

投稿された論文は、原則として、編集委員会で選ばれた学会員による査読者（２名）によって査読される。しかし、学会員で適当な査読者がいない場合には非会員に査読の依頼を行っている。その際には、査読に対する謝礼が行われている。詳細については、理事会で検討されて、決定されている。

■非会員への査読謝礼について

１）学会雑誌13巻２号　会報30号（1990年（平成２年）６月20日発行）
平成元年度第２回理事会会議録（平成元年２月22日）
査読に関して、会員への査読依頼の場合　無料
非会員への査読依頼の場合　1,000円（図書券）

２）学会雑誌15巻２号　会報36号（1992年（平成４年）６月20日発行）
平成４年度第１回理事会会議録（平成４年４月４日）
非会員への査読謝礼は、1,000円から2,000円（図書券）に変更

３）学会雑誌24巻２号　会報55号（2001年（平成13年）６月20日発行）
平成13年度第１回理事会会議録（平成13年４月14日）
非会員への査読謝礼は、2,000円から3,000円（図書券・図書カード）に変更

4 学術集会

第１回～第７回研究会

学会創生期について

学会誌発行30周年記念事業実行委員会委員長
田　中　裕　二

諸先生方を差し置いて、本学会創生期についての概略を執筆させていただく機会を与えてくださりましたことを光栄に思います。

日本看護研究学会の第１回から第７回までの学術集会は、正式には、「第○回四大学看護学研究会」といいます。本学会の起源は、４つの国立大学（弘前大学、千葉大学、徳島大学、熊本大学）の教育学部に設置された高等学校衛生看護科の教員を養成する「特別教科（看護）教員養成課程」に所属する先生方が中心となって設立された四大学看護学研究会です。第１回および第２回研究会（学術集会）は非公開で、参加者はこの４大学に所属する先生方のみでした。第１回は、昭和50年（1975年）９月に徳島大学の（故）福井公明先生を会長に、シンポジウム「高等学校衛生看護科の諸問題」が開催されました。第２回は昭和51年（1976年）９月、弘前大学の吉田時子先生を会長に、シンポジウム「大学における看護教育の検討」が開催されました。翌年の第３回は、昭和52年（1977年）９月に熊本大学の（故）山元重光先生を会長に、熊本共済会館で開催されました。第３回研究会からは四大学以外の先生方も参加できるようになり、開かれた研究会となりました。プログラムは会長講演「看護研究について」、シンポジウム「大学における看護学教育の検討－特にカリキュラムについて－」でした。第４回は昭和53年（1978年）９月に千葉大学の村越康一先生が会長をなされ、千葉大学西千葉キャンパスで開催されました。会長講演「腎疾患の食事療法」、特別講演「看護学の性格」、シンポジウム「大学における看護学教育の検討－地域看護について－」というプログラムでした。研究会の開催地が徳島、弘前、熊本、千葉と一巡し、第５回は再び徳島に戻り、昭和54年（1979年）９月に徳島大学常三島キャンパスで開催されました。会長は徳島大学の（故）村田栄先生で、会長講演「看護学教育について－回顧十余年－」、特別講演「看護心理学の課題」、シンポジウム「大学における看護学教育の検討－大学における看護研究－」という内容でした。第６回は昭和55年（1980年）９月に弘前大学の（故）川上澄先生を会長に、弘前大学医学部で開催されました。内容は、会長講演「看護に必要な心身医学」、特別講演「看護分野における研究に望まれること」、シンポジウム「大学における看護学教育の検討－看護基礎学と臨床看護－」でした。続いて、第７回は昭和56年（1981年）９月に熊本大学の（故）佐々木光雄先生を会長に、熊本産業文化会館で開催されました。プログラムは、会長講演「看護学の中の基礎医学」、シンポジウム「大学における看護学教育の検討－実験看護学をめぐって－」、奨学会研究報告（２件）でした。また、総会（９月27日開催）では研究会の名称を「日本看護研究学会」へ変更することが承認されました。私事ですが、初めて本学会の学術集会に参加し、また、これまでの長い研究生活の中で初めて学会発表を行ったのが第７回研究会でした。そして、次期会長の石川稔生先生（千葉大学）は、昭和57年５月に開催する学術集会の名称を「第１回日本看護研究学会総会」とはせずに、本研究会の歴史を引き継いで、「第８回日本看護研究学会総会」として開催されました。

なお、第８回の会長を務められました石川稔生先生から第33回学術集会の学術集会長を務められました石井トク先生まで（第18回を除く）の学術集会のテーマに込めた思いや学術集会を担当されてのご苦労などは各先生方の原稿をご覧ください。

■参考資料

・冊子　日本看護研究学会の歩み－その発足から今日まで－　昭和57年５月９日
第８回日本看護研究学会総会　会長　石川稔生
・特集「日本看護研究学会の歩み」，5(3)：7-14，1983.
・日本看護研究学会設立20周年記念事業－20年のあゆみ－，18(1)：10-18，1995.

第８回総会

日本看護研究学会の誕生をめぐって

名誉会員　千葉大学名誉教授
石　川　稔　生

昭和55年（1980年）９月21日、第６回四大学看護学研究会が、川上澄会長の下、弘前で開催されたが、その時の理事会で、第８回の会長を私に是非との要請があり、お引き受けしたのであるが、以下の条件を付けた。「私は、国立大学として日本で唯一の千葉大学看護学部の創設の教授であり、四大学のみのローカルな学会を主宰するわけにはいきません。従って学会を全国規模のものとして、日本看護研究学会と改称し、会員を日本中から求めるならやりましょう」と提案したところ、理事会は満場一致で賛成し、翌昭和56年（1981年）９月27日、熊本で開催の第７回四大学看護学研究会（会長　佐々木光雄教授）の総会で承認され、いよいよ実現の運びとなった。

昭和55年（1980年）４月１日現在304名であった会員数は昭和57年（1982年）４月１日現在では511名に増加していた。これは千葉大学看護学部の卒業生に呼びかけた結果である。

当然学会誌名も４巻２号から「日本看護研究学会雑誌」と改められた。昭和58年（1983年）３月20日発行の第５巻第３号には、事実上第１回となる第８回日本看護研究学会総会記事が掲載されている。また特集として、「日本看護研究学会の歩み－その発足から今日まで」が掲載されているが、私の企画・編集によるものである。

その冒頭の挨拶文の内容は、名誉会員としての現在の私の本学会に対する心境と全く変わらないものであり、以下に再掲載させていただくことにする。

「学会の歩み」編集の挨拶

第８回会長　千葉大学　石　川　稔　生

昭和56年９月27日、第７回四大学看護学研究会総会で会名を日本看護研究学会と変更し名実ともに日本的レベルの看護学会に成長した本学会は、その後も益々発展の一途をたどり、昭和57年３月現在会員数が急増し500名を越えております。そして今後も隆盛の道を歩みつづけることは必至であります。そこで本学会の起源をさぐり、本学会の発足以来の諸先輩の努力と看護学に対する深い関心と愛情を知り、初心にたちかえり、将来への糧としたいと考えてこの計画をたてましたところ、歴代会長、その他の先生方の絶大な御協力をいただきました。編集にあたっては、公開の研究会となった第３回から会長順に配列しました。第５回会長村田栄先生がすでに亡くなられておりますので、この部分を福井公明教授と内輪進一教授にお願い致しました。とくに福井教授からは、非公開時代の第１回と第２回の周辺についての原稿をいただきましたが前述の基本の順序を変えずに掲載いたしました。おかげをもちまして、新しい出発をした本学会にふさわしい記録をつくり上げることが出来ました。会員各位が初心を忘れず、それぞれの立場での看護学の教育と研究に力を尽くしていただけるならば会長としてこれ以上の喜びはありません。

さて平成19年３月現在会員数は5,000名以上であり、当時の10倍である。今後は、会員一同が研究内容のレベル・アップ、つまり科学性と独自性の追求により、質の向上を目指して努力して欲しいと思っている。本学会の益々の発展を信じて筆を擱く。

第９回総会

初めての招聘講演
マリア・シュナイダー博士を迎えて

千葉大学名誉教授
松　岡　淳　夫

昭和58年、千葉大学教育学部特別教科（看護）教員養成課程の教官は看護学部附属看護実践研究指導センターに配置換えになり、私は新たに看護管理学研究部を主宰することになりました。その翌年、私は学会長として、第９回日本看護研究学会総会を千葉大学教育学部２号館教室を借りて、始まったばかりの看護管理学研究部の目指す目標や研究動向のPRと、学会の活動に国際的息吹を導入する思いで計画し開催しました。

当時の看護界では、米国N，L，Nの先達や、看護論の権威者を招聘して、看護の啓発講演が盛んに行われていたが、看護研究の組み立てや分析方法の実情容は帰国留学者の不明確な見聞記や、直接Journal of Nursing Research等 の専門雑誌による以外には接することは出来ませんでした。そこで、会員が研究の実態や成果を討議する国際的な場面を学会に持ちたいと考え、新進気鋭の研究者を米国から招く事にしました。米国事情に詳しかった世話人野島良子先生（徳島大学）に、相談した結果、当時ミネソタ大学看護学部準教授のマリア・シュナイダー博士を紹介されました。大学院学生の教育指導と大学病院脳神経領域での研究指導に当たっている新進気鋭の研究者とのことでした。そこで、野島先生を通してシュナイダー博士（後、大学院学科長、現ミネソタ大学名誉教授）に最近の研究成果についての報告講演をお願いしました。快く承諾頂き、「Stressors Identification and Coping Patterns in Persons with Epilepsy」の講演抄録を送って頂きました。約１時間の通訳（近藤房恵女史：北里大学）を交えた講演は、研究方法の構成理論、調査手段の有用性を検証する為の少数例での分析内容と結果が詳細に述べられました。これに続いて８人の質問者があり、活発な質疑が行われました。中で最も私が注目したのは、human Subject Committee の研究に対する詳細な点検承認が必要で、大学は当然、それ以外の病院でも看護領域を含めて置かれているということでした。以後私は患者を対象とした看護研究、特に個体に関わる研究には研究倫理委員会の設置と許諾の必要性を常に強調することにしました。現在この委員会の設置と縛りは常識となり強力な審議がされています。この招聘講演は大成功だったと思います。これを先鞭に年々の総会には招聘講演が組まれ、成果が上がっています。

博士は帰られるとき、当学会に入会し、学会雑誌を日本人留学生に翻訳させて読みたいと希望され、送ることにしました。翌年、博士は大学院研究科長となられその後退職名誉教授となられたようです。

第10回総会

日本看護研究学会雑誌発行30周年に寄せる思い

鹿児島純心女子大学名誉教授
日本看護研究学会名誉会員
志学館大学非常勤講師
木　場　冨　喜

学会雑誌発行から早くも30年を経過したことの驚きとともに、喜びもまたひとしおである。同時に学会を発足させるための発想の時からかかわりをもった者としては、懐かしく貴重な思い出でもある。当時看護界には、所謂学会として認められるものは皆無と言っても過言ではない状況にあった。国立大学教育学部に、看護の課程をもつ数少ない大学（弘前、千葉、徳島、熊本）で昭和45年に四大学研究協議会を発足させ、課程運営上の問題とともに研究発表を実施することになった。それは看護の学問的基盤を、より確かなものにしたいという願いを実現していくことであり、最初は各大学から１題で合計４題の発表であった。昭和50年には、人々の健康と福祉に寄与すること・看護の学問的基盤に寄与すること・看護界に研究者を育てること、などを目的として「四大学看護学研究会」を発足させた。

最初は学生の優れた卒業論文を再指導し発表させたりした。その後会員の増加、奨学金による研究の奨励、外国からの招聘講演など工夫を重ね発表数も増加してきた。そして本学会雑誌は、当時看護学の学術雑誌として最初に国会図書館に登録された唯一のものであった。

その他思い出すことは、学会場のロビーなどで「この学会は他の看護学会とどこか雰囲気が違うわね」という出席者の声も聞こえてきた。それは、看護師以外は会員になれないといった制限や、独特の生真面目さとか緊張感よりも何か開放感があるとのことであった。本学会は最初から、学問の自由、学ぶべきは学ぶことが大事と思い、心を開いていたことも無関係ではなかったと思っている。また大学の課程出発に際し、教授の席はどうしても医師であったことから、この学会は医師中心であるとの声も聞こえてきた。しかし実際にはそうではなく、相互に学ぶべきは学び育てようとする暖かさと協力の体制に恵まれていたと言える。更に教育学部という環境は、あらゆる学問分野を包含し、また教育は実践が重要であることにおいて、実践の科学を主張する看護と本質的共通性をもち、また養成教育の歴史にも共通性があった。それらの要素がおのずと学会の雰囲気をかもし出す土壌となったものと思われる。

看護師の養成教育もいまだ多様でありながらも、その多くが大学教育として定着してきた。しかし急速な社会的変化の中で、看護学がその本質や独自性を維持しながら、学際的にもどのように進歩発展し学問的体系を整えていくかは、今後の課題であると言えよう。

私は第10回の学会を担当したとき、「学会10年の歩みと今後の課題」とし、その趣意書を関係方面に送ったことを記憶している。現在も全く同じ気持ちである。

学会雑誌発行30周年にはからずも思いを寄せる機会を頂いたことに感謝し、学会員の皆様の御活躍と本学会の益々の発展を期待したい。

第11回総会

日本看護研究学会設立時の夢に寄せて

看護教育・現任教育研究所所長
伊　藤　暁　子

私が、第11回日本看護研究学会総会の学術集会長の大役をおおせつかったのは、厚生省（現厚生労働省）看護研修研究センター所長の任に在る時であった。歴代の学術集会長が国立大学の教授でいらっしゃる後でのこの重責を、果たして全うすることが出来るのか危惧された。しかし、現職に就く前に徳島大学の教官として、第１回研究会の設立に関与して以来、本学会の世話人の末席を汚してきた者の責任とも考えられ、微力ではあるがこの栄誉ある役割を果たそうと決意した次第である。

さて、厚生省看護研究研修センター（以下、センターとする）は、看護教育に関する研究を行うと共に、全国の保健師・助産師・看護師専門学校の教員を一年間で育成する施設である。そこで、センターの特色を生かすメインテーマは？と関係者で討議した結果、「看護学教育と研究」にする事が迷わずに決定された。

これを受け、会長講演のテーマを「看護学教育に関する研究への模索」とした。当時はこの分野での研究は断片的で、最近のような系統的な研究が皆無と言っても過言ではなく、研究への模索と題するのが妥当な線と思われたのである。講演内容として、前半では、看護学教育研究の分類を試み、今後の研究への方向性と課題について私見を述べた。後半では、センターの幹部看護教員養成課程の研修生が行った研究成果をつぶさに紹介し、看護専門学校における研究活動の可能性と限界について言及した（講演内容は、日本看護研究学会雑誌　第９巻第１号・第２号、1986に掲載）。

学会会場は、東京の虎ノ門ホールであったが、予想を上回る参加者で大盛況に終わり、主催者として安堵した事を鮮明に思い出す。それと共に、かつて徳島の眉山山頂の保養所で開催したささやかな第１回四大学看護学研究会（会長は、故福井公明徳島大学教授）に思いを馳せると、隔世の感があり感慨一入であった。

振り返ってみると、本学会は、熊本・千葉・弘前・そして徳島のいわゆる四大学を母体として誕生したものである。当時の看護教育は、殆ど看護専門学校で実施されており、大学での教育は極めて少なかった。また、看護も学問としての芽生えはみられたものの、未熟で看護学には程遠い状況であった。発足時に熱っぽく語られたのが、将来、看護教育が大学を中心に展開されるのを見据え、若い人達を研究者として育てる。看護学に関心のある人であれば、誰でも入会できる開放的な学会にして看護学の発展に寄与する、この二つの夢であった。現在も看護学分野以外の会員も活動する実情や、奨学金制度による研究費の助成が存続することは、誕生時の夢の実現と思われ喜ばしい。看護界でいち早く発足した本学会が、故人を含む先達の夢を継承しつつ、なお一層、発展をするよう切望している。

第12回総会

日本看護研究学会総会を顧みて

財団法人秀芳園　弘前中央病院院長
福　嶋　松　郎

此の度、日本看護研究学会雑誌発行30周年記念事業実行委員会から、第12回の研究学会総会の学術集会の開催を司った一人として、当時の思い出などについて語るよう依頼があった。24年前の出来事で認知症も危惧される年齢となり、開催時の資料や記録も既に無く、正確性に欠ける点も多々あると思うが、嘗ての同僚の先生方のサポートを頂きながら当時を回想してみた。全国の国立大学教育学部内に４つあった看護教員養成課程の１つ、弘前大学の同課程に、私が同医学部第一外科から移籍したのは昭和57年11月であった。両学部での二重生活が続いている翌年の夏、第９回の本学会総会（会長　千葉大学　松岡淳夫教授）に初めて参加し、伊藤暁子先生が主催された第11回の本学会総会で次期会長に指名された。幸い、当看護学科教室の諸先生、近隣に在住の当課程卒業生の諸君、第一外科の鯉江久昭教授はじめ医局の若い先生方の御助力、そして第一外科同門会である辛夷会会員の諸先生の御賛助を得ながら昭和61年７月30、31日の両日、弘前文化センターで第12回日本看護研究学会総会を開催することができた。参加人数は約600名、応募演題90題と過去最多となった。一臨床外科医として癌の患者さんの看護の重要性を身に沁みて感じていたことから、シンポジウム「癌患者の看護における看護教育」を松岡教授と木場教授に司会をお願いし、教育上の視点、小児癌患児の看護、悪性脳腫瘍患者の看護、呼吸器癌患者の看護、消化器癌患者の看護、切除不能、再発癌患者の看護について各シンポジストから専門的洞察に富んだお話を頂いた。また、「看護理論の応用における問題点」を本学会で初めてワークショップとして取り上げ、前原、野島両教授の司会のもと、７名の演者の参加で熱心な討議が為された。この外、招聘講演をUCSDメジカルセンターのE. Mottet女史に、特別講演は本邦の心身医学の草分けの１人であった故川上　澄教授に「欧米で見てきた心身医学」をお願いした。これは当初予定の演者が突然、来弘不能というaccident直後に、急遽御依頼したにもかかわらず、感銘深い講演であった。会長講演では、私が一外科医としてそれまでしてきた研究を紹介しつつ、基礎研究の結果を臨床応用まで進めることの困難性にふれた。一方、看護学関連の医療器材、図書などの展示会には24社が参加し、憩いのひと時としての弘前大学フィルハーモニー管弦楽団の演奏会が好評で、指揮を執られた弘前大学名誉教授安達弘潮先生と、懇親会で津軽三味線を奏でて頂いた故山田千里名人のご厚情も忘れられない。学会翌日からの弘前ねぶた祭りを見物された学会員の方もおられた由、地域観光の一翼も担うことが出来た。

第13回総会

日本看護研究学会総会の思い出

京都橘大学看護学部
前　原　澄　子

熊本大学・徳島大学・弘前大学・千葉大学教育学部に特別教科（看護）教員養成課程が設置され、同じ悩みを持つ４大学が協議会を組織し、毎年一堂に会し夜遅くまで討議していたころをあらためて思い出しています。

その協議会が母体となって日本看護研究学会が誕生しました。歴代会長が４大学の教員を勤めた方々が続いているのはそのためでした。徳島の渦潮、青森のねぶた、熊本の辛しレンコン等々、ご当地名物のことが思い出されます。

さて、そこで第13回の学術集会を担当させていただき、当時のことを書かなければならないのですが、東京で開催したため、特にご当地名物もなく、何をやったのか忘却のかなたに行ってしまったようです。その後の度重なる引越しで、当時の資料もどこかにおいてきたのか、紛失したのか見当たらない始末です。

覚えている限りのことでご勘弁を願います。千葉大学の教育学部の卒業生、看護学部の教室員の方々、明治乳業の社員の方々が大勢で作り上げてくださり、お手伝いいただいたことはしっかり覚えています。卒業生たちに、「あなたたちが会長を勤めるときは、スライド係でも受付でも手伝うから」といったことは覚えているのですが、その後責を果たすことができず、申し訳なく思っている次第です。

当時の看護研究はまだまだ幼いものであったように記憶しています。自然科学や社会科学領域の方法を使い、主として対象特性を明らかにする研究が主流を占めていたように思います。さまざまな学問領域が歩み寄って新たな知見を見出していく、いわゆる学際的研究には関心がありましたが、これらを学際研究というのかと、疑問を投げかけていた頃でした。そして、日本看護科学学会が誕生したころでしたので、本学会とどのようにすみ分けていけばよいのか悩んでいるころでもありました。そこで真の学際研究とは、看護研究とはを問いたくて、メインテーマに学際研究を取り上げました。

あれから20数年、看護研究は確かに成長を遂げています。看護研究学会も見事に成長しました。自分だけが成長していないなと思うこのごろです。

第14回総会

土屋先生の学会スライド

（日本看護研究学会第14回総会会長　土屋尚義先生）

東京医科歯科大学大学院
齋　藤　やよい

土屋尚義先生が逝かれて10年。土屋先生の想い出は、いつも厳しさと優しさの大きなギャップの中にあります。

私は土屋先生が教育学部で、最初に研究指導をされた頃の古い古い教え子のひとりです。

先生はビシッとスーツを着こなし、厳格な口調で指導をしていたかと思うと、突然とろけるような声で、「すてきだね、ぐっときちゃうよ」と私たちの耳元でささやくのが常でした。この言葉に頬を赤らめびっくり。そして、実は先生の視線が自分を通り越して研究データに注がれているのに気づいて二度びっくり、という経験をした人は数えきれないのでしょう。厳しい指導の後に聞いたこの言葉に、先生の研究への深い愛情を感じたものでした。

この想いは、丹精こめた学会のスライド作りに象徴されています。スライドを手書きで作った当時、ゆがみのない線、そして金井和子先生と絶妙のコンビネーションで作り上げた文字や数字のシール、各種スクリーントーンを駆使したスライドは、本当に美しいものでした。頑固な下町職人のような技で、「線を精魂こめて引くと、見えなかった真実が見えてくる」「スライドには伝えたいことを端的に凝縮させなければいけない」と教えられたことを鮮明に覚えています。新しいもの好きの先生の事ですから、今ならスライド作成ソフトを使いこなされていると思いますが、「お手軽スライドはつまらないねえ」とおっしゃるかもしれません。

日本看護研究学会の学術集会は、そんな先生にとってどの学会にもまして大切な研究発表の場であり、得意のスライドが威力を発揮し大活躍する場でもありました。

もちろん、発表前の準備は綿密かつ厳格の一語で、「研究は執念。決してあきらめてはいけない」「目に見える事象からその奥にある真実を見つめろ」「自分と研究の限界を知れ」などなど、大切な忘れられない教えをいただきました。そして、成果を仕上げるためにはどんな時も時間を惜しまず、未熟な私たちにとことんお付き合いくださいました。しかし、これも発表後は豹変。満面の笑みで発表に疲れた私たちをおいしいもの巡り、穴場巡りへと誘い、食べて飲んで大いに笑い、心にも皮下にもたくさんの蓄えを与えてくださいました。

先生と初めてお会いしてから30年。同じ30年の歴史を重ねた日本看護研究学会の発展を報告したら、きっと一言皮肉を言いながら、優しい笑顔で、「すてきだね、ぐっときちゃうよ」と言ってくださるでしょう。

そんな先生にご指導を受けたことを幸せに思い、先生を目指し及ばずながら努力してまいりたいと思う今日この頃です。

第15回総会

日本看護研究学会の誕生をめぐって

名誉会員　千葉大学名誉教授
内　海　　滉

このたび本誌は創刊以来版を重ねて恙なく30巻を世に送ることができましたこと心からお慶び申し上げます。これひとえに会員諸氏の努力と熱意の賜物と考えます。

私が担当しました第15回総会は昭和から平成に移った過渡期とも言うべき時機に恵まれ、研究のテーマ自体も歴史的意義のこめられている充実した瞬間に立ち合うことが出来た感じでした。時まさに看護学建学の精神の漲っている時代でもあったようでした。

私はメインテーマとして「学際的な看護学の確立」と言う表題を掲げましたが、これは従来の看護のテーマがややもすれば微視的な論議に走り、全体としての概念の論議を積みのこす傾向をいましめる心算でもありました。

科学は元来、諸科の学のことではありますが、個別の事例に経験論がとどまる限り一般化出来ず、あるいは広漠たる理念に事例の収集を遊ぶなど、学としての枠組みを害なうものへの警鐘を打ちたかったわけでした。新たなる看護学の概念を構築する理想に燃え研究の対象には努めて文化系のテーマから取り入れ、これを自然科学の分野に移しかえようとする努力を試みたものではあります。例えば、血流を測定すること自体は生理学的反応の観察ではありますが、諸種の条件を組み合わせることにより、対象とする観察目標を自由に操作しうることを気付かせたのであります。すなわち、風刺激を与えた場合の皮膚血流の変化は別系の看護実験の余地が存在しており、別個の相関構造を確認し得たのであります。また、乳児啼泣音（乳児の泣き声）を聴いた産婦あるいは看護師は音響認知において一般の解釈とは異なった構造を拵え得たのでありました。

勿論、生理学の領域においても熱刺激や音刺激が生体に与える作用は線型でない部位も確認されてはいますが、熱や音響が別個の意味をもつ刺激となった時、看護の臨床における意義、学際的研究の標的と考えたわけです。

同様に看護関係の環境評価には言語表現の問題が横たわり、臨床においても教育においても数量処理は避けて通れない状況に立ち到っており、更に看護を伝達する言語の問題は、特に新たなる医学のテーマともなっている如くであります。

第15回総会では遺憾ながらこれらの次元に近づく一般参加者は見られず、ただ教育講演として、宇佐美・芳賀・青木・野島・松岡・森田・亀山・横田らの諸先生より解説を賜り、今後の課題としてこれらのテーマを臨む上で大なる示唆を得ることが出来ましたことをここに記して謝辞といたします。

第16回総会

日本看護研究学会は「C地区地方会」が担当

玄　田　公　子

第16回日本看護研究学会総会は、平成２（1990）年８月４、５日京都市において開催されました。幸い晴天に恵まれ、関西では初めてと言うこともあってか多数の方々にご参加を頂きました。

振り返りますと、第14回（千葉）の理事会において、第16回を京都で開催することが決定したのは、理事会に出ていない私にはあまりにも唐突でした。そして従来との違いは、「C地区地方会」（当時は近畿・四国地区：なお、この年の総会で現在の８地区に改正されました）で受け、しかも早川和生、近田敬子氏を副会長として全面的協力体制を整えての依頼でした。

早速、C地区地方会の世話人で運営委員会を組織しました。全体の企画は、早川副会長を中心に進めていただきました。メインテーマは「看護診断」とし、招聘講演には、カリスタ・ロイ博士にお願いし、「Theory and Research for Clinical Knowledge Development」のご講演を頂きました。それは、1980年から滋賀の看護教員が集まって、中木高夫先生を中心に「ナーシング滋賀」のグループで看護診断の勉強会をしていたことや、地方会のNew看護学セミナー（1988年）にICNの帰りにシュナイダー先生にお寄り頂き、「看護診断」を学んでいたことなどが下地になっていたからだと思います。

当日の運営は、近田副会長にお願いし、世話人の方々にこれまでの地方会運営で培った力を遺憾なく発揮していただきました。C地区地方会の方々と学年進行中だった滋賀県立短期大学の２年生がボランティアとして参加し、ロイ先生とご一緒できたことは、当時としては良い経験になったと思います。ただ残念だったのは、今回は会員以外の方の参加が多くなるだろうと、参加費の前納を理事会に提案しましたが強い抵抗があり、かないませんでした。今では、ごく当たり前のことですが・・・。

ところで、第16回の学会を受けることになった地方会の立ち上げは、熊本での第10回学会からの帰り、シンポジストとして参加されていた中木先生から、関西には４年制の大学がなく、関東に比べて研究活動としての交流の場が少ないことから、若い人が育つ場が必要ではとの発案から生まれたものでした。その活動が基盤にあって、C地区地方会として本学会の運営を果すことができたのだと思います。改めて当時のC地区地方会の皆様に感謝申し上げます。

その後、1992年頃から看護教育の大学化が進み、「高齢化社会で必要な広い視野を持った人材の育成」が、漸く現実のものになろうとしています。会誌30周年を迎えた今、看護学研究の新しい時代の中にあって本学会のますますのご発展を祈念申し上げます。

第17回総会

日本看護研究学会雑誌発行30周年に思う

日本看護研究学会名誉会員
宮　﨑　和　子

この学会は私の研究者・教育者としての成長過程そのものといっても過言ではありません。思えば弘前、熊本、徳島、千葉の四大学教育学部に高等学校衛生看護科の教員養成課程が設置されたが、その課程がどのように運営され、どのような教育をなすべきか、各大学とも五里霧中のなか文部省の大学局教職員養成課のご援助もあって四大学協議会発足、四大学が回り持ちで幹事校となり、大学における看護教育とは何か、看護教育が大学でなされることの意義、大学のカリキュラムのあり方などについて、四大学の教職員全員（助手も含めて）が集まって、毎年協議を重ねていた。その中で何か研究発表をする場にしようとの提案があり、小さな研究発表の場として始まった。当時看護のアカデミックな学会は存在せず、したがって若い人に研究とは何かという命題を学ばせる機会が皆無の状態であった。とりあえず卒論の発表の場とし、そこで若い卒業生たちを育てるという目標を立てて発足した。その後協議会ではなく四大学看護学研究会となったが、四大学という名前を頭に付けると閉鎖的な印象となり、他の大学からの参加や看護学全体の発展を妨げると考えて、初めから日本看護研究学会とするよう強く発言したが、いれられず四大学看護学研究会として昭和50年に発足した。その後千葉大学看護学部の石川稔生教授が第８回会長を引き受けるにあたり名称変更を強く希望され、理事会の満場一致で、現在の「日本看護研究学会」となった。

私のように臨床から大学へ移ってきたものには研究はおろか、論文の書き方も訓練されていなかった。直属の村越教授から「大学教官なのだから自分で学びなさい、それができなければ大学を去りなさい」と強くいわれ、泣きながら歯を食いしばって研究とは何か、研究論文の書き方など多くの本を読みあさった。村越先生の厳しくも優しい愛情があったからここまでついてこられたと考えている。本学会が若い研究者を育てる目的を持ち、教育の面でも大学における看護教育の基本的なことからとり組んだことはシンポジウムのテーマ「大学における看護学教育の検討」が第２回から第７回まで一貫して取り上げられたことからも伺えよう。

当初の若い人の看護研究能力を育てようという本学会の主旨から、理事をはじめ多くの先輩が、発表された報告に対して意識的に質問をし、研究のあり方までを学ばせたいとの熱意で、質問やつっこみが厳しい学会という評判となった。その発表の結果とそれぞれの報告の質疑応答まで学会号として掲載されていた。後で読むととても啓発され良い学びができたと痛感している。しかし、平成八年度編集委員会の議事録では、機関誌に、学会集会一般演題発表要旨および質疑応答を学会記事として集録するその必要性について検討され、なくすのであれば発表抄録を充実（スペースの拡大）させる必要があると結論づけられた結果、第21回より抄録のスペースがこれまでの二分の一頁から一頁となった。質疑の多い特別の学会から質疑応答が少ない他の学会と同じ傾向になって現在に至っている。質疑を多くして、一人一人の発表者の成長を促す役割はもう終わったと考えて良いのだろうか？学会報告を真剣に聞き、自らの研究に対する目を育てていただいたものの一人として大変残念である。

私の第17回学会長としての意図は本学会雑誌会報34号に詳しい。私が20数年にわたって研究してきた「看護記録とPOS」および「看護の質の評価」などが臨床に即した時のニーズに合致したものか、多くの参加者（1975名：現在までこの記録は破られていない）を得て盛会であったことは嬉しいかぎりである。この学会を支えてくださった皆様に心より感謝いたします。

第19回総会

日本看護研究学会総会会長「成田栄子先生」を偲んで

佐賀大学医学部看護学科看護基礎科学講座教授
井　上　範　江

日本看護研究学会雑誌発行30周年記念誌の発行に寄せて、第19回日本看護研究学会総会会長の成田栄子先生が執筆なさるべきところですが、故成田先生に替わりまして寄稿させて頂くことになりました。

平成５年７月30日、31日に、「看護とリーダーシップ」というメインテーマで、熊本市において第19回日本看護研究学会総会が開催されました。その準備において、成田栄子先生の総会にかける熱い思いが蘇ってきます。この学会での私の役割は、草刈淳子先生（当時千葉大学看護学部）とご一緒させて頂いたシンポジウムの司会でした。シンポジウムのテーマは、メインテーマと同じ「看護とリーダーシップ」で、熊本県内の先駆的な看護活動を基に、社会のニーズに応えるためにはどのようなリーダーシップが必要なのかを問うものでした。成田先生は、このシンポジウムの準備のため、県内のシンポジストの方々との打ち合わせを数回行われ、看護職者個々人のリーダーシップの必要性について熱く語られていたのを懐かしく思い出します。

ところで、私が本学会の前々身の「四大学研究協議会」に参加したのは昭和47年でした。その後、昭和50年に「四大学看護学研究会」、さらに昭和56年には「日本看護研究学会」へと発展し、最初の学会雑誌発行から30年を経過しました。平成19年４月現在で看護系大学が157校になり、看護の研究者が劇的に増え、また研究マインドを持つ多くの看護職者が育ちつつあります。現在では、多くの優れた研究活動を生み出す環境が整いつつあり、日本看護研究学会も益々活発な学会活動が維持されていくものと思われます。今後は、学際的な視野を持ちながら看護の独自性や役割を追求できる研究活動の場として、本学会が発展していくことを願っております。

成田栄子先生に替わりまして日本看護研究学会への思いを寄せる機会を頂きましたことに感謝し、本学会会員の皆様と本学会の益々のご発展を祈念致します。

第20回総会

日本看護研究学会総会のトリを勤める

千葉大学名誉教授
吉　武　香代子

第20回の学会総会が行われたのは、慈恵医大看護学科在任中の1994年でした。学会長をお受けすることは２年前に内定しており、早々に予約していた調布市民会館から、全館改装のためと突然のキャンセルを告げられたのは、第19回学会総会の直前でした。翌年の会長としてのご挨拶では、会場を予告することができなくて残念でした。

その後いろいろ手を尽くして、府中の森芸術劇場という、学問よりはちょっぴり芸術の香りがする素敵な会場が確保できて、ホッとしたものでした。２日目は、慈恵医大の医学部国領校と看護学科の校舎を使用しました。

この学会のメインテーマは、吉武の提案により“看護の役割拡大－看護の発展の方向をさぐる”としました。看護の役割拡大の論議は、この時代としては必ずしも新しいテーマではありませんでしたが、私はかねてから看護の発展の方向、役割拡大の方向に大きな関心を持っていました。その方向をめぐって、看護界は岐路に立たされているように感じていたのです。１つの方向は、より多くの生命を守り、さらに多くの生命を救う能力を身につけるために、医学的な知識を深め、生命に直結する医療技術の習熟に努めて、緊急事態の下では、現在は医師のみに許されている高度の医療技術に、看護師も関わることができるようにという方向です。もう１つは、高度の医療技術などはむしろ医師に任せ、看護師は精神的、心理的な面で医師に不足している部分に、もっと積極的に関わっていくという方向です。当時の看護界では、後者の方向への発展が望ましいとする考えに傾いているように思われて、私は若干の危惧を感じており、大いに議論する価値があると考えたのです。両方とも必要であることは十分承知していながらも、臨床で生命と直接対決する場面が多かった私としては、最後には人の命を救うことの方が優先されるという考えを、どうしても捨てることができなかったのです。いろいろな思いはありましたが、この話題を提供したことは間違いではなかったと今でも思っています。

第20回という節目の学会でした。今、最高気温の年次変動の記録を見ても、1994年夏はまれに見る暑い夏であり、とにかく暑い２日間であったことを記憶しています。１日目と２日目と異なる会場を使用したことで、皆様にはご迷惑をおかけしましたが、学会は盛会であったと思っています。あの時、計画から実施まで、小人数所帯の総力をあげて協力して下さった慈恵医大看護学科の皆さんには、今も感謝しています。

この年が、“学会総会”の最後となり、翌年からは“学術集会”と呼ばれるようになりました。私は、はからずも“学会総会”のトリを勤めたことになったのです。

第21回学術集会

人々の健康の担い手としての看護研究を求めて

－北海道地区の承認と第21回日本看護研究学会学術集会の開催－

元札幌医科大学保健医療学部看護学科
山　田　要　子

日本看護研究学会雑誌発行30周年を心よりお祝い申し上げます。また、記念誌発行の原稿の執筆依頼状を手にして恐縮しております。しかし、この学会に加えて頂き、沢山の貴重な学びをさせて頂きましたことを思い、感謝の気持を胸に、筆を取らせて頂きます。

この学会は第８回から日本看護研究学会に改正され、私はこの時から学会に参加させて頂きました。第９回（1983年）からは私も研究報告をさせて頂き、年々その数も増やす努力を続けました。当時、北海道には、看護教育の大学は、天使女子短期大学、北海道大学医療技術短期大学部、札幌医科大学衛生短期大学部の３校があり、いずれの短期大学も時代の要請を受け、大学移行への模索をしているところでした。

年号も昭和から平成に代わった年の11月に、会員より北海道でも研究会を持ちたいという要望を受けて「（仮称）北海道地区設立準備のための準備会」を北海道大学医療技術短期大学部看護学科；佐野文男・吉田京子・伊藤和子・氏と札幌医科大学衛生短期大学部看護学科；鬼原彰・木原キヨ子・皆川智子・氏と私の７名で協議し、12月には「（仮称）日本看護研究学会の北海道地区設立に向けて」第１回準備会を開催し、出席者全員の賛同を得ました。出席者は天使女子短期大学；外崎陽子氏と準備を担当した上記の２看護短期大学を中心に、北海道教育大学；津村直子氏、厚生省看護専門官；服部美枝氏、札幌医科大学付属病院看護部；木田和子・前田良子氏、北海道大学医学部付属病院看護部；井上弘子氏、北海道短期大学；渕井喜美恵（故）氏、計14名でした。早速準備のための幹事会を発足させ、私が代表幹事の役割をお引き受けしました。翌年２月から（仮称）のまま、研究会および講演会を行い、毎年継続しました。会員は30数名でしたが、研究会の参加者は常に百名を超え、両者とも年々増加してきました。

1992年２月26日は、私の母の通夜の日でした。この日、日本看護研究学会地区評議員；井上弘子、津村直子、山田要子、山本良子氏と（仮称）北海道地区幹事の協議会を開催し、組織、規約の検討を行い、日本看護研究学会に提出しました。この年の総会でこれまでの四地区が八地区に改正され、ここに日本看護研究学会北海道地区が誕生しました。

しかし、そこから私の苦難が始まりました。理事会で第21回日本看護研究学会学術集会を北海道で開催するように推薦され、すっかり戸惑ってしまいました。理由は、当時私の勤務している短期大学が看護大学に移行する準備をしていましたので、もう１～２年あとに会長の選出をしてくださるようにお願いしましたが、聞き届けていただけず、複雑な思いでお引き受けしました。しかし、開催して様々なことを学びました。日本看護研究学会会員はじめ事務局の皆様さらに北海道知事・札幌市長の協力に支えられ、無事学術集会を開催できました。これからも人々の健康の担い手としての看護研究が益々発展されることを心より祈念いたします。

第22回学術集会

広島市で、生活者の視点から看護を再考する

ー第22回学術集会のねらいー

（前）滋賀医科大学
野　島　良　子

1996年、広島市での第22回学術集会では、メイン・テーマを「生活者の視点から看護を再考する」においた。視点を、臨床を中心とした看護実践から、社会のなかで日々の暮らしを営んでいる人々が求めている看護へと転じ、これからの看護の意義と役割を再考することが狙いであった。地域住民の生活を支える視点、ADLの自立とQOLの実現を目指す視点、人間らしい食生活への援助の視点、そして、障碍のある子供とその家族の生活の視点、から報告された地域での着実な実践例は、これからの看護の役割について考えていくうえで、人間、健康、環境に加え、日常生活という概念が非常に重要な要にあることを改めて印象づけたのではないか。

この回の学術集会を担当するにあたって、心したことが二つある。開催地は広島市である。平和への祈りがなければならない。いま一つは、わが国の看護研究をきり拓いてきて、すでに20余年の歴史をもつ学会である。学術学会としてそれなりの風土もできつつある。そうした背景を２日間の学術集会のなかに反映させたい。だから、この二つの願いをサブ・テーマ、“Artisticに、Academicに、そしてAt homeに”に込めて、学術集会運営上のモットーにした。それぞれの頭文字の“a”３つを組み合わせたロゴマークはそのシンボルである。幸い、このサブ・テーマに込められた願いは、近畿・北陸、四国・中国地方から馳せ参じてくださった地方会会員の協力で爽やかに実現されたのではないか。今も感謝している。平和公園内に位置している広島国際会議場だけですべてのプログラムを運営することができたことも、学術集会に“At home”な雰囲気を醸し出すうえで大いに役立ったように思う。会議場中央のフェニックスホールから見渡せる距離に各々の小会場が配置されているので、参加者がお目当ての会場を探して歩き回り、それだけで疲れはてるということもなく、その分を久しぶりに再会した全国の研究者仲間とゆっくり談笑し、新しい情報を交換し合うことできたことが、この学術集会にこめた二つの願いを実現するうえで、大いに効果的だったように思う。

また、本学会では第９回学術集会で松岡淳夫会長がMinnesota大学看護学部のSnyder博士を招聘されて以来、国際的に活躍されている若手の優れた看護研究者を招聘し、講演をお願いするのが伝統となっているが、この年の広島へはMayo Medical 財団のMarlene Hanson Frost博士をお招きした。学会の開催に先立って、７月にミネアポリスで開催されたMinnesota大学看護学部主催のセミナーに参加した折、その１日を割いて、３人の実行委員会のメンバーとともに、80マイルの距離を、バスでロチェスター市のMayo Medical 財団にFrost博士を訪ね、招聘講演の打ち合わせをした。乳ガン術後の女性達の心理的適応を助けるプログラムを開発されている博士のクリニックが、明るい壁と家具で整えられ、はんなりと柔らかい雰囲気をかもしだしていたのが、強く印象に残っている。

第23回学術集会

日本看護研究学会・学会雑誌、その豊かな土壌の中で育まれる

久留米大学名誉教授
河　合　千恵子

日本看護研究学会雑誌が発行されて今年で30年が経つという。改めて時間の流れの速さを感じ越しかたに思いを馳せる。

学会誌が発行された当時、私学の看護短期大学で教育に携わっていた私は、研究の必要性を感じ問題意識もあり研究として取り組んではいたが、決して納得のいくものではなかった。学問体系としてではなく実践重視の教育背景を持つ多くのナースたちは同じようなジレンマに悩んだのではないだろうか。そんな時、私は千葉大学看護学部附属看護実践研究指導センター老人看護研究部の土屋尚義教授と金井和子助教授のもとで共同研究員として研究指導を受ける機会に恵まれた。土屋教授はデータを一緒に読み込みながら進めていく指導方法であった。指導の過程を通して、内容の論理性は勿論のこと、スライド作り、発表の仕方、論文の書き方までも丁寧にご指導いただいた。これらは、看護の理論と実践を通して看護実践者、教育者、研究者としてのあり方を根本から考えることに繋がり、今でもこの思考は私の中で発展している。今は亡き素晴らしい師にめぐり合えたことに心から感謝するとともにご冥福を祈る。

そして私は、1994年４月、久留米大学医学部看護学科に赴任することになった。丁度その頃、第23回日本看護研究学会学術集会会長の要請をされていたが、果たして新しい環境の中で学科の完成年度前に全国規模の学術集会が開催できるかが心配であった。しかし、大変なことは承知で看護学科の教職員の方々のご理解とご協力が得られ、開学３年目の1997年７月、福岡県久留米市で初めて看護の学術集会が開催された。一旦決定すれば、教職員の目的に向かっての結集力は目を見張るものがあり、綿密な計画の元に着々と準備が勧められた。医師をはじめ看護以外の教員は、全国規模の学術集会開催の経験があり不足する部分を補ってくれた。組織化の特徴としては、多くの学生ボランティアの投入であった。印象に残っていることとしては、ある高名な看護の先生がボランティアの学生の姿を見て「今回参加の大きな収穫は、看護の将来を託せる素晴らしい若者に出会えたことである」とおっしゃり満面の笑みでお帰りになられたことと、村越康一先生が、「一番来てほしかった先生（故土屋尚義先生）が来られなくなって残念でしたね」とそっとおっしゃられたことである。

また、この学術集会開催を機に、日本看護研究学会九州地方会を設立し、毎年講演会や学術集会を開催している。早いもので今年は10年目を迎える。

看護学科の完成年度を見ない時期の学術集会開催の体験は、大変ではあったが私をはじめ関係者にかけがえの無い贈り物を与えてくれたことは確かのようである。

第24回学術集会

学術集会を開催して

ーのどかに、じっくりと学術の機会に触れる時間をもてた頃ー

青森県立保健大学教授
大　串　靖　子

1998年７月30日・31日、弘前市において開催された第24回学術集会は、当時の弘前大学教育学部特別教科（看護）教員養成課程（1968－2004年）の教職員、卒業生（同窓会）、在学生が協力して担当したものです。それまでも大体６年毎に弘前でこの学術集会を担当してきましたから、“スタッフ”には学会開催のノウハウがあり、有能なスタッフに支えられて、一応無事に役目を果たすことができたと思っています。

しかし、年々、発表演題や参加者が増加しており、地方都市では会場の確保が悩みで、１日目は弘前市民会館、２日目は弘前文化センターを主会場とし、会場間は弘前城公園の堀端や公園内を歩いて移動してもらう有様でした。

演題数は319題で、69群、10会場で口演と示説が行われました。地方開催で参加者数が懸念されましたが、会員724、非会員288、学生189、合計1,201名の参加を得て財務上も赤字を出さずに済みました。当時の会務報告では総額1,497万円で運営されています。

看護系大学が急増し始めたのは1992～1993年のことですが、1998年学術集会開催当時は急増の最中でしたから、看護系大学教員の増加を背景に、学会演題が増加している時期でした。その頃からまだ10年と経っていませんが、大学、大学院の増加に伴い、看護研究の上では数の増加だけでなく、学術集会の演題内容にも変化があるように思われます。

卑近な例ですが、形の上での変化として、プレゼンテーションは今の“パワーポイント”のような電子媒体ではなく、プロジェクターでスライドフィルムを１枚ずつ手動映写するものでした。スライド原稿や示説ポスターは今ならカラーで趣向を凝らしたものが簡単に手作りできますが、当時は手書きか、ワープロソフトで作るのがせいぜいで、きれいなスライドやポスターで発表をしたいとすれば、高額を払って印刷業者に依頼していました。

プログラムもシンプルなものでした。１日目には会長講演、特別講演「豊かなる縄文文化－三内丸山遺跡（岡田康博氏）」、教育講演「看護研究－今とむかし（吉武香代子氏）」、シンポジウム「臨床における看護研究の教育的サポート（中里志保子氏・林圭子氏・宮川純子氏・塩飽仁氏・座長玄田公子氏・木村紀美氏）」と学会総会があり、シンポジウムの時間帯には一般演題の発表は組まれませんでした。２日目は一日中一般演題発表があり、その間に教育講演「家族看護学の基本的視座－一単位としての家族を看護するということ（渡辺裕子氏）」「“絵を見ること、絵を読むこと”－わたしたちの感性を磨くために（故村上義男氏）」がありました。マンモス化し、多様なプログラムが錯綜した、今日の学術集会からすると、たかだか９年前ですが、涼しい自然環境のなかで、のどかに、じっくりと、学術の機会に触れる時間を持っていただけたのではないかと思っています。

第25回学術集会

学会発足から25年目の学術集会を担当して

前広島県立保健福祉大学副学長
田　島　桂　子

日本看護研究学会の第25回目、つまり四半世紀の継続時点となる節目の学術集会を、日本列島のほぼ中央に位置するといわれる静岡県浜松市で行いました。東海地区では初めての学術集会の要請でしたので、発足して間もない東海地方会のメンバーが一丸となって開催しました。この機会をいただけたことが、地方会のその後の基盤づくりと発展に役立ったのではないかと思います。

学術集会の開催は三千年紀（第３millennium）を目前とした1999年で、情報通信技術21世紀計画、教育の情報化、2000年問題などと、社会の動きが21世紀に向けた期待と不安に満ちた論議に湧いていた年でした。このような時代背景を考慮し、学術集会のメインテーマは、「次代を拓く看護の力－自立・変革・連携」としました。このテーマは20世紀の反省を土台に新しい世紀を視野に入れた準備をするには、新たな世紀に向けた看護の自立・変革・連携に関わる論議が、事前に必要であろうという発想から生まれたものです。20世紀後半のさまざまな分野における飛躍的な発展と医療環境の変化のスピードから考えて、これらは必至の要件だったと思います。

したがってそのプログラムには、次代の看護学教育、医療・看護のあり方および医療経済・医療改革の進む方向などを論議できるテーマを組み入れました。それも20世紀後半の関連領域において、国内外の第一人者による話題提供と論議でした。そのうち、国外からの講演者の中には、わが国の看護および看護学教育の発展過程に大きな影響を与えてきた米国から、国立看護研究所の初代所長や複数大学の看護学部長歴任者、Dr. Ada Sue Hinshowの参加があります。Dr. Hinshowは米国の教育および研究に関わる教育機関・施設間の格差などについて、米国の実情を包み隠さず話されたことが印象に残っております。

論議では、生活環境の変化、逼迫する医療費、躍進する医療現場を背景に、いかに看護の質を高め、かつそれを支える看護職者の教育のあり方などが考えられました。次代において看護の質を高めるには、看護専門職者の基礎能力とそれを発展させる創造性、実行力が、先見性・国際性を基盤にして培われる必要性が確認されたのではないかと思います。

それには、時代の動きを勘案して、帰納的思考と演繹的思考が常に必要であることはいうまでもないでしょう。しかし、21世紀を踏み出して６年が経過した今、改めて周辺を見渡すと、ダイナミックな将来予測を基盤にするより、目の前の姑息的なことにとらわれ、その改善が優先されているように感じるのは私だけでしょうか？

１世紀は100年あるわけですから、目標を足元に置くのではなく、夢、大きな目標に向かって、各々が自立し、並行して行う関係者との連携が高邁な目標達成に役立てられることを祈念します。

第26回学術集会

「新たな世界を切り拓く看護職 ー Three Ways to Growth」を開催して

神奈川県立保健福祉大学　特任教授
愛知県立看護大学名誉教授・前学長
草　刈　淳　子

日本看護研究学会雑誌発刊30周年を心からお祝い申し上げます。第26回学術集会は2000年の開催でしたが、この年は第二次世界大戦後わが国に「総婦長制度」が国立病院・療養所に導入されてから50年という節目の年であり、看護管理を専門とする私としては、新しい世紀に臨むにあたり、過去50年間の日本の看護管理の歩みをまとめ、若い方達の支援を背中に新たな世界を切り拓いていきたい！との強い思いでお引き受けしたのでした。

学術集会を１年後に控えた頃、たまたま白内障の手術で入院した折り、窓外の景色や青空を眺めているうちに、集会開催に向けて色々と構想が湧いて来ました。「2000年に看護を語る：急いで、しかし着実に責務を果たすときが来た！」（日本看護協会出版会，2000，7）は、その時の構想を軸に、大学時代同級の小玉香津子さんの協力によって生まれた本です。この副題は、歴史の節目に立った看護職の決意と姿勢が伝わるもので、副題を入れてよかったと思っています。日野原重明先生はじめ看護の応援団の方々の絶大なご協力と、出版会のご努力によって学会当日に間に合ったのは何よりでした。

その折、執筆して下さった大森文子先生と金子光先生は、ご高齢にも拘わらず幕張での学術集会に出席して下さり、懇親会で会員にご挨拶なさった時の両先生のお元気な様子は、本誌23（4）、2001会報53号に残されています。

会長講演「看護管理50年とこれから」（日看研誌、24（1）、2002）を終えて私が壇上から降りた時、多くの苦難を克服し同時代を生き抜いてきた者同志として共感された多くの先生方が駆け寄ってきて下さいました。あの時の感動は未だに忘れられないばかりか、その後の私の行動の原動力になっているように思います。特別講演は、絵画史・女性史で著名な千葉大学の若桑みどり先生の「創造する日本の女性」を、教育講演は、女性初の日本銀行政策委員会審議委員をなさった篠塚英子先生（当時お茶の水女子大学副学長）に「経済学から見た看護サービスの現状と展望」をして頂き、講演後、看護職と鼎談して頂きました。シンポジュウム21世紀の看護を担うために「拡大する看護職の役割と責任」では、医療政策や医事法学、医療現場、患者の支え合う会など各立場から在宅ケアについて意見を述べて頂きました。招聘講演を予定していた米国ペンシルバニア大学看護管理教授Margaret Sovie（Magnet Hospital調査で有名）は、ドクターストップのため来日できず残念でした。いま当時を振り返り、多くの方々のご協力・ご支援によって何とか大任を果たせたことを改めて厚く感謝する次第です。

あれから７年、本誌に記録されている諸課題は、さらに重要さを増し、現実的な問題として迫ってきていることを実感しています。本誌は学会発展の歴史の証人であり、同時にこれからの方向を指し示す羅針盤でもあります。本学会雑誌の更なる発展を期待します。

付記：大森先生は2001年に、金子先生は2005年にすでに他界され、看護界の二つの巨星を失ったおもいです。病いのため来日を断念されたDr. Sovieがその後亡くなられたことを、2003年ICNP（国際看護分類）の講演で来日された同大学看護学部長Dr. Norma Langから伺いました。また特別講演をして下さった若桑みどり先生も2007年秋に急逝されました。

新しい時代を切り拓いてゆく決意を皆様と共に誓い合い、今は亡き諸先生方のご冥福を心からお祈り申し上げます。

第27回学術集会

金沢で開催した21世紀最初の学術集会の思い出

金沢大学大学院医学系研究科保健学専攻　教授
泉　　キヨ子

真夏に開催する学会なので、ボランティアにTシャツを準備したら、「１枚では２日間着られない、夜中に洗濯せよというのか」と言われ、急遽２枚にしたことや寄付金を家族や中学時代の同級生からも募ったことが懐かしく思い出される。また何よりも強調したいことは自分の大学のほぼ全員の看護教員と学生や駆けつけてくれた卒業生、地元の病院の看護職など、会員および会員外の多くの方々から絶大なる協力を得たことであった。

21世紀の最初に開く学術集会は加賀百万石の伝統を伝承しながら、知の創造へむかって発信する機会にしたいと考えた。そのころ今世紀は「看護の時代」とも言われていたので、それにふさわしい幕開けにしたいと考え、メインテーマを『新しい時代が問う看護研究の方向』Directions of Nursing Research in the 21st centuryとした。すなわち、看護の原点を見つめ直して、より専門性を発揮していく方向に向かっていきたいと考えた。また、保健医療福祉の協働によるアプローチが求められていたので、このような時代に看護が専門職としての力量を発揮していくには、看護実践を科学的基盤に基づくケアにしていく研究や今まで無意識で行ってきた看護現象をていねいにみつめて、その意味を他者にも説明し、社会に認知されるような研究が必要と考えた。そして「ともに探りながら」多様な方向を探求し、かつ研究成果が少しでも臨床実践に役立つものでありたいと願った。このような観点から会長講演は自分の専門領域との関係から「人間の持てる力を引き出すリハビリテーション看護学の追究」とし、特別講演として川島みどり氏に「看護学の到達点と新世紀の課題－看護技術論の立場から－」、米国で精神看護学のナースプラクティショナ-である田中勝子氏に「臨床現場に活かす看護研究」、牧本清子氏（大阪大学教授）に「新しい時代における看護研究の方略－日米の看護研究比較をとおして－」などの講演を行い、シンポジウムは「看護現象の着眼と研究の方法－質的研究を中心に－」「看護におけるエビデンス」の２題と「ITが看護および看護研究に及ぼす影響」「実践と研究における看護倫理」のワークショップを施行した。

２日間ともに快晴であった。炎天下のなか５つの会場を渡り歩くという不便さにもかかわらず、どの会場もとても盛況であり、ボランティアも親切でよく働いてくれた。そうして何よりうれしかったのは、お世辞にしろ「よい学会だった」といわれたことであった。

第28回学術集会

サッカーワールドカップ2002 & “パシフィコ横浜”

北里大学名誉教授
池　田　明　子

第28回学術集会は2002年、世界中が日韓ワールドカップに沸き立っていた年でした。学会会場の“パシフィコ横浜”がワールドカップのプレスセンターに使用されることを知ったのは、実は会長をお引き受けした後のことでした。恒例の催し物等も全て６月のワールドカップ開催期間を避けて、７月、８月に集中している状態でした。悪戦苦闘の末、何とか２日間の学会日程の確保に漕ぎ着けた時には、既に持てるエネルギーの大半を費やしてしまった感じでした。最悪の場合に備えて、大学キャンパス会場でのやりくりまで検討していたことも、今となっては懐かしく思い出されます。

学術集会のメインテーマである「Linkage ～看護実践のよりどころとなる研究」には、研究の実践的価値を高めたいという企画委員一同の願望が込められていました。

平成４年の看護職等の人材確保法に後押しされ、全国の看護系大学が急増し続けている中で、とかく研究業績づくりのための学会発表が目立つようになり、実践現場の問題解決に役立つ研究を発展させていく必要性を痛感している頃でした。学術集会当日に2,000名を越える参加者が得られたのも、横浜という地の利の良さに加えて、このような企画委員会の趣旨に多くの方々が共感を寄せられた結果ではなかったかと自負しております。そして、もう一つ忘れてはならないのは、地区学会の支援が得られたことです。企画の段階から広報活動に至るまで、東海地区の会員の方々には多くのお力添えを頂き、地区学会が日本看護研究学会を支える底力となっていることを改めて実感しました。

学術集会の任務としては、会員に研究発表の場を提供することも重要ですが、それ以上に参加者に学会の重要性をアピールする場としての意義もあるのではないでしょうか。その意味では、当学術集会に初めての参加者が多かったことも大変喜ばしいことでした。

幸い多数の参加者に支えられて学術集会の財政も潤され、赤字の心配はありませんでしたが、2,000名以上収容可能な会場確保の困難さや経費調達の苦慮等々を実感してみて、毎年このような大規模の学術集会を開催することへの素朴な疑問が生じたことも事実です。日本看護研究学会としては、会員にとって身近な地区学会を充実させることにより学会としての裾野を広げることができれば、全国レベルの学術集会は、例えば「看護学総合学会」のような形で４年毎の開催でもいいのではないか等と今後のあり方を思い描いたりしていました。この思いは５年経った現在でも変わっていません。

本年度から日本看護科学学会が法人化としての第一歩を踏み出すことになりましたので、当学会も学会としての独自性をより明確に打ち出す必要性があるのではないでしょうか。

この度の学会誌発行30周年を機に看護学総合学会としての性格付けをより明確化し、看護実践の質的向上に寄与する学会として、力強く発展し続けることを心より願っております。

第29回学術集会

第29回の学術集会開催（大阪）の随想

大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻　教授
早　川　和　生

日本看護研究学会という非常に大きな学会を2003年７月に大阪で開催させていただきました。４年前に開催された学術集会ですが、まだ最近のことのように鮮明に思い出されます。この学術集会は、近畿・中国四国地方会の力強いバックアップがあったからこそ順調に開催できたことが強く印象に残っており、今でも地方会の諸先生への感謝の気持ちが頭から離れません。

また、参加者が多く集まるようにと、医学書院からは多数の看護学関連雑誌にて度々大きく案内を出していただくとともに、週刊医学界新聞において大々的な記事を掲載していただきました。そして、スポンサーとなる複数の企業を斡旋していただき、日本の看護学系の学会として初めてのランチョン・セミナーを企画することができ、学術集会の資金運営面でも大いに助かりました。

学術プログラムについて記憶に深いのは、シンポジウム「未来を見つめるナーシング・アカデミー：21世紀ストラテジー」を企画して、司会を草刈淳子先生と川島みどり先生にお願いして、シンポジストに主要な学会の理事長５名の高名な先生方に未来を見据えた高所からの議論を展開していただけたことでした。日本看護研究学会（川村佐和子理事長）、日本看護科学学会（村嶋幸代理事長）、日本看護学教育学会（田島桂子理事長）、日本在宅ケア学会（島内節理事長）、日本看護診断学会（藤村龍子理事長）の５名の先生方の先導的オピニオンに大いに刺激を受けたという声を後日、多くの方々から聞きました。

また、プログラムを企画する早い段階から、新進気鋭の若手研究者の方々に数多く参画していただき新しいアイデアを出していただけたことも幸いでした。学会としては初めての試みとして、ヤングナースフォーラム「新しい看護領域を担うナース達」（司会：川野雅資先生、道重文子先生）そして、イブニングフォーラム「看護起業家の夢：その可能性と課題」（司会：川口孝泰先生）も新しい試みで、多くの参加者が集まりました。

総会後の特別講演では、医療文化論に特に造詣が深い清水忠彦先生に「歴史に学ぶ専門職の栄枯盛衰：変革期の社会を生きる知恵」を聞くことができました。清水先生は、本当の学者と呼べる稀有な先生で、激動する現代社会において我々看護職がよるべき方向性について医療の歴史から学ぶべき点を御指摘いただきました。清水先生のお言葉に「現在は、過去と未来の一点である」という言葉が有りました。何と奥深い一言でしょう。

第30回学術集会

日本看護研究学会第30回学術集会の目指したもの

国際医療福祉大学教授
竹　尾　惠　子

私が日本看護研究学会学術集会の会長をお引き受けしたのは第30回大会でした。看護学の発展の歴史を考えて見ますと、看護学はまず看護の実践があって始まったわけですが、学問体系を整えるという大きな課題と長く取り組み、そのために学問の基盤となる学術的研究活動が求められ、大いに推奨されてきたのです。今では大きな学会も増え、たくさんの研究発表がなされるようになりました。しかし、こうした研究が実践に生かされなければ、看護学の基盤は脆弱なものにとどまるという危惧を日ごろから、抱いておりました。つまり、私には看護実践と看護研究の融合こそが、これからの学会の役割として極めて重要なことと思われました。

そんな状況の中、この学術集会のテーマにヒューマン・ケアリングという概念を取り上げてみたのです。この概念はコロラド大学のジーン・ワトソン教授が提唱して、看護学を学ぶ人たちは誰もが知っている概念として定着しておりますが、考えてみると日本文化の中にはこうした考え方、概念が、慈愛とか思いやり、慈悲などの言葉と共に存在していることに気づきます。海外から導入された概念から学ぶことも多々ありますが、日本的な文化を背負って、あるいは日本的考え方を基盤にして日々活動する看護実践の中で、このヒューマン・ケアリングはどのような形、行動、認識として具現化されているのだろうかという疑問に答えを見出したくなったのです。つまり、抽象的な概念を具体的な活動の場に生かすための道筋を探ってみたいと思ったわけです。そうした考え方から、この学会での私の講演は、「ヒューマン・ケアリングの実践への具現化」というテーマにしたのでした。内容については学会雑誌をご覧頂きたいと思います。

学会開催に当たっては、学会事務局の長として、現国立看護大学校看護学部長の西尾教授の指揮のもと、大学校の先生方が総力を挙げて下さいました。また、学生たちがボランテイアとして力を貸してくれました。２年近くに及ぶ準備期間を経て、大宮ソニックシテイで開催の運びとなりましたが、学会前日から大きな台風が日本を目指して、とくに関東地方めがけて近づき、おかしなことに東から西へと通過していきました。そんな訳で、学会参加者や関係者に大きな影響を及ぼし、多方面に大変なご苦労をかけることになってしまいました。このような困難に出会っているさなかにあって、当時いろいろと気遣いをいただいた方々のご親切は今も忘れることができません。ここに改めて感謝の意を表したいと思います。

学会開催という大きな事業を体験させていただきましたが、改めて看護学の今後について、新たな飛躍のためのエネルギーが必要な時期にあると思っております。

特別講演

看護技術実演交流会

第31回学術集会

第31回学術集会

～当事者達との協働～

東札幌病院・北海道医療大学
石　垣　靖　子

19世紀のアイルランドに始まった近代ホスピスケアは、１世紀を経てイギリスのシシリー・ソンダースに受け継がれ、人間性と科学性を伴ったホスピスケアが誕生した。アイルランド「愛の姉妹会」を創設したマザー・メアリー・エイケンヘッドの人間尊重の精神は現在まで脈々と生き続けており、それは人間としてありのままに生きていくことを支援することであり、最期まで自分自身であり得るように、その人にその力を取り戻させることでもある。私たち人間は、等しくどのような状態になっても意志も感情もあり、それまでの生活歴から培われた固有の価値観をもつ存在である。人間として遇するということは、一人ひとりがそのような存在として尊重されることであり、言葉を換えると普通の人が病み、障害をもったときでもペーシエント（耐える人）ではなく、その人自身（パーソン）として遇されることである。日本にホスピスケアが紹介されて30年、超高齢社会をむかえたいま、この思想の定着はますます重要になってきた。

2005年７月に開催した第31回学術集会は、この趣旨のもとに、「人間として遇する医療・福祉の定着に向けて～ペーシエントからパーソンへの挑戦～」とし、認知症や終末期のがん患者、小児や精神疾患等を持つ人たちのケアに携わる専門家による講演やシンポジウムを通して、アドボケートとしてのナースの役割を確認しようとした。自分の意志をうまく伝えられない人たちはもちろんのこと、ケアの対象に寄り添い、普通の人として尊重するというあたりまえのことは、ナースにとって価値のある挑戦である。浦河の「べてるの家」の統合失調症をもつ当事者達による自分自身の問題を研究する＜当事者研究＞をプログラムに盛り込んだ。自分自身が自分の症状やその意味を解明することによって、症状を前向きに捉え、その人が、自分自身の力を取り戻すプロセスを当事者達が示してくれた。大会のテーマソング＜ありのまま＞を作ってくれた「べてるの家」の山本さんと下野さんは、「ありのまま」を自らが受け入れるには、厳しく苦しい現実に直面することであることを語ってくれた。受け手と担い手との共同行為としての医療が成り立つためには、病や障害を持った人たちとの協働＝パートナーシップは不可欠である。そして、私たちは、症状を擬人化しながら病と共に生きようとする彼らの発表から、「ありのまま」を尊重することの果てしない奥の深さを考えるきっかけを得ることができた。

学術集会の後、この活動を通して彼らはまた新しい事業を立ち上げることができた。そのことにささやかな貢献ができたことをうれしく思っている。そして何よりも384題の演題と、あらためてケアの原点をディスカッションする機会を与えて下さった学会員のみなさまに心から感謝したい。

第32回学術集会

第32回日本看護研究学会学術集会を振り返って

福岡女学院看護大学学部長・教授
前大分大学医学部看護学科教授
松　岡　　緑

平成18年８月23日・24日、別府市ビーコンプラザにおいて第32回日本看護研究学会学術集会を開催した。1990年代以降、医療の高度化、高齢化社会の進行や疾病構造の変化など様々な医療ニーズが広がり、それに伴って派生する複雑な問題に対応できる専門職への要請が高まってきた。平成４年の看護師等の人材確保の促進に関する法律に基づく施策の実行を見る段階になってから、看護系大学の数は急増した。

４年制看護大学は増加したが、果たして看護は社会資源として、国民のニーズに的確に応えているのだろうか。このことについて考えてみたい、と思い学術集会のメインテーマを「社会資源としての看護－激動の時代、看護に求められているもの－」とした。

会長講演は、メインテーマと同じタイトルとし、「社会の変化と社会的意義に向き合い、社会的要請を先取りすること。その活動を国民に発信して、看護の中だけでなく社会的広がりの中で看護を位置づけていく。同時に国民から親しまれる変革の提案者になることが、社会的資源としての看護に期待されている」旨の問題提起を行った。

本会の学術集会では、パトリシア・ベナー博士の招聘講演「ベナー看護論－看護師らしくみて考えるための学び－臨床的推論とケアリング実践」を企画した。ベナー先生のご講演には多くの参加者が感動された。学術集会前日の市民公開講座には多数の市民の参加があり、また、プレカンファレンスセミナーも盛況だった。特別講演やシンポジウムも盛況だった。「交流会」では、今回初めての「学会雑誌への投稿から掲載まで」と題する日本看護研究学会編集委員長・川口孝泰先生の講演が、参加者の高い関心を呼んだ。その他２題の実演交流会、企業との共催でランチョンセミナーを３題実施。いずれも満員だった。

パトリシア・ベナー先生に招聘講演感謝状授与

学術集会の主役・研究発表は、411題を総てポスターセッションの形式で行い、各会場に数名のコーディネーターを配置した。各会場とも満員の盛況で活発な意見交換がなされた。今回の参加者は1,660名（会員1,074名、非会員437名、学生149名）。北海道から沖縄まで全国から参加され、充実感と熱気にあふれた学術集会になった。

学術集会の準備から本番までを振り返ってみると、私が平成16年に開催をお受けし、平成17年４月に九州大学から大分大学医学部看護学科に移籍した。学術集会を開催するためには資金が必要である。大分大学着任後は資金集め、準備に着手した。大分大学医学部看護学科の教員および本学術集会の企画委員の綿密な計画、また実行委員会の皆様、多くの方々がボランティアで参加、業者任せにせず、皆様が手弁当で学術集会の準備、運営に当たっていただいた。当日は好天に恵まれ、多数の参加者があり、会計収支も黒字となったので、日本看護研究学会、ご協力いただいたた障害者三団体および日本看護研究学会九州地方会に寄付することもできた。この学術集会の成功は、物心両面にわたって陰に陽に、ご支援いただいた皆様のおかげと、感謝申し上げます。

第33回学術集会

第33回日本看護研究学会学術集会を終えて

日本赤十字北海道看護大学
石　井　ト　ク

平成19年7月28・29日の両日、盛岡市民文化ホール・いわて県民情報交流センターにて、第33回学術集会を無事終了することができました。日本看護研究学会会員の皆様、さらに関係者の皆様に多大なご協力、ご支援をいただきましたことに心から御礼申し上げます。

日本看護研究学会学術集会はこれで33回目になりますが、岩手県では初めての開催という記念すべき事業となり、岩手の史上を飾ることができました。また、学会誌は昭和50（1978）年の創刊以来、平成19年で30回を迎えることになります。そこで、学会誌発刊30周年記念行事として、記念講演をあわせて開催させていただくことができましたことに感謝しております。

33年の時の流れと本学会活動の積み重ねは、なにものにも得がたいものと、事務局一同実感いたしました。その思いは、今の時代をみる、将来を考える、そして倫理で斬るというコンセプトから、メインテーマを「生命科学時代における知と技とこころ」とし、教育講演を科学史学者の米本昌平氏に「先端医療技術の進歩と近未来」、国際的にご活躍のSamantha Mei-che Pang氏に招聘講演「看護研究の倫理～国際的動向から～」をお願い致しました。両先生は、会員の皆様にこたえ、さらに多くの示唆を与えて下さいました。

メインテーマを受け企画した二つのシンポジウム、「医療の安全と安心の確保－医療事故防止の探求－」と、「人としての生と死－終末期医療ガイドラインをめぐって－」は、現在、そして将来の看護のありようを提示して下さいました。ワークショップも圧巻でした。また、学会前日のプレカンファレンスセミナーでは各セクションでの看護倫理、質的研究、量的研究も盛況で、諸先生方のおかげで効果的な学びを得ることができました。

会員の皆様の日頃の能力を充分発揮できますように、口頭発表を取り入れ、環境を配慮致しました。また、示説の工夫も好評でした。

本学会の開催に当たっては、多くの企業の皆様にお力をいただき、また、お忙しい中170名ものボランティアが運営に参加して下さいました。

初めての学術集会、しかも完成したばかりのいわて県民交流センターを学術集会に使用するのは開設後初めてという状況のなかでつつがない終了を迎えることが出来ましたことは、岩手の皆様の「おもてなしの心」と物的の両面にわたったご支援の賜物と、感謝の念に堪えません。皆様には心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

5 資　　料

原著論文目録

（1巻～29巻）

看護理論

野島良子：看護学におけるTerminologiesの明確化に関する研究－看護における「技術」の概念をとおして（その1）問題の所在と研究方法－, Clarification of Terminologies in the Science of Nursing: Through the Definition of "Art" of Nursing, 5(1), 122-134, 1982.

野島良子：看護学におけるTerminologiesの明確化に関する研究－看護における「技術」の概念をとおして（そのⅡ）看護論の基本構造(1)－, Clarification of Terminologies in the Science of Nursing: Through the Definition of "Art" of Nursing : (Part Ⅱ) The Structure and Key Concepts of NursingTheories (I), 5(2), 50-60, 1982.

野島良子：看護学におけるTerminologiesの明確化に関する研究－看護における「技術」の概念をとおして（そのⅡ）看護論の基本構造(2)－, Clarification of Terminologies in the Science of Nursing: Through the Definition of "Art" of Nursing : (Part Ⅱ) The Structure and Key Concepts of Nursing Theories (Ⅱ), 5(2), 61-71, 1982.

野島良子：看護学におけるTerminologiesの明確化に関する研究－看護における「技術」の概念をとおして（そのⅡ）看護論の基本構造(3)－, Clarification of Terminologies in the Science of Nursing: Through the Definition of "Art" of Nursing : (Part Ⅱ) The Structure and Key Concepts of Nursing Theories(3), 5(3), 76-89, 1982.

野島良子：看護学におけるTerminologiesの明確化に関する研究－看護における「技術」の概念をとおして（そのⅡ）看護論の基本構造(4)－, Clarification of Terminologies in the Science of Nursing: Through the Definition of "Art" of Nursing : The Structure and Key Concepts of Nursing Theories(4), 6(2), 9-18, 1983.

野島良子：看護学におけるTerminologiesの明確化に関する研究－看護における「技術」の概念をとおして（そのⅢ）「看護関係の生成過程・モデル」の構成と「技術」の定義－, Clarification of Terminologies in the Science of Nursing: Through the Definition of "Art" of Nursing : (Part Ⅲ) Construction of a Model and Definition of "Art" of Nursing, 6(3), 9-19, 1983.

野島良子：看護理論の構造式化とその意義, Symbolic Formulation of a Nursing Theory ; It's Significances of Theory Development, 7(4), 7-15, 1984.

野島良子：人間のWholenessと時間・空間, WHOLENESS AND TIME ／ SPACE CONCEPTS IN NURSING THEORY, 8(1, 2), 101-109, 1985.

看護管理

友藤敬子, 太田君枝, 山口桂子, 中野正孝, 草刈淳子, 松岡淳夫：看護部組織における副婦長の位置づけ, Limitation of Managing of Assistant Nursing-Director on The Organization in Nursing Department, 7(4), 47-55, 1984.

湯山英子, 草刈淳子, 青木和夫：夜間看護業務における病棟看護婦の自己評価に関する考察, A STUDY ON STAFF

NURSES SELF-EVALUATION FOR NIGHT SHIFT ACTIVITIES, 10(4), 60-70, 1987.
小山幸代, 山田泰子, 田中千鶴子, 小玉香津子, 土屋尚義, 金井和子：特別養護老人ホームに求められる看護機能（第２報), The Function of Professonal Nursing Demanded in Homes for the Disabled Elderly(2), 11(3), 14-26, 1988.
阪口禎男, 岡野節子, 政次富美子：看護業務の検討－受持制徹底を試みるための一試案－, A Study of Nursing Services － A tentative Plan to Carry out the Assign Patients System－, 13(1), 95-104, 1990.
花島具子, 五十嵐美知子, 鶴岡藤子：手術部における新人教育－新人看護婦の経験を調査して－, Education for Recruits in the Operating Room － Investigate What Recruits Had Experienced－, 14(1), 67-77, 1991.
阪口禎男, 江口智子：主任業務の再検討, A Re-Examination on Nursing Services of Chief Nurses, 14(1), 78-85, 1991.
阪口禎男, 浅里いさお：看護度と看護行為の検討, Research on the Relation between the Nursing Care Level and the Nursing Care, 14(1), 86-95, 1991.
加藤美智子, 境美代子, 堀井満恵, 川口孝泰, 阪口禎男, 松岡淳夫：病棟内看護活動の分析－思考・情動を含めた調査より－, Analysis of Nursing Activities in a Hospital Ward － A Trial Plan including Thinking and Emotion－, 14(1), 96-105, 1991.
高田貴美子, 草刈淳子, 川口孝泰：S大学医学部附属病院に勤務する看護婦の職務満足に関する検討, A Study of Job Satisfaction of Nurses in S University Hospital, 18(1), 53-62, 1995.
吉田道雄, 内川洋子, 成田栄子：看護場面における看護婦のリーダーシップ行動測定尺度作成の試み(1), Development of the Scales for Measuring Nurses' Leadership Behaviors to their Patients, 18(4), 7-16, 1995.
吉田道雄, 内川洋子, 成田栄子：病院における看護婦長のリーダーシップ行動測定尺度の構成, Construction of the Scales for Measuring Head Nurses' Leadership Behavior to their Nursing Staff, 19(4), 29-42, 1996.
当目雅代, 上野範子, 木村みさか：病院に勤務する看護職における社会資源に関連する認知度, Knowledge of Hospital Nurses about Social Resources, 22(5), 9-21, 1999.
木村紀美, 大串靖子, 阿部テル子, 鈴木光子, 米内山千賀子, 工藤せい子, 花田久美子, 葛西敦子：研究活動に関する看護職員の意識の因子－北海道・東北６県について－, The Factor in Nurses' Attitudes for Carrying out the Research of Nursing － In Hokkaido and the Area of Northeast Japan－, 23(2), 19-28, 2000.
浅野祐子：総合病院に勤務する看護婦のキャリア志向とその関連特性に関する研究, Nurses' Career Orientation and Related Factors － A Survey at Large General Hospitals－, 25(1), 45-56, 2002.
木村留美子, 南家貴美子, 河田史宝：臨床経験や年齢が看護婦の自己評価に及ぼす影響について（I）－自己能力評価から－, The influence of clinical experience and age on nurse self-evaluation, in the context of self-competence（Part I), 25(1), 69-76, 2002.
木村留美子, 河田史宝, 南家貴美代：臨床経験や年齢が看護婦の自己評価に及ぼす影響（Part Ⅱ）－自己イメージから－, The Influence of Experience and Age on Nurse Self-enaluation, in the Context of Self-image（Part Ⅱ), 25(2), 29-35, 2002.
綿貫恵美子：看護職の法的責任認識に関する研究, Nursing Staff's Understanding of their Liability in Nursing Practice, 25(2), 61-69, 2002.
桐山雅子, 砂川洋子, 奥平貴代, 平安綾子, 大湾知子：総合病院に勤務する看護中間管理職者のストレスと関連要因に関する研究, A study of Stress and Related Factors in Middle Manager of Nurse Working at General Hospitals, 25(4), 61-71, 2002.
藤内美保：交代制勤務の看護師の生活時間構造と生活意識および疲労との関連－一般女性有職者および女性教員との比較－, Relationship between distribution of time and recognition for life and fatigue by nurse － Differece due to working woman and teachers－, 27(4), 17-24, 2004.
中村　恵, 長谷部佳子, 平井さよ子, 森田チエコ：手術室に勤務する外回り看護師の専門職的自律性と看護実践, The

Development of the Professional Autonomy and the Nursing Practice in the Circulating Nurses at the Operating Room, 27(4), 35-44, 2004.
澤田忠幸, 羽田野花美, 矢野紀子, 酒井淳子：女性看護師の職務満足と心理的Well-Beingに及ぼす個人特性要因の影響－中核的自己評価の役割－, Dispositional effects on job satisfaction and psychological well-being of nurses － the role of core self-evaluations－, 27(4), 45-52, 2004.
石井京子, 藤原千恵子, 星　和美, 高谷裕紀子, 河上智香, 西村明子, 林田　麗, 彦惣美穂, 仁尾かおり, 古賀智影, 石見和世：看護師の職務キャリア尺度の作成と信頼性および妥当性の検討, Development of the Nursing Career Assessment Scale and to Evaluate its Reliability and Validity, 28(2), 21-30, 2005.

看護技術

山口公代：摂食が脈拍等に及ぼす影響－健康者12名について－, 1(2), 14-18, 1978.
大竹保代, 松岡淳夫：看護行動と放射線被曝について, 1(2), 59-73, 1978.
正村啓子：不満の多い患者へのアプローチ－看護過程の分析を試みて－, Approach to the patient with complaints － Analysing the nursing process record－, 3(2), 63-71, 1980.
池上　緑, 重村由美子, 栗原保子, 山口公代, 城　慶子：術後経管栄養法に関する研究, An Experimental Study of Tube Feeding in Patients after Gastrectomy, 3(3), 40-48, 1980.
山口公代, 萩沢さつえ：便器挿入時の体圧分布の検討, A Study of The Distribution of Body Pressure on the Buttocks While Lying Three Different Types of Bedpans, 4(2), 42-48, 1981.
山口桂子, 吉田伸子, 土屋尚義, 土屋陽子, 佐藤栄子, 野口美和子, 宮崎和子, 行木あさ：内科病棟入院患者の動静に関する研究, ABOUT THE PATIENT'S DAILY LIVING ATTITUDE AND ITS DETERMINANT FACTORS IN THE MEDICAL WARD, 4(3), 52-62, 1981.
佐々木有子, 新堀満子, 津島　律, 川上　澄：直腸検温の体温計挿入深度に関する検討, Studies on Rectal Thermometry Relating to the Distance of Insertion, 5(2), 20-25, 1982.
近藤百合子, 斉藤友美, 棟田みほ, 木内妙子：円座使用部位の皮膚温の変化, Changes of Skin Temperature During The Use of an Invalid Rubber Cushion, 5(3), 68-75, 1982.
津島　律, 高野眞智子, 新堀満子：インスリン皮下注射のもみ方別による血糖値の変動, Changes in Blood Sugar Levels according to Rubbing Methods used with Subcutaneous Insulin Injection, 6(2), 19-26, 1983.
玄田公子, 寄本　明：看護作業のエネルギー代謝に関する研究（第１報), Studies on Energy Metabolism in the Nursing Works（part 1), 6(2), 38-43, 1983.
斉藤光市, 十束支朗：足の裏の計測, The Measurements of The Sole, 6(3), 35-41, 1983.
川口孝泰, 武田　敏, 松岡淳夫：褥瘡予防における体位変換時間の検討－家兎耳翼加圧による組織学的変化より－, Studies on the intervals of patient position change for the prevention of pressure Sore － Histological changes of rabbit ear lap by pressure－, 6(3), 51-62, 1983.
宮崎和子, 山田泰子, 小山幸代, 田中千鶴子, 相馬朝江, 佐藤麗子, 岡部純子, 小野寺綾子, 土屋尚義, 山口桂子, 平井真由美：入院患者の動静に関する研究（Ⅱ), About the Patient's Daily Living Attitude and its Determinant Factors in Medical Ward, 7(1, 2), 81-95, 1984.
高橋房恵, 榎本麻里, 宮腰由紀子, 石川みち子, 渡辺誠介：食事動作についての検討－筋電図上の変化から－, Electromyographical Studies of Usage of Eating Utensils, 7(3), 3-9, 1984.
望月美奈子, 松岡淳夫：洗髪器機の人間工学的考察, Study of Client Condition Used Nursing Tools on Hair-Cleaning, 7(3),

27-35, 1984.

川口孝泰, 金子裕行, 永井祐子, 上野義雪, 松岡淳夫：褥瘡好発部位における寝具の温湿度変化に関する実験, The experimental study of Temperature change and Humidity change on Bed with the most common occurence point of pressure sore, 7(4), 40-46, 1984.

後藤千佳, 木村紀美, 米内山千賀子, 近藤久美子, 福島松郎：心・大血管手術後の頭部脱毛症におよぼす諸因子の検討, INCIDENCE FACTORS OF POSTOPERATIVE ALOPECIA WITH HEART AND GREAT VESSEL SURGERY, 8(1, 2), 95-100, 1985.

萩沢さつえ, 河瀬比佐子, 金井和子, 土屋尚義：心負荷の少ない排便方法の検討－尿中カテコールアミン測定より－, Effects of Defecation Using The Toilet and Bedpan on The Urinary Catecholamine Excretion, 8(3,4), 14-18, 1985.

玄田公子：看護作業のエネルギー代謝に関する研究（第２報), Studies on energy metabolism in the nursing works（part 2), 8(3,4), 42-50, 1985.

中村喜代美, 望月美奈子, 松岡淳夫：洗髪機器の人間工学的考察（第２報）－使用時のエネルギー代謝について－, Study of Client Condition Used Nursing Implement on Shampoo, [Ⅱ] － Metabolism on Client－, 9(1, 2), 82-90, 1986.

川口孝泰, 松岡淳夫：病棟内看護活動分析について－その手法の提案－, A suggestion for the analytical method of nursing activity on ward, 9(1, 2), 96-102, 1986.

宮腰由紀子, 榎本麻里, 佐野房恵, 渡辺誠介：看護動作の筋電図学的分析（その１）－移動動作モデルの周波数成分－, EMG Studies on a Nursing Procedure（PART 1）－ Frequency Analysis of EMG when Changing the Position of a Patient－, 9(4), 5-19, 1986.

白浜美香子, 大串靖子：寝たきり老人における体圧分布の特性, A Study on the Distribution of Body Pressure in the Bedridden Aged With Handicap, 9(4), 29-36, 1986.

工藤恭子, 南沢汎美：仰臥位保持による心身の自覚的訴え, ANALYSIS OF DISCOMFORT PERCEIVED IN FIXED SUPINE POSITION, 10(3), 16-23, 1987.

加藤美智子, 川口孝泰, 松岡淳夫：褥瘡予防用マットレスに関する実験的検討－M-I型モデルを使用して－, Experimental Study on Mattresses for Preventing Bedsores － Fundamental research using M-I model－, 10(3), 24-35, 1987.

三好淳美, 大串靖子：体格・肢位・寝具の条件が複合した状態での体圧の特性, A STUDY ON THE DISTRIBUTION OF BODY PRESSURE UNDER COMBINED THREE FACTORS OF PHYSICAL-TYPE, POSITION OF LOWER LIMBS AND BEDDING SYSTEM, 10(4), 34-44, 1987.

木村昭代：腋窩温測定に関する問題点, Problems Related to Measurements of Axillary Temperature, 11(3), 9-13, 1988.

河瀬比佐子, 萩沢さつえ, 奥村利恵, 久保基子, 坂本清美, 早崎和也：シャワー浴負荷の検討－洗う体位及び部位による違いについて－, Most Taxing Region of the Body and Its Effect of Posture during Showering in Normal Subjects, 11(3), 27-33, 1988.

花田久美子, 浦本　睦, 木村紀美, 米内山千賀子, 福島松郎：腹臥位安静時における体圧ならびに安楽の工夫, A Study on Body Pressure in Face-Down Position and Reduction of its discomfort, 11(4), 15-24, 1988.

柳沢ゆかり, 土屋尚義, 金井和子：点滴中の心拍数の変動, The Heart Rate Changes in the Intravenous Drip Infusion, 11(4), 25-33, 1988.

川守田千秋, 山崎紀子, 工藤せい子, 津島　律：上半身清拭における貧血患者のVital Signs, Vital Signs of Anemia Patients in Cleaning the Upper Half of the Body, 11(4), 52-60, 1988.

萩沢さつえ, 河瀬比佐子, 畑　裕子, 油木幸代, 木津由美子, 清島千昌, 早崎和也：シャワー浴模擬動作による心拍数、血圧の変化－特に下腿、頭部を洗う場合－, Changes in Heart Rate and Blood Pressure Induced by Mimic Activities of Showering in Normal Subjects, 12(1), 57-62, 1989.

鈴木栄子, 大串靖子：体圧に関連する寝具条件の検討, A Study on Bedding Systems in Relation to Body Pressure, 12(3), 9-15, 1989.

寄本　明, 中村裕子：三交替制勤務における看護婦のエネルギー消費量に関する研究, A Study of Energy Expenditure for Nurses in the Three Shift Works, 12(3), 25-31, 1989.

山本勝則, 内海　滉：看護者－患者関係における言語的非言語的コミュニケーションの行動計量学的分析－患者主導型および看護者主導型会話効果の比較－, Behaviometric Analysis of Verbal Non-Verbal Communication between Nurses and Patients － Comparison of the Conversational Effects between Nurses' and Patients' Leading Types－, 12(3), 39-42, 1989.

平松京子, 松岡淳夫：臥床体位の変換と呼吸型の変化について, Relation of Bed-Lying Position to Breathing Form, 12(4), 22-28, 1989.

沼田華織, 工藤せい子, 津島　律：前屈位洗髪における貧血患者の脈拍・呼吸・血圧, Vital Signs of Anamia Patients in Forward Bending Position for Washing their Hair, 13(1), 63-72, 1990.

白井喜代子, 松岡淳夫：体位と腹腔内圧について－腹腔内圧形成と上半身挙上－, Relation of Intra-Abdominal Pressure and Position of Bed-Lying － Formation of Intraabdominal Pressure and lifting up the upper half-body－, 13(1), 73-81, 1990.

川口孝泰, 松岡淳夫：病室におけるテリトリー及びプライバシーに関する検討－多床室における患者の意識調査－, A Study on Territory and Privacy in a Hospital Patients' Room － Survey of the Patients' Feelings in Multi-Bed Ward－, 13(1), 82-94, 1990.

白石晴美, 大串靖子：仰臥位持続時の訴えの発現と体圧および皮膚知覚との関連, Studies on Complaints in the Spine Position in Relationship between Body Pressure and Dermal Sensation, 13(4), 11-19, 1990.

西沢義子, 小玉正志, 早川三野雄, 高松むつ：認知スタイルからみた血圧測定誤差に関する研究, A Study of Measurement Error of Blood Pressure and Congnitive Styles, 13(4), 27-34, 1990.

葛西敦子, 山形賀津子, 木村紀美, 花田久美子, 米内山千賀子, 福島松郎：外転枕使用による側臥位時の体圧と安楽に関する一考察, A Study on Body Pressure and Comfort in Lateral Position with the Abduction Pillow, 14(2), 37-51, 1991.

東　玲子, 松岡淳夫：努責方法と腹腔内圧－30°半座位において－, Relation of Starning Styles at Defecation and Intraabdominal Pressures － On the 30° Fowler's Position－, 14(2), 61-68, 1991.

松永保子, 内海　滉：皮膚血流の研究－風刺激による初期血流量および皮膚温の変動－, Studies on the Cutaneous Microcirculation and Temperature by Wind Loading, 15(2), 5-11, 1992.

深井喜代子, 大名門裕子：上肢の注射部位における皮膚痛覚閾値の検討－三角筋、前肘、手背各部の皮膚痛点分布密度の比較－, Comparison of Pain Threshold in Skin Areas Usually Used for Injection － Distribution of Pain Points on Deltoid Muscle, Anterior Cubital- and Dorsum of Hand-Regions－, 15(3), 39-46, 1992.

深井喜代子, 大名門裕子：注射痛に対する看護的除痛法の効果の実験的検討－マッサージ、温罨法、冷罨法の手背部皮膚痛覚閾値に及ぼす影響－, Experimental Study of Nursing Analgesic Techniques for Reduction of Pain in the Injected Skin － How Does Pain Threshold of Skin in Dorsum of Hand Change During Rubbing, Cold or Hot Compress ?－, 15(3), 47-55, 1992.

西沢義子：認知スタイル要因が血圧測定誤差に及ぼす効果－ Accuracy 要因の教示の有無による比較－, Effects of a Cognitive Style Factor on the Measurement Errors of Blood Pressure － A Comparison between Presence and Absence of the Instruction of Accuracy Factor－, 15(3), 63-69, 1992.

猪下　光, 内海　滉：色環境の及ぼす心身への影響－色刺激と皮膚血流量の変化－, Influence of the Color Environment to the Human Body － Observed by the Cutaneous Microcirculation－, 15(4), 17-23, 1992.

石井範子, 千田富義, 戸井田ひとみ, 平元　泉：ケリーパード洗髪における補助具の効果, The Effect of a Small Supporting Tool in Kailipad's Shampooing Method, 17(1), 43-48, 1994.

真田弘美, 須釜淳子, 金川克子, 紺家千津子, 森田千枝, 稲垣美智子, 塚崎恵子：褥創予防の看護に関する研究－手術を受ける患者に対するエアーマットレスの使用基準の検討－, Study of Pressure Sore Prevention － Evaluation of Criteria on Application of Air Mattress after Surgery－, 17(1), 61-68, 1994.

本江朝美, 金井和子, 土屋尚義：入眠過程における心電図変化について－特に心拍数の変化と睡眠感との関連性についての検討－, Studies on Electrocardiographic Changes during Initiation of Sleep － Correlation Changes of Heart Rate with Subjective Feelings about Sleep－, 19(1), 45-52, 1996.

本江朝美, 金井和子, 土屋尚義：起床前後の心電図変化について－特に心拍数の変化と睡眠感との関連性についての検討－, Studies on Electrocardiographic Changes before and after Rising － Correlation Changes of Heart Rate with Subjective Feelings about Sleep－, 19(1), 61-68, 1996.

楊箸隆哉, 藤原孝之：入浴が及ぼす生理・心理作用－Ⅰ. 脳波の周波数解析－, Physiological and Psychological Effects of Hot Bath. － I. Frequency Analysis of EEG－, 19(2), 43-50, 1996.

楊箸隆哉, 藤原孝之, 井出久美子：入浴が及ぼす生理・心理作用－Ⅱ. 脳波α波のゆらぎ解析－, Physiological and Psychological Effects of Hot Bath －Ⅱ. Fluctuation Analysis of Alpha Wave of EEG－, 19(3), 7-12, 1996.

川口孝泰, 勝田仁美, 櫻井利江：多床室の療養の場の特性に関する検討－レパートリー・グリッド法によるベッド位置の嗜好調査より－, A Study on Living Situations of Inpatients in Multi-Bed Rooms － On the Preference of Location of beds based on "Repertory Grid Technique"－, 19(3), 13-20, 1996.

真田弘美, 須釜淳子, 稲垣美智子, 伴真由美, 永川宅和：圧力の相違がヒトの踵における皮膚組織と深部組織へ及ぼす影響, Effects of Different Levels of Tissue Loading on the Superficial and Deep Skin Tissues of the Human Heel, 20(2), 27-37, 1997.

北村満代：看護処置における患者の対人認知とストレス覚醒度の変化－ラザルスの理論による－, Patients' Interpersonal Cognitive Evaluation and Changes of Stress Arousal in Nursing Treatments － Relating to R. S. Lazarus' Stress-Coping Theory－, 21(2), 7-18, 1998.

深田順子, 米澤弘恵, 石津みえ子, 時々輪浩穏, 中村恵子, 藤井徹也, 長野きよみ, 太田節子, 森田チヱコ：椅座前屈位洗髪時における筋負担, Muscle Load on Shampooing Hair in the Forward-Bent-Posture Sitting Position, 21(2), 29-37, 1998.

休波茂子, 荒尾博美, 脇　幸子, 島田達生：絆創膏貼付によって剥離された皮膚組織の走査電子顕微鏡的観察, Scanning Electron Microscopic Observation on the Skin Tissues after Removing the Adhesive Plasters, 22(1), 39-45, 1999.

楊箸隆哉, 小林千世, 篠原千津, 木村貞治, 大平雅美, 藤原孝之：移動技術に関する生理的・心理的負荷量の検討－２つの移動方法における看護者の負荷量の違い－, Physiological and Psychological Assessment of Transfer Techniques － Differences of Nurses' Load between the Two Transfer Methods－, 22(2), 15-23, 1999.

草野恵美子, 依藤史郎, 早川和生：背部における交感神経皮膚反応　Sympathetic skin response（SSR）－体位変換が及ぼす影響－, The Influence of the Postural Change in Sympathetic Skin Response（SSR）on the Back, 22(4), 9-15, 1999.

長谷部佳子, 中山栄純, 佐藤千史：温罨法が就床中の生体の快適感、体温、皮膚血流量に及ぼす影響, Effect of Warm Compress on Thermal Comfort Sensation, Body Temperature, and Cutaneous Blood Flow while Turning in Bed, 22(5), 37-45, 1999.

吉田聡子, 佐伯由香：香りが自律神経系に及ぼす影響, Effects of Fragrances on Autonomic Nervous System, 23(4), 11-17, 2000.

柴田しおり, 柴田真志, 片山　恵, 吉岡隆之, 平田雅子：起き上がり援助技術方法の違いが看護者の生体負担に及ぼす影響, Comparison of the Physiological Stresses on Nurses in Two Techniques to Assist Clients to Sit Up, 23(5), 43-53, 2000.

淘江七海子：看護職における言語的応答能力測定尺度の作成とその信頼性・妥当性の検討, Design of Verbal Communication Skills Inventory of Nursing and Study of its Reliability and Validity, 26(1), 55-66, 2003.

長谷部佳子：温罨法が就床中の生体に与える影響に関する基礎的・応用的研究, Effects of Dry Local Heat on Cutaneous Blood Flow and Subjective Thermal Sensation in Normal Human Subjects Being in the Bed, 26(5), 45-57, 2003.

杉本幸枝, 小山恵美子, 森　將晏：高齢者および若年者の仙骨部軟部組織厚と圧迫による変化, Thickness and pressure deformability of soft tissue over the sacrum in elderly and young subjects, 27(2), 39-43, 2004.

岩崎眞弓, 野村志保子：局所温罨法によるリラクゼーション効果の検討－温罨法と足浴が身体に及ぼす影響の比較検討より－, Examination of the Relaxing Effects of the Local Warm Pack Application －Comparison of the Influences of Two Treatments : Warm Pack Application to the Back and Warm Foot Soaks－ , 28(1), 33-43, 2005.

佐藤好恵, 成田　伸, 中野　隆：殿部への筋肉内注射部位の選択方法に関する検討, A Study on the Method of Choosing Intramuscular Injection Site in the Buttocks, 28(1), 45-52, 2005.

静野友重, 乗松貞子, 岩田英信：高齢者の下肢浮腫に対するタッピングの効果, Effect of Tapping on the Leg Edema of the Aged, 28(2), 15-19, 2005.

遠藤明美, 奥山真由美, 村上生美, 森　將晏：ギャッチベッドの背上げにおける援助方法の検討－臥床位置と膝上げ方法から考える－, Considering the Optimal Backrest Elevation Technique on the Gatch Bed about Lying Location and Knee Elevation, 28(5), 47-54, 2005.

看護教育

佐藤裕子, 杉山倫子：高校衛看における諸問題－准看資格の取得にからむ問題－, Problems in High School Health & Nursing Course － Problems about Getting License of Assistant Nurse－, 2(2), 3-12, 1979.

麻生佳澄：大分東明高等学校における衛生看護科の諸問題－看護基礎医学の補習結果より－, Various Problems in Hygienic Nursery Course of Oita Tomei High School － The Result of Supplementary Lessons in Basic Nursery Medical Science－, 2(2), 13-18, 1979.

津島　律, 大和田恵子：高等学校衛生看護科における教育の現状と問題点, The present situation and educational problems in the nurse course of senior high schools, 2(2), 19-33, 1979.

東サトエ：成人看護の指導の一工夫, A device of instruction in Adult Nursing, 2(2), 34-43, 1979.

木町節子, 西村千代子：看護学生の臨床実習に影響を及ぼす臨床指導者の行動に関する一考察, A Study of the Influence of the Behaviour of Nurse Instructors upon Clinical Practice of Nursing Student, 3(2), 72-83, 1980.

山下かおる, 木下佳子, 菅本栄子, 高平文子, 富谷晃子, 野島良子：臨床実習において看護学生が望む教師像についての研究, A STUDY OF NURSING STUDENT'S OPINION ON TEACHERS IN CLINICAL EXPERIENCE, 3(3), 3-12, 1980.

渡辺陽子, 末次たづ子, 小島操子：学生による成人看護実習指導の評価－１回生と２回生の比較検討－, Student's Evaluation on Clinical Instruction in the Field of Medical-Surgical Nursing － A Comparison between graduates in 1979 and 1980－, 3(3), 13-19, 1980.

鈴木秀美, 鈴木裕子, 中村尚子, 松岡淳夫：高等学校衛生看護科における看護教育の人間形成に及ぼす影響, Influence to Personal Growth through Education by the High School Nursing Course, 5(2), 9-19, 1982.

成田栄子, 水上明子, 栄　唱子：臨床における看護実習指導の検討 (I), Hospital Training Procedures for Student Nurses(1), 6(2), 44-51, 1983.

福本美鈴, 玄田公子：Terminal Careにおける文献学習について, A Method of Learning by Literature for Terminal Care, 8(1, 2), 83-88, 1985.

池崎恭子, 梶原えり子, 大塚由美子, 栄　唱子, 成田栄子：臨床看護実習における実習記録の分析－小児白血病の事例を

中心に－, Analysis of Bedside Training Reports Focused on the Case of Leukemia in Children, 9(4), 20-28, 1986.
服部朝子：視覚遮断状況下での空間認知と時間認知－アイマスクを用いての体験学習から－, Space and Time Perception under Visual Deprivation, 9(4), 78-88, 1986.
田中千鶴子, 宮崎和子, 相馬朝江, 山田泰子, 内海　滉：看護学生の看護婦志向と性格特性（第Ⅰ報）－ P-Fスタディによる検討－, Personality and Intention of Becoming Nurse － An Observation upon Nurse-Students by P-F Study（I）－, 11(3), 41-50, 1988.
田中千鶴子, 相馬朝江, 山田泰子, 宮崎和子, 内海　滉：看護学生の看護婦志向と性格特性（第Ⅱ報）－ P-Fスタディによる検討－, Personality and Intention of Becoming Nurse － An Observation upon Nurse-Students by P-F Study（Ⅱ）－, 11(3), 51-56, 1988.
小松原明哲：看護教育の進展と「よい看護」概念の変容について, Change of Image Structure of "Good Nurses" in accordance with Educational Progress on Nursing School, 14(1), 41-54, 1991.
木村紀美, 米内山千賀子, 花田久美子, 福島松郎：学生の性格特性と初期の外科看護実習評価との関連, The Relationship between Characteristics of Nursing Students and Evaluation of Primary Surgical Nursing Practice by Staffs, 14(2), 9-14, 1991.
金山正子, 津山和子, 川本利恵子, 内海　滉：精神病に対する看護学生の意識構造(1), The Consciousness to the Psychosis of the Students in a Nursing College(1), 14(2), 53-60, 1991.
桂　敏樹, 野尻雅美, 中野正孝, 上谷幹代：看護学専攻女子学生の自覚的疲労症状訴え数を規定する要因分析, A Study on Factors Affecting Subjective Feeling of Fatigue in Female Nursing Students, 14(2), 69-79, 1991.
金山正子, 田中マキ子, 川本利恵子, 内海　滉：精神病に対する看護学生の意識構造(2)－入学形態、成績、接触経験、入学年度による検討－, The Consciousness to the Psychosis of the Students in a Nursing College(2) － The Study with Entrance Way, Result of Lecture of Psychiatrics, Approach to Patient or Hospital, and the Year of the Class－, 15(1), 65-72, 1992.
金山正子, 田中マキ子, 川本利恵子, 内海　滉：精神病に対する看護学生の意識構造(3) － CAS 不安傾向による検討－, The Consciousness to the Psychosis of the Students in a Nursing College(3) － In Relation with C. A. S. Test－, 15(3), 56-62, 1992.
森　千鶴, 佐藤みつ子, 森下節子, 内海　滉：看護短期大学学生の自己教育力に関する研究－学年別にみた自己教育力に関するアンケートの所見－, Study on the Ability of Self-Education in Nursing College Students － Analysed by the Questionnaire Responce of the School Year Grade Groups－, 15(4), 24-35, 1992.
腰前佳子, 寄本明, 玄田公子：看護学生のエネルギー消費量に関する研究, A Study of Energy Expenditure in Nursing Students, 16(2), 13-19, 1993.
金山正子, 田中マキ子, 川本利恵子, 内海　滉：精神病に対する看護学生の意識構造(4) － CAS・STAI との関係－, The Attitude toward the Mental Disordered of the Students in a Nursing College(4) － In Relation with C. A. S. Test and STAI－, 16(2), 21-28, 1993.
波多野梗子, 小野寺杜紀：看護学生および看護婦の職業的アイデンティティの変化, Professional Identity of Student Nurses and Graduates, 16(4), 21-28, 1993.
金山正子, 田中マキ子, 川本利恵子, 内海　滉：精神科実習における看護学生の意識構造の変化－学年による意識構造の比較－, The Change of the Attitude toward the Mental Disordered of the Students in a Nursing College by the Psychiatric Nursing Practice － In Comparison before and after the Lecture and Practice－, 17(1), 69-78, 1994.
Shinichi KIHARA, Nobuko TAGAWA, Kumie SAITO, Toshio SAKATA, Akitoshi MURAKAMI：A Study of Conditions during Clinical Practice for Nursing Students : Subjective Feeling of Fatigue, A Study of Conditions during Clinical Practice for Nursing Students : Subjective Feeling of Fatigue, 17(4), 9-15, 1994.
堤由美子：臨床実習用ストレス質問紙（CSQ）の日本語版の開発, The Development of a Revised Edition of Pagana's

Clinical Stress Questionnaire for Japanese, 17(4), 17-26, 1994.
堤由美子：臨床実習におけるストレス感情の経時的変化の検討－鹿大版CSQによる－, A Study on the Changing Process of Stressful Emotion during Clinical Practice of Nursing Students, 17(4), 27-38, 1994.
金山正子, 川本利恵子, 田中マキ子, 内海　滉：精神科実習における看護学生の意識構造の変化と不安との関係－ STAI・CAS との関係－, The Relation between the Change of the Attitude toward the Mental disordered and the Anxiety of the Students in a Nursing College on the Psychiatric Nursing Practice － In Relation with STAI and C. A. S Test－, 18(2), 7-16, 1995.
安藤詳子, 内海　滉：看護学生の自我同一性に関する研究－職業的同一性形成を規定する教育的要因－, Studies on the Ego Identity of Nursing Students － Especially on the Occupational Identity Formation Influenced with in the Nursing Educational Context－, 18(3), 7-19, 1995.
金山正子, 田中マキ子, 川本利恵子, 内海　滉：看護教育による精神病に対する看護学生の意識構造の変化－３年間の継続的研究－, Changes of Attitudes toward the Mentally Disordered of the Students in a Nursing College － A Three-Year Continuous Study－, 18(3), 21-30, 1995.
金山正子, 田中マキ子, 川本利恵子, 内海　滉：精神科実習における看護学生の意識構造への影響要因－実習場所、受持患者の疾患による検討－, The Effect of the Change of the Attitude toward the Mental disordered of the Students in a Nursing College on the Psychiatiric Nursing Practice － In Study with the Place of the Practice and the Disease of the Patient－, 18(4), 17-23, 1995.
大谷英子, 松木光子：老人イメージと形成要因に関する調査研究（1)大学生の老人イメージと生活経験の関連, Study on Images for the Elderly and the Formative Factors (1)Correlation between College Students' Images for the Elderly and their Experiences in Daily Life, 18(4), 25-38, 1995.
西沢義子, 早川三野雄：救急蘇生活動における認知スタイル別教育方法の研究－実習初期の学生に対する心肺蘇生法の指導方法に関する検討－, Research of the Educational Method of Emergency Resuscitation in Students with Different Cognitive Styles － An Examination of Cardiopulmonary Resuscitation Guidance for Students in the First Stage of Practice－, 19(1), 53-60, 1996.
岩本テルヨ：学習内容の定着を図る看護技術教育の研究－ CAI 教材「救急蘇生法」の学習効果－, Study of Nursing Technique Education to Aim at Making Learners Fully Understand what they Learned － Effect of Learning with CAI Teaching Materials "Resuscitation"－, 19(2), 17-24, 1996.
竹内登美子：看護学生用ストレス・コーピング尺度の作成（その１）－因子分析による内的信頼性・妥当性の検討－, Stress and Coping Scale for Nursing Students(1) － Assessment of Reliability and Validity by Factor Analysis－, 19(2), 25-34, 1996.
橋口暢子, 井上範江, 宮原晋一：看護大学の病理学教育のありかた：佐賀医科大学における病理肉眼実習の取り組み, Macropathological Practice in Nursing Program of Saga Medical School, 19(4), 19-27, 1996.
石井範子, 針生　亨：看護学生の「病人観」とその形成について（I）－看護教育を通しての「病気イメージ」と「病人イメージ」の変化を中心として－, Nurse Student's "View of the Sick" and the Formation of it（I）－ Changes of Image of "Illness" and "the Sick" through Specialized Nursing Education－, 20(2), 7-25, 1997.
岡田加奈子, 川田知恵子：看護学生に対する喫煙に関する教育プログラムの検討, Evaluation of Smoking Prevention Programs for Student Nurses, 21(1), 27-38, 1998.
今本喜久子, 徳永祥子：４年制看護教育における人体解剖生理学実習, A Combined Laboratory on Human Anatomy and Physiology for a 4 Year Nursing Education Program, 21(1), 39-49, 1998.
寺島喜代子：看護学生の学習態度と自尊感情の縦断的研究－ある公立看護短期大学の場合－, A Longitudinal Study of

Learning Attitude and Self-Esteem of Nursing Students － Based on A Prefectural College of Nursing－, 21(4), 7-19, 1998.
真壁五月, 野島良子：看護学臨地実習における学生の行動型と成長発達過程, Behavior Patterns and Developmental Process of Nursing Students in Clinical Learning, 22(4), 27-47, 1999.
坂江千寿子, 安川揚子, 宮腰由紀子, 富田美加, 野々村典子：内容分析方法を用いた実習レポート評価に関する基礎的研究, A Content Analysis of the Effectiveness of Clinical Practice Studies by using the Word Frequency Method, 22(4), 49-61, 1999.
臼井雅美, 渡部節子, 鈴木良子, 南雲マリ子, 酒井恵子：筋肉内注射技術の学習方法と卒業後の注射技術習得意識との関係について－卒業後１～３年目の看護婦の認識より－, Relationships between their Leaning Techniques of Injection into the Muscle and their Consciousness on Mastering the Techniques after Graduating from Nursing School : One to Three Years after Graduation, 22(5), 47-58, 1999.
嶺岸秀子, 古屋　健：精神看護実習が看護学生の精神障害者イメージ、看護態度、および事例アセスメントに及ぼす影響, The Effects of Psychiatric Clinical Nursing Practicum on Nursing Students' Images of Mental Disorders, Attitudes to Psychiatric Nursing, and Case Assessments., 23(4), 59-72, 2000.
葛西敦子, 本間久美子, 花田久美子, 米内山千賀子, 木村紀美：看護学生の喫煙と学習意欲・精神的健康との関連, Relationship among Smoking, Learning Motivation, and Mental Health in Nursing Students, 24(1), 67-75, 2001.
佐藤紀久江, 風岡たま代, 大塚邦子：看護基礎教育におけるリハビリテーション看護についての一考察, A Study of Rehabilitation Nursing in Under Graduate Nursing Education, 24(4), 45-55, 2001.
岡田加奈子, 川田智恵子, 畑　栄一, 中村正和：受講した看護学生の「喫煙に関する授業」への受けとめ, Response to the Smoking Related Lecture by Participating Student Nurses, 25(1), 57-68, 2002.
西沢義子, 阿部テル子, 工藤せい子, 花田久美子, 葛西敦子：青年期女子の社会的スキルに関する研究－ Social Skills Inventory を用いた分析－, A Study of Social Skills in Young Women － Analysis from Social Skills Inventory－, 25(2), 49-59, 2002.
松永保子, 森田敏子, 内海　滉：看護学生の成功回避動機と達成動機に関する研究－大学生および短期大学生の因子構造の比較－, A Study on the Motive to Avoid Success and the Achievement Motive of Nursing Students － Especially on the comparison of the two factor analyses of nursing college students－, 25(5), 35-46, 2002.
松浦和代, 阿部典子, 良村貞子, 神成陽子, 升田由美子, 阿部修子, 浜めぐみ：日本語版SDLRSの開発－信頼性と妥当性の検討－, Development of Japanese － SDLRS for Application－, 26(1), 45-53, 2003.
大見サキエ：対人関係能力としての看護学生のオープナー特性の検討－一般大学・看護大学・看護専門学校生の学校間・学年間の比較－, Nusing Students' Opener Characteristic as an Indicator of Interpersonal Relation Abilities － Comparisons Between General University and Nursing Students' and Between Grades－, 26(2), 19-33, 2003.
澤井信江, 野島良子, 田中小百合, 降田真理子, 日浦美保, 大町弥生：潜在的大学院生としての看護職者の看護学・保健学系大学院に対するニーズ：Delphi technique を用いた全国調査, The Potential Needs for Higher Education in Nursing among Clinical Nurses in Japan : A Delphi Technique Survey, 27(2), 29-37, 2004.
竹内登美子, 石井秀宗, 比嘉肖江：術後看護用CAIの学習履歴分析によるコースウエアの評価, Evaluation of the CAI Course Ware for Post-Operative Care by Analyzing Learning Records, 27(5), 15-24, 2004.
久米弥寿子：ロールプレイング演習における看護学生の言語的・非言語的コミュニケーション行動の特徴に基づく演習プログラムの検討－行動コーディングシステムによる内容と出現パターンの分析－, A Nursing Practicum Program Based on Characteristics of Verbal and Non-verbal Communication in Nursing Students' Role-playing － Analysis of Communication Contents and Patterns using Behavior Coding System－, 28(1), 63-71, 2005.
坂井恵子：看護教員のストレス要因を測定するストレッサー尺度の開発－専修学校の看護教員を対象として－,

Developing a Scale for Evaluating Stressors on Teachers at Nursing Schools, 28(5), 25-35, 2005.
亀岡智美, 舟島なをみ, 山下暢子：看護学教員の教育ニードの現状とそれに関係する特性の解明, Educational Needs of Nursing Faculty: Current Status and Related Factors , 29(5), 27-38, 2006.

看護倫理

成田　伸, 小山豊子, 石井トク, 山内京子：看護研究における実態調査－倫理的側面から－, Ethical Consideration in Nursing Research, 13(4), 20-26, 1990.
綿貫恵美子：看護職の法的責任認識とその関連要因に関する研究, Nursing Staff's Understanding of their Liability : Analysis of Factors Contributing to such Understanding, 27(1), 51-58, 2004.
新田純子：看護師の臓器提供に対する態度尺度・知識尺度の開発と信頼性・妥当性の検討－臓器提供関係施設看護師を対象とした実証的研究－, Development of Nurses' Attitudes Scale and Knowledge Scale Regarding Organ Donation and Study of Its Reliability and Validity: Nurses at the Hospitals Perform Organ Donation, 29(4), 15-22, 2006.

精神保健看護

松田たみ子, 吉田伸子, 行木あさ：不眠を訴える患者の心理的特性について, 1(2), 19-27, 1978.
早川和生：AN EXPERIMENTAL ANALYSIS OF PSYCHOTHERAPY USING THE CONCEPTS OF DIGITAL － ANALOGUE INFORMATION AND SYSTEMS THEORY, 2(2), 55-60, 1979.
桂　敏樹, 野尻雅美, 中野正孝：分裂病者の注意・思考障害－認知心理学的検討－, Disorders of Selective Attention and Thought in Schizophrenics － Cognitive Psychological Approach－, 12(3), 16-24, 1989.
桂　敏樹, 野尻雅美, 中野正孝：分裂病の経過と情報処理障害の関連性, The Relationship between Course and Disorder of Information Processing in Schizophrenics, 13(3), 9-19, 1990.
土江淳子, 中村弥生：看護婦の職務意識とストレス、バーンアウトとの関係, The Relationship between Nurses' Job Attitudes and 'Their Stress or Burnout Syndrome', 16(4), 9-20, 1993.
深井喜代子, 長谷川美由紀, 奈良あゆみ, 松尾圭子：便秘を訴える精神科入院患者への集団指導の効果, Effect of Group Educational Plan on Constipated Inpatients in Psychiatric Ward, 17(3), 15-21, 1994.
久米和興：精神分裂病患者の病識と人格傾向及び作業能力との関係, Relationship of Insight into disease with Personality Trait and Work Ability in Schizophrenic Patients, 19(4), 43-51, 1996.
藤崎　郁：摂食障害患者の看護問題の構造と看護者の認識の分析, Categorization of Nursing Issues on Eating Disorders, 20(5), 21-33, 1997.
山崎登志子：バーンアウト傾向と性格特性、ソーシャル・サポートとの関係－病院規模による比較－, The Relation among Burnout, Personality Trait and Social Support of Nurses Investigated at Three Different Sized Hospitals, 23(2), 29-41, 2000.
山崎登志子, 久米和興：精神障害者小規模作業所への通所目的と自立援助についての一考察, A Study on the Purpose of Attending Sheltered Workshops for Mentally Handicapped People and the Support for their Social Independence, 23(4), 19-29, 2000.
加藤知可子：青年期におけるコーピング、精神的健康に与える性役割の影響, Effect of Sex Role on Mental Health and Coping in Adolescenece, 24(1), 57-66, 2001.
藤原千恵子, 本田育美, 星　和美, 石田宜子, 石井京子, 日隈ふみ子：新人看護婦の職務ストレスに関する研究－職務スト

レッサー尺度の開発と影響要因の分析－, A Study of Job Stress among Hospital Nursing Staff as Advanced Beginner, 24(1), 77-88, 2001.

久米和興, 森　文子：精神分裂病患者の歩数と精神症状変化の関係, Relationship between Number of Paces and Changes in Mental Symptoms among Schizophrenics, 24(1), 89-98, 2001.

石松直子, 大塚邦子, 坂本洋子：看護婦のメンタルヘルスに関する研究－ストレス・職務満足度・自我状態相互の関連－, Study on Nurses' Mental Health － Job-Stress, Job-Satisfaction and Ego States－, 24(4), 11-20, 2001.

國方弘子, 中嶋和夫, 高木永子, 高井研一：レクリェーション療法の効果に関する看護者の認知構造, Psychatric Nurses' Perception of the Effect of Recreation Therapy in Psychiatric Nursing, 25(1), 101-109, 2002.

白石裕子, 舟越和代, 中添和代：ストレス場面における言語的反応の特徴からみた母親の虐待傾向とその関連要因, The abuse tendencies of mothers from the viewpoint of verbal reactions during frustration scenarios and its relation factor, 25(5), 47-58, 2002.

石井京子, 星　和美, 藤原千恵子, 本田育美, 石田宜子：中堅看護師の職務ストレス認知がうつ傾向に及ぼす要因分析に関する研究－新人看護師と比較して－, Factorial Analysis of Recognition of Job Stress and Depressive Tendency in Moderately Experienced Nurses － A comparison with advanced beginner nurses－, 26(4), 21-30, 2003.

國方弘子, 中嶋和夫：精神障害者のQOL：うつコーピングと抑うつ性の影響, Quality of Life in Mental Disorders：the Effect of Depression Coping and Depression, 26(5), 19-29, 2003.

片岡三佳, 野島良子, 豊田久美子：精神分裂病者が語る入院体験－現象学的アプローチを用いて－, Lived Experience of Hospitalized Patients with Schizophrenia, 26(5), 31-44, 2003.

佐々木栄子, 小山善子：うつ病患者への教育・指導に関する基礎的研究－患者・看護者へ一般性自己効力感尺度を用いた質問紙調査を通して－, Research on intervention to patients with depression － through questionnaire survey to patients with depression and nurses using the Greeral Self Efficacy Scale－, 27(2), 19-28, 2004.

森本美智子, 高井研一, 中嶋和夫：病気や生活に関する不安認知が入院患者の精神的健康に及ぼす影響, The Influence of Cognition During Anxiety Related to Illness, Life and the Mental Health of Inpatients, 28(2), 51-58, 2005.

國方弘子, 茅原路代, 大森和子, 神宝貴子, 岡田ゆみ：デイケアや作業所に通所する統合失調症患者の生活への思いとその影響要因, Schizophrenic Patients' Experiences in Psychiatric Day Care or Small-Scale Workshops: A Qualitative Study, 29(1), 37-44, 2006.

安東由佳子, 片岡健, 小林敏生：神経難病患者のケアに携わる看護師のバーンアウトに影響を及ぼす職場環境ストレッサーの探索, Finding Out the Work-Related Environmental Stressor Influencing Burnout Among Nurses Caring for Patients with Neurological Intractable Illness, 29(1), 45-55, 2006.

國方弘子, 中嶋和夫：統合失調症患者の社会生活技能と自尊感情の因果関係, The Causal Relationships between Social Skills and Self-Esteem in Schizophrenic Patients Living in the Community, 29(1), 67-71, 2006.

母性・周産期看護

内輪進一, 高野由美, 神戸稔代, 辻口恵美子：月経前の健康管理に関する実験的研究－第２報　月経随伴症状と潜在性浮腫との関係並びにその改善について－, 1(2), 44-53, 1978.

菅原久美子：分娩第一期における産婦の看護に関する考察－補助動作の指導について－, 1(2), 54-58, 1978.

秋山昭代, 茅島江子：MDT（Mirror Drawing Test）からみた性周期の心身に及ぼす影響について, Studies on the Influence of the Menstrual Cycle upon the Physical and Mental Conditions by Means of MDT（Mirror Drawing Test）Method., 2(2), 61-66, 1979.

田中洋子, 草刈淳子, 伊藤淑子：就労と母性－卒業生の就労状況からみた看護職と母性－, Problems of Working Mothers － from the perspective aspect of a nursing career－, 3(3), 20-28, 1980.
江戸由子, 土屋尚義：心疾患を有する妊婦の生活管理の指標について, Indicatory Signs on Nursing Care for Pregnant Woman with Cardiac Disease, 6(3), 20-28, 1983.
前田ひとみ, 石丸美紀子, 友松淳子, 成田栄子：妊婦の喫煙に関する研究－低体重児出生について－, A Study of Smoking in Pregnancy － About The Birth of The Low Birth Weight Infant－, 8(3,4), 7-13, 1985.
佐藤香代, 阪口禎男：妊娠各期の不安が分娩・児に及ぼす影響について, The Influences on the Process of Delivery and the Development of the New Born Babies by the Anxiety During the Pregnancy, 9(4), 72-77, 1986.
泊　祐子, 堀　智晴, 曽和信一, 早川　淳, 又賀　淳：農村における産育についての研究(1)－自宅分娩時代の産婆の役割－, A Study on San-iku（Nourishing）in Rural Community.(1)－ Midwives' Role in the Period of Childbirth at Home.－, 10(2), 9-18, 1987.
前田ひとみ, 成田栄子：妊婦の喫煙に関する研究（Ⅲ), A STUDY OF SMOKING IN PREGNANCY（Ⅲ), 10(4), 45-52, 1987.
竹ノ上ケイ子, 内海　滉：看護学生の母性性の発達に関する研究(1), Studies on Development of the Maternity-Consciousness of the Nursing College Students(1), 13(4), 35-46, 1990.
竹ノ上ケイ子, 内海　滉：看護学生の母性性の発達に関する研究(2), Studies on Development of the Maternal - Consciousness of the Nursing College Students(2), 15(3), 9-19, 1992.
江守陽子, 石井トク, 前原澄子：分娩時の呼吸法に関する基礎的研究－非妊婦における胸式呼吸法と腹式呼吸法の比較－, A Basic Study on the Breathing Methods during of Delivery － To Compare the Thoracic Breathing with the Abdominal Breathing in Non-Pregnant Women－, 15(4), 9-16, 1992.
桂　敏樹, 野尻雅美, 中野正孝：更年期女性のストレス管理に関する研究－精神的健康を阻害する生活出来事－, A Study on Stress Management of Menopausal Females － Life Events Deteriorating Mental Health－, 17(3), 23-29, 1994.
鮫島雅子：父親と母親における子どもの誕生に伴う「親性」の心理的変容(1)－「親性」尺度の作成と因子構造の検討－, Psychological Changes of Fathers and Mothers during Pregnancy(1)－ Measurement of the Concept of "Parenthood"－, 22(5), 23-35, 1999.
岡山久代：妊婦の胎児への愛着に対する実母ならびに夫との関係の影響－パス解析による因果モデルの検討－, Influence of Mother-Daughter and Husband-Wife Relationships during the pregnancy on Maternal-Fetal Attachment － A path analysis on the causal model of the Maternal-Fetal Attachment Model－, 25(5), 15-25, 2002.

家族看護

新免いづみ, 河野千文, 野島良子：個人の健康障害がその家族にあたえる影響について：文献総覧, A REVIEW OF THE LITERATURES ON INFLUENCE OF A PERSON'S HEALTH DISTURBANCES ON ONE'S FAMILY, 10(3), 42-49, 1987.
木村紀美, 斉藤陽子, 米内山千賀子, 花田久美子, 福島松郎：開腹手術を受ける患者家族の STAI の推移, THE SCORES OF STAI IN THE FAMILIES OF A PATIENT WHO RECEIVED LAPAROTOMY, 10(4), 53-59, 1987.
森　文子, 久米和興：痴呆患者介護者の介護負担と外来看護に求められる機能, The Burden of Caregiver of Patient with Dementia and the Necessary Role of Outpatient Nursing, 22(1), 27-37, 1999.
丸橋佐和子：特定機能病院退院後中高年齢患者の主介護者の心身の健康状態と影響要因, Physical and Mental Health Problems and Related Factors of Main Care-Givers of Middle-Aged and Elderly Patients who have been Discharged from a

Specialized Care Facility, 23(4), 31-42, 2000.
山田紀代美, 佐藤和佳子, 鈴木みずえ, 野村千文：介護を終了した介護者の死別期間と疲労感の変化に関する研究, The Relationship between the Number of Years That have Passed Since the Death of an Elderly and the Fatigue of their Bereaved Caregiver, 24(4), 21-31, 2001.
廣瀬春次：在宅の認知症患者を介護する家族の予期悲嘆, Anticipatory Grief of Family Caregivers of Dementia Patients Living at Home , 29(1), 57-65, 2006.

小児看護

麻生佳澄, 五反田容子：慢性疾患をもつ学童の生活への適応状態に関する研究, 1(2), 28-39, 1978.
山川由美子：沐浴による乳児のVital Signsの変化, 1(2), 40-43, 1978.
宮腰由紀子, 阪口禎男：眼球摘出術後の母児への外来での援助, WORKING AT THE CLINIC WITH THE MOTHER AND HER CHILD IN THE POST-OPERATION OF THE ENUCLEATION BULBI, 3(3), 49-55, 1980.
成田栄子, 水上明子, 中島良子, 小林秀子, 松野こずえ：乳児夜泣きの要因分析(1), A Factor Analysis of Infant' Crying At Night (I), 4(2), 33-41, 1981.
成田栄子, 水上明子, 栄　唱子：乳児夜泣きの要因分析（Ⅱ), A Factor Analysis of Infants' Crying At Night（Ⅱ), 5(2), 26-31, 1982.
足立陽子, 浅井美千代, 宮腰由紀子, 矢野真智, 山口桂子, 岩本仁子, 阪口禎男：新生児の体温変動－巨大児と標準体重児の比較を中心に－, Changes of Body Temperature in the Newborn Baby, 8(3,4), 19-25, 1985.
川口みゆき, 浅井美千代, 山口桂子, 阪口禎男：入院が小児に及ぼす影響－社会生活能力面からの一考察－, Research to the Influence on the Infants Inpatients by the Measurement of the Adaptabilities in Social Life, 8(3,4), 33-41, 1985.
瀬尾クニ子, 中安紀美子：多変量解析による頻回骨折経験児の食物摂取構造の検討, Multivariate Analysis of Food Intakes of the Children Suffered Frequent Fractures, 9(3), 7-15, 1986.
岩本仁子, 阪口禎男：コットのwarming-upに関する基礎的研究－新生児収容前の保温－, Basic Research on the Thermal Effect of Warmer on a Cot － for Protect-Naked Newborn Infants' Temperature Loss－, 13(2), 7-14, 1990.
佐藤香代, 鮫島雅子：幼児の性教育の現状と今後の展望, The Present Condition and Future View of the Sexuality Education for Infants, 17(1), 49-60, 1994.
江守陽子, 青木和夫：保育行動としての刺激と児の反応との関係－抱いて揺する刺激についての分析－, The Relations between the Stimulation as Maternal Care for Infants and their Reactions － Analysis of the Stimulation to Hold and Swing the Infants－, 21(2), 19-27, 1998.
大脇万起子：Nursing Interventionとしての神経性症状を示す子どもへの看護的遊戯療法English Approachについて, Effect of“English Approach”as a Psychotherapeutic Nursing Interevention, 22(2), 25-34, 1999.
佐藤幸子：子どもの表情による情動表現の発達的変化に関する検討, Developmental Changes in Emotional Expression in Children , 29(2), 27-32, 2006.

急性期看護・クリティカルケア

益子秀子, 田中久美子, 花坂礼子, 山口桂子, 宮崎和子：術前オリエンテーションの評価－術前トレーニングを中心として－, EFFECTIVENESS OF PREOPERATIVE TEACHING, 3(3), 29-39, 1980.
宮腰由紀子, 松岡淳夫：上顎癌術後の疼痛を訴える患者への看護活動について, THE APPROACH OF THE PAIN AND

PERSONALITY OF MAXILLAR CANCER PATIENT, 4(3), 27-35, 1981.
金田浩子, 木村紀美, 米内山千賀子, 川上　澄：術前患者の不安の緩和－手術体験者との会話を通して－, Easing of Anxiety in Preoperative Patients － By Using Interview with Postoperative Patients－, 7(1, 2), 70-74, 1984.
網屋タエ子, 土屋尚義, 金井和子, 吉田伸子：脳動脈瘤破裂の要因分析による患者管理の検討, Analysis of the blood pressure of the patients with ruptured cerebral aneurysm in nursing, 7(3), 10-16, 1984.
木村紀美, 中川克子, 沼田みゆき, 花田久美子, 米内山千賀子, 福島松郎, 川上　澄：術前不安に対する筋弛緩訓練の効果, Effect of Muscle Relaxation Training for Preoperative Anxiety, 12(2), 7-13, 1989.
明石恵子, 草刈淳子：肝硬変合併肝癌肝切除後の看護情報－呼吸ケアに関する看護基本情報の収集状況に関する考察－, Nursing Information of the Post-Operative Patients of Hepatoma with Liver Cirrhosis － From the Aspect of Data Collection to Provide Nursing Intervention for the Care on Respiration－, 14(2), 27-36, 1991.
白尾久美子：看護実践からみた術前看護の明確化, Clarification of Elements of Pre-Operative Nursing through a Survey on Nursing Practice, 23(2), 43-54, 2000.

慢性期看護・リハビリテーション看護

坂巻妙子, 土屋尚義, 村越康一：在宅人工腎臓透析患者の食事について, 1(2), 3-13, 1978.
山口桂子, 田代順子, 小池とし子, 倉持トモ：糖尿病の教育入院を考える, About the Instructive Hospital Stay of Patients with Diabetes mellitus, 3(2), 55-62, 1980.
五十嵐千賀子, 木村紀美, 今　充：人工肛門造設患者の看護の問題点, STUDY ON OSTOMY NURSING CARE, 4(3), 5-13, 1981.
児島和枝, 土屋尚義：慢性肝炎治療食の問題点に関する検討, Nutritional Problems in Chronic Liver Disease, 6(2), 52-67, 1983.
多田敏子, 福武千登勢, 斉藤和江, 管　恵子, 山本容子：慢性疾患患者の自己健康管理に関連する要因について, Factors Relating to the Self-Care of the Patients with Chronic Diseases, 7(4), 31-39, 1984.
木村紀美, 櫛引みゆき, 米内山千賀子, 花田久美子, 福島松郎, 今　充：人工肛門保有者の背景とその受容－心理テストとの関係－, Emotional State in Ostomates and the Time of Starting Self Stoma Care, 10(2), 19-30, 1987.
遠藤千恵子：高齢者の大腿骨頚部骨折手術　退院後の歩行機能の変動と影響要因, POSTREPAIR AMBULATION LEVEL AND FACTORS EFFECTING AMBULATION OF THE ELDERLY WITH FEMORAL NECK FRACTURE, 10(3), 7-15, 1987.
原谷珠美, 山本良子：人工透析患者の自己管理行動の分析, Analysis of Self-Care Behavior in the Dialysis Patients, 11(3), 34-40, 1988.
棚原雅子, 木村紀美, 米内山千賀子, 花田久美子, 福島松郎, 今　充：人工肛門の受容とその因子, Acceptance of Stoma and the Related Factors, 11(4), 34-45, 1988.
木村紀美, 清川浩美, 米内山千賀子, 花田久美子, 福島松郎：喉頭全摘出術を受けた患者の心理状態, Psychological Condition Followed by Phonatory Dysfunction, 12(4), 9-14, 1989.
花田妙子：心筋梗塞患者の日常生活の自己管理行動に影響する要因の研究, The Factors Affecting the Self-Care Behavior of Patients with Myocardial Infarction in Daily Life, 14(2), 15-26, 1991.
木原信市, 岩坪聖子, 大塚裕一：重症筋無力症患者の日常生活における問題点, A Study on Problems of Daily Life in Patients with Myasthenia Gravis, 14(3), 7-16, 1991.
泉キヨ子, 平松知子, 土屋尚義, 金井和子, 金川克子：人工股関節置換患者の回復過程および生活の満足度に関する研究,

The Study on Recovery Process of Daily Living in Patients and Quality of Life with Total Hip Arthroplasty, 17(2), 9-19, 1994.
花田妙子：心筋梗塞患者の日常生活の自己管理行動とタイプA 総得点の関係, The Relation Between the Self-Care Behavior of Patients with Myocardial Infarction in Daily Life and Type A Score, 18(2), 17-27, 1995.
寺崎明美, 間瀬由記, 小原　泉：老年期喉頭摘出者の代用音声獲得を困難にしている要因, Factor that Complicate Substitute Voice Acquisition in Older Laryngectomee, 20(5), 11-20, 1997.
竹内博明, 三野満子, 國方弘子, 藤本さとし, 伊東久恵：パーキンソン病患者の主観的QOL評価, Evaluation of the Subjective Quality of Life in Patients with Parkinson's Disease, 22(4), 17-26, 1999.
磯谷文衣, 工藤せい子, 山辺英彰, 斉藤洋子, 鳴海肇子：糖尿病性腎症患者の受診態度と性格特性の関係について, Relationship between Compliance to the Treatment and Personality in Patients with Diabetes Mellitus, 23(1), 73-82, 2000.
黒田裕子, 船山美和子：在宅移行期にある虚血性心疾患男性患者の生活管理意識の実態と関連要因の探索, Finding Out an Awareness of Life Management and the Related Factors among Men with Ischemic Heart Disease at the Returning Home Period., 23(5), 13-23, 2000.
野々山未希子：抗HIV薬の服薬アドヒアランスに関する研究, Adherence of Antiretroviral Combination Therapy, 23(5), 69-80, 2000.
大野道絵, 阪本恵子, 白石　聡：成人型アトピー性皮膚炎を持つ対象者の行動の決定に影響を与える因子に関する研究, Qualitative Study on the Factors that Affect Behaviours of the Participants with Atopic Dermatitis in Adult, 24(2), 29-39, 2001.
湯沢八江：在宅中心静脈栄養療法患者のセルフケアにおける清潔管理の評価, Evaluation of Selfcare by HPN Patients Regarding Sanitary Procedures, 24(2), 41-50, 2001.
吉村弥須子, 白田久美子, 前田勇子, 安森由美, 東ますみ：骨粗鬆症患者のQOL －症状と心理的側面との関連－, QOL of the Patients with Osteoporosis － Relationship between Symptoms and Psychological Aspects－, 24(5), 23-32, 2001.
大野道絵, 阪本恵子, 白石聡：成人型アトピー性皮膚炎を持つ対象者の行動に関する研究－さがしもとめる－, A Qualitative Study of the Behaviours of the Participants with Atopic Dermatitis in Adult － Looking for－, 25(1), 35-43, 2002.
石岡　薫, 工藤せい子, 冨澤登志子, 山辺英彰, 高梨信吾：気管支喘息患者の QOL についての検討, Study on quality of life in patients with bronchial asthma, 25(1), 77-85, 2002.
豊島由樹子：脳血管疾患患者・家族の初回外泊における体験内容, The Perceptions of the Experiences by Stroke Patients and their Family Caregivers through the First Overnight-stay at Home, 25(2), 71-85, 2002.
森本美智子, 中嶋和夫, 高井研一：慢性閉塞性肺疾患患者の機能障害ならびにストレス認知と精神的健康との関係, The relationships among impairment, stress cognition and mental health of patients with Chronic Obstructive Pulmonary Disease, 25(4), 17-31, 2002.
三村洋美：高齢CAPD患者のセルフケアの意味：構成要素の探索, The Meaning of Self-care in Elderly CAPD Patients：Searching Components, 26(1), 67-78, 2003.
金正貴美：筋萎縮性側索硬化症患者の病気体験における不確かさ, Amyotrophic Lateral Sclerosis Patient Uncertainty, 26(1), 79-90, 2003.
佐藤政枝, 川口孝泰, 嶋田寿子, 谷　和子, 中山昌美：人工股関節全置換術を受けた患者の環境移行に関する研究, Study on Environmental Transition of Patients who Underwent total hip Arthroplasty, 28(2), 41-50, 2005.
新谷善恵, 稲垣美智子：看護師が慢性疾患患者への実践ケアを学ぶ構造, Learning Structure of Practical Nursing Care for Chronically Ill Patients, 28(5), 37-46, 2005.
山口真澄, 鎌倉やよい, 深田順子, 米田雅彦, 山村義孝, 金田久江：幽門側胃切除術後患者における退院後の食事摂取量の自律的調整に関する研究, Self-control of Food Intake Volume in Postoperative Distal Gastrectomy Patients after Discharge, 29(2), 19-26, 2006.

川上千普美, 松岡　緑, 樗木晶子, 長家智子, 赤司千波, 篠原純子, 原　頼子：冠動脈インターベンションを受けた虚血性心疾患患者の自己管理行動に影響する要因－家族関係および心理的側面に焦点を当てて－, Analysis of Factors Influencing Self-Management Behavior of the Patients with Ischemic Heart Diseases after Coronary Interventions － Focused on Family Relationship and Psychological Aspect－, 29(4), 33-40, 2006.

緩和ケア・ホスピスケア・がん看護

東サトエ：急性骨髄性白血病患者の看護をとおしての一考察, A Consideration about the Nursing of Patient of Acute Myelocytic Leukemia, 3(3), 56-64, 1980.

柏原貴子, 鈴木恭子, 植田和美, 瀬尾クニ子, 野島良子：死と臨死患者の看護に対する看護婦の態度に関する研究, Attitudes of Nurses Toward Death and Caring of Dying Patients, 4(2), 25-32, 1981.

田中保代, 松岡淳夫：老人の末期における問題点－安楽な死をみつめて－, Some problems of aged patients in the last stage － To develop the peaceful death－, 4(3), 36-44, 1981.

野島良子：乳癌患者における心理的反応の推移, Psychological Reactions to Mastectomy And The Patterns of Their Transition, 5(2), 32-40, 1982.

東　玲子, 石井智香子, 札場篤子, 石川多賀子：白血病患者の頭蓋内出血に至る看護アセスメントの指標, Check Points on Nursing Assessment for the Early Stage of Intracranial Bleeding of Patients with Leukemia, 13(3), 20-29, 1990.

花田久美子, 田中克枝, 吉川由希子, 木村紀美, 米内山千賀子, 福島松郎：乳癌患者術後の上肢運動機能障害, Arm Dysfunction after Mastectomy, 14(1), 55-66, 1991.

木原信市, 松岡聖子, 谷口まり子, 山本治美：乳房切除術患者の意識　I. 乳癌患者に影響を及ぼす言動, A study of attitude in Patients with mastectomy for cancer 1. Words and actions influenced on patients, 15(1), 73-83, 1992.

松木光子, 三木房枝, 越村利恵, 鹿島泰子, 大谷英子：乳癌手術患者の心理的適応に関する縦断的研究(1)－術前から術後３年にわたる心理反応－, Longitudinal Studies of Psychological Adjustment for Mastectomy Patients(1) － Psychological Reactions from Pre-Surgery to 3 Years Post-Surgery－, 15(3), 20-28, 1992.

松木光子, 三木房枝, 越村利恵, 鹿島泰子, 大谷英子：乳癌手術患者の心理的適応に関する縦断的研究(2)－ソーシャルサポートネットワークを中心に－, Longitudinal Studies of Psychological Adjustment for Mastectomy Patients(2) － Psychological Reactions and Social Support Network－, 15(3), 29-38, 1992.

松岡聖子, 木原信市, 前田ひとみ, 成田栄子：乳癌検診並びに自己検査法講習会受診者の背景と保健行動の特徴 (I), The Character of Circumstances and Health Behavior in Women Who Underwent Mass Screening and Self Examination for Breast Cancer, 16(2), 5-12, 1993.

井上貴美子, 岡崎美晴, 後田礼子, 藤井奈都子, 濱田準子, 山本春美, 平田雅子：抗癌剤投与時の脱毛予防に対する試み－４％食塩水と消毒用エタノールを使用したアイスキャップの冷却効果と脱毛予防効果－, A Study on the Prevention of Chemotherapy-Induced Alopecia － The Effects of Ice Cap Consisted of 4% Salt Solution and Ethyl Alcohol on Scalp Cooling and Preventing Hair Loss－, 19(1), 69-82, 1996.

尾沼奈緒美, 鎌倉やよい, 長谷川美鶴, 金田久江：手術を受ける乳癌患者の治療に関する意思決定の構造, The structure of decision-making with regard to surgical treatment in breast cancer patients, 27(2), 45-57, 2004.

宮内　環：子どものターミナルケアにおける看護師の認識のプロセス, The Process of Nurse's Perceptions in Terminal Care for Dying Children, 27(4), 25-33, 2004.

平松知子, 泉キヨ子：C型肝炎由来のがん患者が辿る肝炎診断から現在までの心理と療養行動, Psychology and Care Behavior from the Hepatitis Diagnosis to the Present Time : Narratives of the Cancer Patients with Hepatitis C, 28(2), 31-40,

2005.
大釜徳政：器質性構音・音声機能低下を抱える舌がん患者における会話変容プロセスと社会環境との関連性, Association between the Speech Modification Process and Social Environment in Patients with Tongue Cancer with Impaired Organic Articulation/Vocalization Function, 29(2), 43-54, 2006.

高齢者看護

長岡多恵子, 田丸志づえ, 渡辺行栄, 山口佳津美, 串田登志江, 松岡淳夫：地域における寝たきり老人看護について, Nursing of the Sink Aged in a Region, 2(2), 67-81, 1979.
早川和生：ハワイに於ける日系独居老人の社会適応に関する比較文化的研究－特に人生満足度を中心にして－, Life Satisfaction Levels Among The Elderly Living Alone : A Culturological Study in Hawaii and Osaka, 4(2), 17-24, 1981.
西森智子, 河野　幸, 安丸弥生, 瀬尾クニ子, 池川清子：寝たきり老人の食事意識－特別養護老人ホームにおける調査を通して－, Attitudes of the Elderlies toward Meals at Nursing Homes for the Handicapped Elderlies, 5(2), 41-49, 1982.
井上弘子, 土屋尚義, 金井和子, 吉田伸子, 中島紀恵子：「呆け老人」に関する文献的考察, Consideration of literatures about the aged what is called "Boke" in Japan, 6(3), 63-72, 1983.
大津ミキ, 中尾久子, 土屋尚義, 金井和子, 古川美紀子, 豊沢英子：老人のそうよう感に関する調査－その１　そうよう感の実態と要因－, Factors Causing Itching in the Old － Part Ⅰ The Actual Condition－, 7(3), 36-43, 1984.
豊沢英子, 古川美紀子, 大津ミキ, 中尾久子, 土屋尚義, 金井和子：老人のそうよう感に関する調査－その２　情動とそうよう感－, Factors Causing Itching in the Old － Part Ⅱ Emotional Factors－, 7(3), 44-50, 1984.
多田敏子：高齢者の自己健康管理に関する調査, Investigation Into The Self-Care of The Aged, 8(3,4), 26-32, 1985.
大串靖子：高齢者の食事への援助－施設居住老人心身の状態と栄養摂取量との実態調査から－, A Study on Dietetic Support of the Aget － An Investigation of Nutritional Quantity and General Condition in the Handicapped Aged Lived in Nursing Home－, 11(3), 57-65, 1988.
原谷珠美, 本間裕子, 山本良子：痴呆性老人に対する感覚刺激の効果の検討, The Study of Sensory Stimuli for the Hospitalized Dementia Geriatric, 14(3), 27-32, 1991.
金井和子, 土屋尚義, 赤須知明：心理テストの高齢者用簡易化に関する検討－ STAI を中心に－, A Study on Simplification of a Psychological Test for the Aged － Especially on State Trait Anxiety Inventory（STAI）－, 18(3), 31-37, 1995.
江藤真紀, 久保田新：在宅健常高齢者の転倒に影響する身体的要因と心理的要因, Physical and Phychological Factors of Accidental Falls in the Elderly, 23(4), 43-58, 2000.
深田順子, 鎌倉やよい, 北池　正, 野尻雅美：在宅高齢者のための嚥下障害リスク評価に関する尺度開発, Development of Dysphagia Risk Assessment Scale for Elderly Living at Home, 25(1), 87-99, 2002.
平真紀子, 泉キヨ子, 河村一海, 加藤真由美, 丸山巳奈：入院高齢者の転倒経験とその後の予防のとらえ方, Point of View on Falls and Their Prevention for Institutionalized Elderly Persons with a History of Falls, 25(2), 17-28, 2002.
江藤真紀, 久保田新：地域高齢者の生活環境・習慣と転倒特性およびその後の変化, Characteristics of Accidental Falls in the Elderly and Their Daily-Life Environment and Habits, 25(4), 33-51, 2002.
松本啓子, 渡辺文子：後期高齢者のSuccessful Agingの意味－郡部に居住する高齢者の聞きとり調査から－, The Meaning of Successful Aging in Elderly, 27(5), 25-30, 2004.
沖中由美：身体障害をもちながら老いを生きる高齢者の自己ラベリング, The Self-Labeling of the Elderly Disabled People, 29(4), 23-31, 2006.

地域看護・在宅看護

加賀淑子, 田丸志づえ, 渡辺行栄, 山口恵美子, 松岡淳夫：成人病検診における高血圧管理－特に境界域血圧について－, Health evaluation and guidance program to the protection of hypertension of about people － especially about the “borderline” type－, 3(2), 38-54, 1980.

塩見敦子, 村橋裕子, 井本由美, 田中克子, 内輪進一：女子大学生における貧血と全血比重及び食生活との関連, THE RELATIONSHIP AMONG ANEMIA, SPECIFIC GRAVITY OF WHOLE BLOOD CELLS AND DIET LIFE OF FEMALE COLLEGE STUDENTS, 4(3), 45-51, 1981.

春木　瞳, 北村圭子, 多田敏子：訪問看護に関する一考察－在宅寝たきり老人の介護者の訪問看護に対する意識を通して－, A Consideration on Visiting Care Based on the Sense of the Helpers of the Bedridden Aged at their own Homes, 6(2), 27-37, 1983.

倉持亨子：思春期の心身発達における教育的環境条件の及ぼす影響について, A Study on the Influence of the Mind on the Body of Adolescent pupils under Educational Circumstances, 6(3), 42-50, 1983.

片岡恵津子, 松岡淳夫：寝たきり老人化予防の看護－特に脳卒中後の家庭看護について－, Nursing care of Prevention to fall into Bedridden Aged － Family Care for Aged Patient after Apoplexy－, 7(1, 2), 105-116, 1984.

早川和生：中高年令に達した双生児630組を用いた加齢現象と疾病の研究－血圧及び血清脂質における遺伝と環境要因－, Gemellological Research With 630 Twin Pairs on Aging Phenomenon and Adult Diseases : Genetic and Environmental Factors Affecting Blood Pressure and Plasma Lipids, 7(4), 23-30, 1984.

柳沢ゆかり, 土屋尚義, 金井和子：高校生活における適応に関する研究, A STUDY ON ADJUSTMENT OF SENIOR HIGH SCHOOL STUDENTS, 9(1, 2), 71-81, 1986.

多田敏子, 熊坂延枝, 中野秀子, 原　祥子：病弱老人のデイ・サービス利用の実態とその意義, Study on the Care for the Functionally Dependent Elderly Attending on the Day-Service, 9(4), 37-46, 1986.

横葉ヒトミ, 草刈淳子：保健医療専門職における女性の就業状況に関する一考察－医師・歯科医師および薬剤師調査の分析から－, A Study on Women's Working Condition among Health and Medical Professions －An Analysis of the Survey on Physician－, Dentist and Pharmasist, 9(4), 47-54, 1986.

前田ひとみ, 佐々木光雄, 原野裕子, 林田千賀子：喫煙と健康意識に関する研究(Ⅱ)－熊本大学教育学部学生について－, Relationship between Smoking and Health Consciousness(Ⅱ)－Datum from the Students of Faculty of Education, Kumamoto University－, 11(4), 46-51, 1988.

高林ふみ代：女子短大生のセルフメディケーションと薬イメージ及び健康感との関係, Relationship Between Health Status and the Image of Drug and Self-Medication of Female Students of Junior College, 12(1), 63-73, 1989.

前田ひとみ, 岡本淳子, 寺本淳子, 山下清香, 山本悌子, 成田栄子：育児指導の効果に関する研究, A Study on the Effect of Child Rearing Education, 12(2), 14-20, 1989.

阪口禎男, 吉川千鶴子：三交替制勤務をする看護婦の食生活について, The Acutual Condition of Food Lives for Nurses to Be Working in Three Shifts, 12(4), 15-21, 1989.

前田ひとみ, 松岡聖子, 成田栄子：母親の喫煙が子供に及ぼす影響, Effects of Mothers' Smoking on their Children, 14(4), 11-17, 1991.

横山美江：在宅要介護老人の介護者における蓄積的疲労微候と介護環境要因, Cumulative Fatigue Symptoms of Caregivers of the Cared Elderly Living at Home and the Influence of Caring Environmental Factors, 16(3), 23-31, 1993.

桂　敏樹, 野尻雅美, 中野正孝：中高年の主観的幸福感と価値観の充足との関連に関する研究, A Study on Correlation Between Subjective Well-being and Sufficiency of Life Values in Middle and Advanced Age, 17(3), 31-36, 1994.

桂　敏樹, 野尻雅美, 中野正孝：地域住民の心の健康づくりにおけるライフスタイル改善指導の意義に関する研究, A Basic Study on Significance of Lifestyle Intervention of Mental Health Promotion in a Rural District, 19(2), 7-15, 1996.

桂　敏樹, 野尻雅美, 中野正孝：地域住民のストレスに関連する要因－評価基準としての価値の影響－, A Study on Factors Related to Stress of Residents － Effects of Values as an Appraisal Standard－, 19(2), 35-41, 1996.

桂　敏樹, 野尻雅美, 中野正孝：中高年期における発達的危機および状況的危機が主観的幸福感に及ぼす影響, Effect of Developmental Crisis and Situational Crisis on Subjective Well-being in Middle Aged and Elderly, 19(4), 9-18, 1996.

横山美江：在宅要介護老人の介護者における蓄積的疲労度と上気道感染易罹患性、および、受療状況について, Health Problems and Use of Medical Facilities in Caregivers of Cared Elderly Living at Home, 20(1), 49-56, 1997.

深井喜代子, 山口三重子, 谷原政江, 近藤宏美：日本語版便秘評価尺度による小学生の便秘評価, Constipation Assessment of Schoolchildren by the Japanese Version of Constipation Assessment Scale, 20(1), 57-63, 1997.

山本恭子, 鵜山　治, 松野郁子：大学生における血清脂質と運動の関係, A Study on Relation between Serum Lipids and Daily Physical Activity of College Students, 20(4), 9-16, 1997.

今本喜久子, 大徳真珠子, 新穂千賀子：摘出踵骨の骨密度における運動習慣の影響, The Effects of Regular Exercise on the Bone Mineral Density of the Calcaneus in vitro, 23(1), 63-72, 2000.

横山美江：障害のある多胎児を育てる母親の精神的負担と支援の現状, Emotional Distress among the Mothers of Handicapped Multiple Birth Children and Community Health Services, 23(2), 9-18, 2000.

古瀬みどり, 熊野宏昭：訪問看護ステーション利用者の訪問看護およびホームヘルプサービス利用要因と主介護者の健康関連QOL, Factors Related to the Utilization of Visiting Nurse and Home-help by Cared People Using Visiting Nurse Servise and the Health Related QOL of their Primary Caregiver, 23(5), 33-42, 2000.

清水嘉子, 西田公昭：育児ストレス構造の研究, A Study on the structure of ChildCare stress, 23(5), 55-67, 2000.

一色康子, 山田一朗：大阪府T市中部地区における公的施設利用者の健康度自己評価と、その関連要因, A Survey of the Residents' Subjective Health Status and its Relating Factors in T. city, Osaka Prefecture, 24(2), 19-27, 2001.

喜多淳子：思春期男女の対児感情への影響要因の検討－養護性の指標として－, Factors Influencing Feeling to Infants Reflecting Nurturance of Children in the Puberty, 24(4), 33-44, 2001.

三国久美, 深山智代, 広瀬たい子, 工藤禎子, 桑原ゆみ, 篠木絵理, 草薙美穂：１歳６か月児を持つ両親の育児ストレスとコーピングスタイル, Parenting Stress and Coping Experienced by Parents of 18-month Old Children, 26(4), 31-43, 2003.

三毛美恵子, 山川正信, 須藤聖子：女子学生における骨粗鬆症予防のための知識や運動と骨密度の関係, Relation between Bone Mineral Density and Exercise and Prevention Knowledge of Osteoporosis among Female Students, 28(1), 53-62, 2005.

西田友子, 藤井千恵, 榊原久孝：メタボリックシンドロームと青年期からの体重増加および生活習慣との関連, Relationship of Metabolic Syndrome to Weight Gain from the Youth and Lifestyle, 28(4), 11-17, 2005.

感染看護

滝　幸代, 荻原悦子, 三沖絹子, 松岡淳夫：現行消毒法の再検討－超音波洗浄装置について－, Study on the Disinfection － About Using Supersonic-Washer－, 2(2), 44-54, 1979.

藤本洋子, 藤井愛子, 竹内洋子, 内輪進一：新生児沐浴槽の細菌汚染とその消毒について, Studies on Bacterial Contamination and Disinfection of Bath-Tubs in the Neonatal Room, 3(2), 5-21, 1980.

阿部テル子, 熊谷裕子, 五十嵐千賀子, 西村尚子, 木村紀美, 今　充：鑷子の無菌性に関する検討, Study on the Aseptic State of Forceps, 3(2), 33-37, 1980.

明石　泉, 鈴木光子, 木村宏子, 川上　澄：保育器の清潔に関する研究　その１, STUDIES ON THE CLEANSING OF

INCUBATOR, 4(3), 14-20, 1981.
中村留里子, 津島　律, 今　充：カテーテル留置患者の細菌学的検討からみた看護の問題点, NURSING MANAGEMENT OF INFECTION IN CATHETERIZED PATIENT, 4(3), 21-26, 1981.
三沢ふみよ, 木村紀美, 米内山千賀子, 藤丸留里子, 福島松郎：気道吸引用カテーテルの消毒液の効果と交換時期について, A Study on the Prevention of Bacterial Infection on Suction Tube and Disinfectional Solution for the Patients with Tracheostomy, 7(1, 2), 75-80, 1984.
大町尚美, 野波公重, 堀江由美, 内輪進一：ソフトコンタクトレンズの洗浄に関する実験的研究, Experimental Studies on Cleaning Procedures for Soft Contact Lenses, 7(1, 2), 96-104, 1984.
笠松美喜子, 松岡淳夫：病院の床保清に関する一考察, A Study of Floor-Cleaning in Hospital, 7(3), 17-26, 1984.
天津栄子, 金川克子, 泉キヨ子, 川島和代：白血病患者の口腔感染と口腔ケアに関する研究, Study on Oral Infection and Oral Care in Patients with Leukemia, 7(4), 56-67, 1984.
山本公子, 米内山千賀子, 木村紀美, 近藤久美子, 野戸結花, 福島松郎：膀胱内細菌汚染に対する洗浄の効果, Effect of bladder irrigation for urinary infection in the patients with urethral retention catheter, 8(1, 2), 89-94, 1985.
塚原佳子, 松岡淳夫：ガーゼマスクの菌捕捉効果に関する基礎的研究, Study for Intercepting to Microorganism on Gauze made Mask, 9(1, 2), 91-95, 1986.
網屋タエ子, 赤松名和子, 高田美穂, 堀口由美子, 下野治子, 土屋尚義：ヨード製剤による頭皮消毒の評価, Evaluation of Scalp Disinfection Method by Iodine Antiseptic Solution, 9(3), 16-22, 1986.
加藤美智子, 宮本優喜子, 松岡淳夫：手洗い消毒液交換の時期－ベースン内0.02%ヒビテン液について－, The Reasonable Time of Exchange The Disinfectant Solution in A Basin on 0.02% Hibitane（Chlorhexidin）Solution, 9(4), 64-71, 1986.
小笠原みどり, 松岡淳夫：ディスポーザブル注射針の開封方法と汚染について－めくり法とつき破り法の場合－, Opening Methods and Contamination on Disposable Needles － Using Peel-Open and Press-Open Methods－, 10(1), 98-102, 1987.
葛西敦子, 小井戸浩子, 鈴木光子, 木村宏子：保育器加湿槽水の細菌学的検討－シルビタの効用－, Bacteriological Investigation of Waters in the Humidifiers of Incubators － Effects of the Silvita－, 16(1), 52-59, 1993.
花田久美子, 小山田恵, 葛西敦子, 木村紀美, 米内山千賀子, 福島松郎：剃毛用ブラシの細菌学的検討, A Bacteriological Investigation of Shaving Brush of Skin Hair in Preoperative Nursing Preparations, 18(1), 63-72, 1995.
田中輝和, 西岡信子, 安田壽賀子：速乾性擦り込み式消毒剤の日和見感染菌に対する消毒効果の比較検討, Effect of Quick Drying Rubbing Type Disinfectant Solutions against Opportunistic Pathogens, 21(5), 9-13, 1998.
前田ひとみ, 木村真知子：血液製剤によるHIV感染者の看護, Nursing for the Persons with HIV infection by the Blood Transfusion, 22(2), 5-13, 1999.
塩原真弓, 佐伯由香, 井上都之：経管栄養施行例における経鼻胃管、接続管の細菌学的調査, Survey of Bacterial Flora in Nasogastric and Joint Tubes of Patients Receiving Nasogastric Tube Feeding, 25(2), 37-47, 2002.
白井文恵, 川口真紀子, 江部知子, 土肥義胤：末梢血好中球の活性酸素産生能からみた高齢者の易感染性の原因について, Investigation of the Reason for the Compromised State of Elderly Persons, Concerning to the Production of Reactive Oxygen Intermediates on Neutrophils, 25(4), 53-59, 2002.
前田ひとみ, 南家貴美代, 渡辺　恵：エイズ拠点病院におけるHIV/エイズ看護に関する調査研究, The Current Status and Recognition HIV/AIDS Nursing in Japan: From a Survey of Hospitals with HIV/AIDS Care Facilities, 28(4), 19-25, 2005.
池田七衣, 白井文恵, 土肥義胤：頭髪に付着した院内感染起因菌の生残にシャンプー洗髪が与える影響, Washing Hairs with Shampoo Remained Alive Bacteria on Them, That May be Prevented from Their Growth by Subsequent Drying, 29(5), 19-25, 2006.

その他

野島良子, 井上智子：乳房のもつイメージについての研究(1), 3(2), 22-32, 1980.

野島良子：乳房のもつイメージについての研究（Ⅱ), A Measurment of Image of Breast Among Japanese Females : in Relation to four Variables, 4(2), 9-16, 1981.

菅ひとみ, 桑名　貴：煙草の煙抽出液とニコチン水溶液がニワトリ胚の始原生殖細胞（primordial germ cells）の移住に及ぼす影響, Effects of Cigarette Smoke and Nicotine on the Migration of Primordial Germ Cells in the Chick Embryos, 6(3), 29-34, 1983.

菅ひとみ, 桑名　貴：タバコ主流煙溶液がin vitroでのニワトリ胚の腎・肺細胞の増殖に及ぼす影響, Effects of the Soluble Components of Cigarette Smoke on the Proliferation of Kidney and Lung Cells in vitro from the Chick Embryo, 7(4), 17-22, 1984.

岩本仁子, 須永　清：妊娠と肥満 第１報, Pregnancy and Obesity 1., 9(3), 23-31, 1986.

前田ひとみ, 桑名　貴：タバコ主流煙成分が in vitro での胚細胞増殖に及ぼす影響, Effect of the water-soluble components of cigarette smoke on the proliferation of cells from the embryo in vitro, 9(4), 55-63, 1986.

岩本仁子, 須永　清：妊娠と肥満 第２報, Pregnancy and Obesity 2, 10(3), 36-41, 1987.

橋本裕恵, 中村宣生：妊娠初期マウスのエタノール単回投与が胎仔におよぼす影響について, STUDIES ON THE FETAL EFFECTS OF SINGLE HIGH-DOSE-ETHANOL-ADMINISTRATION TO EARLY PREGNANT MICE, 10(4), 23-33, 1987.

岩本仁子, 阪口禎男：婦人科入院患者の不安について, Anxieties of Gynecological In-Patients, 12(2), 21-30, 1989.

田丸雅美, 須永　清：摂食時間帯変更によるマウスの肝グリコーゲン量及び膵消化酵素活性への影響, Effects of the Change of Feeding Time Period on Liver Glycogen Content and Pancreatic Enzyme Activities in Mice, 12(3), 32-38, 1989.

横山淳子, 須永　清：マウスの腹腔内脂肪重量、腓腹筋重量に対する運動後の絶食の影響について, Effect of Fasting after Exercise on Weight of Abdominal Fat. and M. gastrocnemius in Mice, 14(3), 17-26, 1991.

吉田伸子, 赤井ユキ子, 笹本喜美江, 渡辺世都子, 大野時子, 金井和子, 土屋尚義：看護行為の家族委託に関する看護者の意識構造, Study of the Structure Nurse's Consciousness to Transferring the Role of Nurse towards the Family, 16(1), 39-51, 1993.

堀口雅美, 須永　清：グルココルチコイド投与、寒冷刺激及び不定期摂食によるマウスの肝臓及び膵臓酵素活性への影響, Effects of Glucocorticoids, Cold Exposure and Irregular Feeding on Hepatic and Pancreatic Enzyme Activities in Mice, 16(3), 11-21, 1993.

川口孝泰, 阪口禎男, 田尻后子, 佐藤永子, 渡辺秀俊：入院患者のストレス要因に関する検討, Study on Factors of Inpatient Stress, 17(2), 21-29, 1994.

水田公子, 田中美智子, 木場冨喜, 須永　清, 石川稔生：明暗サイクル逆転が身体および妊娠に及ぼす影響, Effect of the Reversed Light-Dark Cycle on Pregnant Mice, 20(1), 65-71, 1997.

田中美智子, 長坂　猛, 有松　操, 椎野志保, 辻野久美子, 木場冨喜, 石川稔生, 須永　清：明暗サイクル逆転が母胎に及ぼす影響, Effects of Reversed Light-Dark Cycle on Pregnant Mice and their Fetuses, 23(1), 83-91, 2000.

田中美智子, 長坂　猛, 辻野久美子, 木場冨喜, 須永　清：鉄欠乏性貧血が脂質代謝に及ぼす影響, Effects of Iron Deficiency Anemia on Lipid Metabolism, 23(5), 25-32, 2000.

坂口けさみ, 楊箸隆哉, 北村キヨミ：乳仔接触刺激による雌及び雄ラットの親性行動の誘導と脳内プロラクチン受容体long-form mRNAの発現, Induction of Parental Behavior in the Pup-Contacted Female and Male Rats and Expression of Prolactin-Receptor Long-Form mRNA in the Brain, 24(5), 11-22, 2001.

七川正一, 森　將晏, 掛橋千賀子：マウスを用いた褥瘡初期病変の組織学的検討－圧力の差による傷害の深さと質的変化について－, Histological examination of experimental pressure sore in mice － Difference in injuries according to the degree of pressure－, 25(5), 27-34, 2002.

飯田智恵, 山本　昇：低温熱傷発症条件に関する実験的検討, Experimental Studies of the Conditions Leading to Moderate Temperature Burns, 27(1), 43-50, 2004.

岩永秀子, 高山　栄, 山本　昇：ゴム製湯たんぽの安全な使用法の検討－湯たんぽ表面温度とマウス皮膚組織への影響－, Examination of safer usage of rubber-made hot-water bottles － The surface temperature of the bottles and influence on a mouse skin－, 27(4), 53-59, 2004.

森本（川原）淳子, 坂本洋子：看護場面における認知的煩雑性がステレオタイプ的判断に及ぼす影響, Influence of Cognitive Business in Nursing Scenes on Stereotyped Judgments, 29(2), 33-41, 2006.

英文タイトルは原文のまま掲載しました.

学会誌と編集委員一覧

巻	号	印刷年月日	発行年月日		編集委員人数	編集委員長
1巻	1号	1978年3月10日	1978年3月20日	四大学看護学研究会雑誌発行		
	2号	1978年6月10日	1978年6月20日			
	臨時増刊号	1978年8月10日	1978年8月20日	第4回四大学看護学研究会総会 －プログラム及び内容要旨－		
2巻	1号	1979年3月10日	1979年3月20日	年ごと（1月～12月）の巻数	7名	
	2号	1979年7月20日	1979年8月10日			
	臨時増刊号	1979年8月10日	1979年8月20日	第5回四大学看護学研究会総会 －プログラム及び内容要旨－		
3巻	1号	1980年4月10日	1980年4月20日		7名	
	臨時増刊号	1980年7月25日	1980年8月10日	第6回四大学看護学研究会総会 －プログラム及び内容要旨－		
	2号	1980年12月10日	1980年12月25日		7名	
	3号	1981年3月10日	1981年3月20日			
4巻	1号	1981年6月10日	1981年6月20日	年度ごとの巻数		
	臨時増刊号	1981年8月10日	1981年8月20日	第7回四大学看護学研究会総会 －プログラム及び内容要旨－		
	2号	1981年10月10日	1981年10月20日	日本看護研究学会雑誌（タイトル変更）	7名	
	3号	1982年2月10日	1982年2月20日			
5巻	臨時増刊号	1982年3月20日	1982年4月1日	第8回日本看護研究学会総会 －プログラム及び内容要旨－		
	1号	1982年7月20日	1982年7月20日		6名	
	2号	1982年11月20日	1982年11月20日	評議員名簿掲載		
	3号	1983年2月20日	1983年3月20日	特輯　日本看護研究学会の歩み		
6巻	1号	1983年3月20日	1983年4月20日	第9回日本看護研究学会総会 －プログラム及び内容要旨－		
	2号	1983年6月20日	1983年7月20日		6名	
	3号	1983年11月10日	1983年11月20日			
7巻	1，2号	1984年5月10日	1984年5月20日		6名	
	臨時増刊号	1984年6月20日	1984年7月20日	第10回日本看護研究学会総会 －プログラム及び内容要旨－		
	3号	1984年9月10日	1984年9月20日		6名	
	4号	1985年3月10日	1985年3月20日			
8巻	臨時増刊号	1985年7月15日	1985年7月20日	第11回日本看護研究学会総会 －プログラム及び内容要旨－		
	1，2号	1985年10月10日	1985年10月20日		6名	前原　澄子
	3，4号	1986年3月10日	1986年3月20日		8名	草刈　淳子
9巻	臨時増刊号	1986年6月15日	1986年6月20日	第12回日本看護研究学会総会 －プログラム及び内容要旨－		
	1，2号	1986年7月20日	1986年8月20日		8名	草刈　淳子
	3号	1986年12月10日	1986年12月20日			草刈　淳子
	4号	1987年2月20日	1987年3月20日			草刈　淳子

副編集委員長	編集委員							発行責任者	巻
								松岡　淳夫（編集人）	1巻
	伊藤　暁子	川上　澄	木場　富貴	福井　高明	前原　澄子	松岡　淳夫	宮崎　和子	松岡　淳夫	2巻
	伊藤　暁子	川上　澄	木場　富貴	福井　高明	前原　澄子	松岡　淳夫	宮崎　和子		
								松岡　淳夫（編集人）	
	伊藤　暁子	川上　澄	木場　富貴	福井　高明	前原　澄子	松岡　淳夫	宮崎　和子	松岡　淳夫	3巻
								松岡　淳夫（編集人）	
	伊藤　暁子	川上　澄	木場　富貴	福井　高明	前原　澄子	松岡　淳夫	宮崎　和子	松岡　淳夫	
	伊藤　暁子	川上　澄	木場　富貴	福井　高明	前原　澄子	松岡　淳夫	宮崎　和子		
	伊藤　暁子	川上　澄	木場　富貴	福井　高明	前原　澄子	松岡　淳夫	宮崎　和子	松岡　淳夫	4巻
	伊藤　暁子	川上　澄	木場　富貴	福井　高明	前原　澄子	松岡　淳夫	宮崎　和子		
	伊藤　暁子	川上　澄	木場　富貴	福井　高明	前原　澄子	松岡　淳夫	宮崎　和子		
								松岡　淳夫（責任者）	5巻
	伊藤　暁子	川上　澄	木場　富喜	前原　澄子	松岡　淳夫	宮崎　和子		松岡　淳夫	
	伊藤　暁子	川上　澄	木場　富喜	前原　澄子	松岡　淳夫	宮崎　和子			
	伊藤　暁子	川上　澄	木場　富喜	前原　澄子	松岡　淳夫	宮崎　和子			
								松岡　淳夫	6巻
	伊藤　暁子	川上　澄	木場　富喜	前原　澄子	松岡　淳夫	宮崎　和子			
	伊藤　暁子	川上　澄	木場　富喜	前原　澄子	松岡　淳夫	宮崎　和子			
	伊藤　暁子	川上　澄	木場　富喜	前原　澄子	松岡　淳夫	宮崎　和子		松岡　淳夫	7巻
	伊藤　暁子	川上　澄	木場　富喜	前原　澄子	松岡　淳夫	宮崎　和子			
	伊藤　暁子	川上　澄	木場　富喜	前原　澄子	松岡　淳夫	宮崎　和子			
								松岡　淳夫	8巻
	伊藤　暁子	川上　澄	木場　富喜	松岡　淳夫	宮崎　和子				
	内輪　進一	川上　澄	木村　宏子	木場　冨喜	佐々木光雄	前原　澄子	宮崎　和子		
								松岡　淳夫	9巻
	内輪　進一	川上　澄	木村　宏子	木場　冨喜	佐々木光雄	前原　澄子	宮崎　和子		
	内輪　進一	川上　澄	木村　宏子	木場　冨喜	佐々木光雄	前原　澄子	宮崎　和子		
	内輪　進一	川上　澄	木村　宏子	木場　冨喜	佐々木光雄	前原　澄子	宮崎　和子		

巻	号	印刷年月日	発行年月日		編集委員人数	編集委員長
10巻	1号	1987年5月20日	1987年6月20日		8名	草刈　淳子
	2号	1987年8月20日	1987年9月20日			草刈　淳子
	臨時増刊号	1987年6月25日	1987年7月1日	第13回日本看護研究学会総会 －プログラム及び内容要旨－		
	3号	1987年11月20日	1987年12月20日		8名	草刈　淳子
	4号	1988年2月20日	1988年3月20日			草刈　淳子
11巻	1，2号	1988年5月20日	1988年6月20日	暦年発行への移行	8名	草刈　淳子
	臨時増刊号	1988年5月25日	1988年6月1日	第14回日本看護研究学会総会 －プログラム及び内容要旨－		
	3号	1988年9月30日	1988年9月30日		8名	草刈　淳子
	4号	1988年12月10日	1988年12月20日			草刈　淳子
12巻	1号	1989年2月20日	1989年3月20日		8名	草刈　淳子
	2号	1989年5月20日	1989年6月20日	新理事任期：昭和64年1月1日～平成3年12月31日	4名	内海　　滉
	臨時増刊号	1989年6月25日	1989年7月1日	第15回日本看護研究学会総会 －プログラム及び内容要旨－		
	3号	1989年8月20日	1989年9月20日		4名	内海　　滉
	4号	1989年11月20日	1989年12月20日	川上澄先生逝去（平成元年10月8日）		内海　　滉
13巻	1号	1990年2月20日	1990年3月20日		4名	内海　　滉
	2号	1990年5月20日	1990年6月20日			内海　　滉
	臨時増刊号	1990年6月25日	1990年7月1日	第16回日本看護研究学会総会 －プログラム及び内容要旨－		
	3号	1990年8月20日	1990年9月20日		4名	内海　　滉
	4号	1990年11月20日	1990年12月20日			内海　　滉
14巻	1号	1991年2月20日	1991年3月20日	査読委員名簿掲載（117ページ）	4名	内海　　滉
	2号	1991年5月20日	1991年6月20日	発行責任者変更		内海　　滉
	臨時増刊号	1991年6月25日	1991年7月1日	第17回日本看護研究学会総会 －プログラム及び内容要旨－		
	3号	1991年8月20日	1991年9月20日		4名	内海　　滉
	4号	1991年11月20日	1991年12月20日			内海　　滉
15巻	1号	1992年2月20日	1992年3月20日	新理事任期：平成4年1月1日～平成6年12月31日	7名	内海　　滉
	2号	1992年5月20日	1992年6月20日			内海　　滉
	臨時増刊号	1992年6月25日	1992年7月1日	第18回日本看護研究学会総会 －プログラム及び内容要旨－		
	3号	1992年8月20日	1992年9月20日	会告（2）理事長決定　金川克子先生	7名	内海　　滉
	4号	1992年11月20日	1992年12月20日			内海　　滉
16巻	1号	1993年2月20日	1993年3月20日	査読委員名簿掲載	7名	内海　　滉
	2号	1993年5月20日	1993年6月20日			内海　　滉
	臨時増刊号	1993年6月25日	1993年6月30日	第19回日本看護研究学会総会 －プログラム及び内容要旨－		
	3号	1993年8月20日	1993年9月20日	山元重光先生逝去 （平成5年8月16日）	7名	内海　　滉
	4号	1993年11月20日	1993年12月20日			内海　　滉

副編集委員長	編　集　委　員							発行責任者	巻
	内輪　進一	川上　　澄	木村　宏子	木場　冨喜	佐々木光雄	前原　澄子	宮崎　和子	松岡　淳夫	10巻
	内輪　進一	川上　　澄	木村　宏子	木場　冨喜	佐々木光雄	前原　澄子	宮崎　和子		
	内輪　進一	川上　　澄	木村　宏子	木場　冨喜	佐々木光雄	前原　澄子	宮崎　和子		
	内輪　進一	川上　　澄	木村　宏子	木場　冨喜	佐々木光雄	前原　澄子	宮崎　和子		
	内輪　進一	川上　　澄	木村　宏子	木場　冨喜	佐々木光雄	前原　澄子	宮崎　和子	松岡　淳夫	11巻
	内輪　進一	川上　　澄	木村　宏子	木場　冨喜	佐々木光雄	前原　澄子	宮崎　和子		
	内輪　進一	川上　　澄	木村　宏子	木場　冨喜	佐々木光雄	前原　澄子	宮崎　和子		
	内輪　進一	川上　　澄	木村　宏子	木場　冨喜	佐々木光雄	前原　澄子	宮崎　和子	松岡　淳夫	12巻
	草刈　淳子	早川　和生	成田　栄子						
	草刈　淳子	早川　和生	成田　栄子						
	草刈　淳子	早川　和生	成田　栄子						
	草刈　淳子	早川　和生	成田　栄子					松岡　淳夫	13巻
	草刈　淳子	早川　和生	成田　栄子						
	草刈　淳子	早川　和生	成田　栄子						
	草刈　淳子	早川　和生	成田　栄子						
	草刈　淳子	早川　和生	成田　栄子					松岡　淳夫	14巻
	草刈　淳子	早川　和生	成田　栄子					内海　　滉	
	草刈　淳子	早川　和生	成田　栄子						
	草刈　淳子	早川　和生	成田　栄子						
	池田　明子	大名門裕子	玄田　公子	木場　冨喜	野島　良子	山口　桂子		土屋　尚義	15巻
	池田　明子	大名門裕子	玄田　公子	木場　冨喜	野島　良子	山口　桂子			
	池田　明子	大名門裕子	玄田　公子	木場　冨喜	野島　良子	山口　桂子			
	池田　明子	大名門裕子	玄田　公子	木場　冨喜	野島　良子	山口　桂子			
	池田　明子	大名門裕子	玄田　公子	木場　冨喜	野島　良子	山口　桂子		土屋　尚義	16巻
	池田　明子	大名門裕子	玄田　公子	木場　冨喜	野島　良子	山口　桂子			
	池田　明子	大名門裕子	玄田　公子	木場　冨喜	野島　良子	山口　桂子			
	池田　明子	大名門裕子	玄田　公子	木場　冨喜	野島　良子	山口　桂子			

巻	号	印刷年月日	発行年月日		編集委員人数	編集委員長
17巻	1号	1994年2月20日	1994年3月20日	会告（1）第16期学術会議会員に登録	7名	内海　滉
	2号	1994年5月20日	1994年6月20日			内海　滉
	臨時増刊号	1994年6月24日	1994年6月29日	第20回日本看護研究学会総会 －プログラム及び内容要旨－		
	3号	1994年8月20日	1994年9月20日		7名	内海　滉
	4号	1994年11月20日	1994年12月20日			内海　滉
18巻	1号	1995年2月20日	1995年3月20日		6名	玄田　公子
	2号	1995年5月20日	1995年6月20日	理事長 伊藤暁子 （平成7年4月1日～平成10年3月31日）		玄田　公子
	臨時増刊号	1995年6月20日	1995年6月25日	第21回日本看護研究学会学術集会 －プログラム及び内容要旨－		
	3号	1995年8月20日	1995年9月20日		6名	玄田　公子
	4号	1995年11月20日	1995年12月20日			玄田　公子
19巻	1号	1996年2月20日	1996年3月20日	査読委員名簿掲載（86ページ）	6名	玄田　公子
	2号	1996年5月20日	1996年6月20日			玄田　公子
	臨時増刊号	1996年6月20日	1996年6月27日	第22回日本看護研究学会学術集会 －プログラム及び内容要旨－		
	3号	1996年8月20日	1996年9月20日	土屋尚義先生逝去（平成8年9月4日）	6名	玄田　公子
	4号	1996年11月20日	1996年12月20日			玄田　公子
20巻	1号	1997年2月20日	1997年3月20日	査読委員名簿掲載（82ページ）	6名	玄田　公子
	2号	1997年5月20日	1997年6月20日	成田栄子先生逝去（平成9年4月5日）		玄田　公子
	3号	1997年6月20日	1997年6月24日	第23回日本看護研究学会学術集会 －プログラム及び内容要旨－		玄田　公子
	4号	1997年8月20日	1997年9月20日			玄田　公子
	5号	1997年11月20日	1997年12月20日			玄田　公子
	特別号	1998年3月20日	1998年3月20日	学会設立20周年記念号		玄田　公子
21巻	1号	1998年2月20日	1998年3月20日	査読委員名簿掲載（58ページ）	6名	玄田　公子
	2号	1998年5月20日	1998年6月20日	理事長 草刈淳子 （平成10年4年1日～平成13年3月31日）	9名	山口　桂子
	3号	1998年6月20日	1998年6月20日	第24回日本看護研究学会学術集会 －プログラム及び内容要旨－		山口　桂子
	4号	1998年8月20日	1998年9月20日			山口　桂子
	5号	1998年11月20日	1998年12月20日	原著目録・原著者索引・事項索引　掲載		山口　桂子
22巻	1号	1999年2月20日	1999年3月20日	査読委員名簿掲載	9名	山口　桂子
	2号	1999年5月20日	1999年6月20日			山口　桂子
	3号	1999年6月20日	1999年6月30日	第25回日本看護研究学会学術集会 －プログラム及び内容要旨－		山口　桂子
	4号	1999年8月20日	1999年9月20日			山口　桂子
	5号	1999年11月20日	1999年12月20日	原著目録・原著者索引・事項索引　掲載		山口　桂子
23巻	1号	2000年2月20日	2000年3月20日	査読委員名簿掲載	9名	山口　桂子
	2号	2000年5月20日	2000年6月20日			山口　桂子
	3号	2000年6月17日	2000年6月27日	第26回日本看護研究学会学術集会 －プログラム及び内容要旨－		山口　桂子
	4号	2000年8月20日	2000年9月20日			山口　桂子
	5号	2000年11月20日	2000年12月20日	原著目録・原著者索引・事項索引　掲載		山口　桂子

副編集委員長	編　集　委　員							発行責任者	巻
	池田　明子	大名門裕子	玄田　公子	木場　冨喜	野島　良子	山口　桂子		土屋　尚義	17巻
	池田　明子	大名門裕子	玄田　公子	木場　冨喜	野島　良子	山口　桂子			
	池田　明子	大名門裕子	玄田　公子	木場　冨喜	野島　良子	山口　桂子			
	池田　明子	大名門裕子	玄田　公子	木場　冨喜	野島　良子	山口　桂子			
	石井　トク	内海　　滉	木村　宏子	近田　敬子	山口　桂子			伊藤　暁子	18巻
	石井　トク	内海　　滉	木村　宏子	近田　敬子	山口　桂子				
								伊藤　暁子	18巻
	石井　トク	内海　　滉	木村　宏子	近田　敬子	山口　桂子				
	石井　トク	内海　　滉	木村　宏子	近田　敬子	山口　桂子				
	石井　トク	内海　　滉	木村　宏子	近田　敬子	山口　桂子			伊藤　暁子	19巻
	石井　トク	内海　　滉	木村　宏子	近田　敬子	山口　桂子				
	石井　トク	内海　　滉	木村　宏子	近田　敬子	山口　桂子				
	石井　トク	内海　　滉	木村　宏子	近田　敬子	山口　桂子				
	石井　トク	内海　　滉	木村　宏子	近田　敬子	山口　桂子			伊藤　暁子	20巻
	石井　トク	内海　　滉	木村　宏子	近田　敬子	山口　桂子				
	石井　トク	内海　　滉	木村　宏子	近田　敬子	山口　桂子				
	石井　トク	内海　　滉	木村　宏子	近田　敬子	山口　桂子				
	石井　トク	内海　　滉	木村　宏子	近田　敬子	山口　桂子				
	石井　トク	内海　　滉	木村　宏子	近田　敬子	山口　桂子			伊藤　暁子	21巻
川島みどり	石井　トク	泉　キヨ子	金川　克子	紙屋　克子	河合千恵子	川口　孝泰	近田　敬子	草刈　淳子	
川島みどり	石井　トク	泉　キヨ子	金川　克子	紙屋　克子	河合千恵子	川口　孝泰	近田　敬子		
川島みどり	石井　トク	泉　キヨ子	金川　克子	紙屋　克子	河合千恵子	川口　孝泰	近田　敬子		
川島みどり	石井　トク	泉　キヨ子	金川　克子	紙屋　克子	河合千恵子	川口　孝泰	近田　敬子		
川島みどり	石井　トク	泉　キヨ子	金川　克子	紙屋　克子	河合千恵子	川口　孝泰	近田　敬子	草刈　淳子	22巻
川島みどり	石井　トク	泉　キヨ子	金川　克子	紙屋　克子	河合千恵子	川口　孝泰	近田　敬子		
川島みどり	石井　トク	泉　キヨ子	金川　克子	紙屋　克子	河合千恵子	川口　孝泰	近田　敬子		
川島みどり	石井　トク	泉　キヨ子	金川　克子	紙屋　克子	河合千恵子	川口　孝泰	近田　敬子		
川島みどり	石井　トク	泉　キヨ子	金川　克子	紙屋　克子	河合千恵子	川口　孝泰	近田　敬子		
川島みどり	石井　トク	泉　キヨ子	金川　克子	紙屋　克子	河合千恵子	川口　孝泰	近田　敬子	草刈　淳子	23巻
川島みどり	石井　トク	泉　キヨ子	金川　克子	紙屋　克子	河合千恵子	川口　孝泰	近田　敬子		
川島みどり	石井　トク	泉　キヨ子	金川　克子	紙屋　克子	河合千恵子	川口　孝泰	近田　敬子		
川島みどり	石井　トク	泉　キヨ子	金川　克子	紙屋　克子	河合千恵子	川口　孝泰	近田　敬子		

巻	号	印刷年月日	発行年月日		編集委員人数	編集委員長
24巻	1号	2001年2月20日	2001年3月20日	査読委員名簿掲載	9名	山口　桂子
	2号	2001年5月20日	2001年6月20日	理事長 川村佐和子 （平成13年4月1日～平成16年3月31日）		内布　敦子
	3号	2001年5月27日	2001年6月27日	第27回日本看護研究学会学術集会 －プログラム及び内容要旨－		内布　敦子
	4号	2001年8月20日	2001年9月20日			内布　敦子
	5号	2001年11月20日	2001年12月20日	原著目録・原著者索引・事項索引　掲載		内布　敦子
25巻	1号	2002年2月20日	2002年3月20日		9名	内布　敦子
	2号	2002年5月20日	2002年6月20日			内布　敦子
	3号	2002年6月8日	2002年7月8日	第28回日本看護研究学会学術集会 －プログラム及び内容要旨－		内布　敦子
	4号	2002年8月20日	2002年9月20日			内布　敦子
	5号	2002年11月20日	2002年12月20日	原著目録・原著者索引・事項索引　掲載		内布　敦子
26巻	1号	2003年3月20日	2003年4月20日	金井和子先生逝去（平成14年10月7日）	9名	内布　敦子
	2号	2003年5月20日	2003年6月20日			内布　敦子
	3号	2003年5月24日	2003年6月24日	第29回日本看護研究学会学術集会 －プログラム及び内容要旨－		内布　敦子
	4号	2003年8月20日	2003年9月20日	佐々木光雄先生逝去（平成15年7月15日）		内布　敦子
	5号	2003年11月20日	2003年12月20日	原著目録・原著者索引・事項索引　掲載		内布　敦子
27巻	1号	2004年3月20日	2004年4月20日	学会誌の大きさをA4判に変更 査読委員名簿掲載	9名	内布　敦子
	2号	2004年5月20日	2004年6月20日	理事長 山口桂子 （平成16年4月1日～平成19年3月31日）	7名	川口　孝泰
	3号	2004年5月29日	2004年6月29日	第30回日本看護研究学会学術集会 －プログラム及び内容要旨－		川口　孝泰
	4号	2004年9月20日	2004年9月20日			川口　孝泰
	5号	2004年11月20日	2004年12月20日	原著目録・原著者索引・事項索引　掲載		川口　孝泰
28巻	1号	2005年3月20日	2005年4月20日		7名	川口　孝泰
	2号	2005年5月20日	2005年6月20日			川口　孝泰
	3号	2005年5月21日	2005年6月21日	第31回日本看護研究学会学術集会 －プログラム及び内容要旨－		川口　孝泰
	4号	2005年8月20日	2005年9月20日			川口　孝泰
	5号	2005年11月20日	2005年12月20日	原著目録・原著者索引・事項索引　掲載		川口　孝泰
29巻	1号	2006年3月20日	2006年4月20日	表紙変更	7名	川口　孝泰
	2号	2006年5月20日	2006年6月20日	会告（8）学会誌発行30周年記念事業実行委員会		川口　孝泰
	3号	2006年6月24日	2006年7月24日	第32回日本看護研究学会学術集会 －プログラム及び内容要旨－		川口　孝泰
	4号	2006年8月20日	2006年9月20日			川口　孝泰
	5号	2006年12月20日	2006年12月20日	原著目録・原著者索引・事項索引　掲載		川口　孝泰
30巻	1号	2007年4月20日	2007年4月20日	査読委員名簿掲載	7名	川口　孝泰
	2号	2007年6月20日	2007年6月20日	理事長 山口桂子 （平成19年4月1日～平成22年3月31日）		川口　孝泰
	3号	2007年6月28日	2007年6月28日	第33回日本看護研究学会学術集会 －プログラム及び内容要旨－		川口　孝泰
	4号	2007年9月20日	2007年9月20日			川口　孝泰
	5号	2007年12月20日	2007年12月20日	原著目録・原著者索引・事項索引　掲載		川口　孝泰

副編集委員長	編集委員							発行責任者	巻
川島みどり	石井　トク	泉　キヨ子	金川　克子	紙屋　克子	河合千恵子	川口　孝泰	近田　敬子	草刈　淳子	24巻
玄田　公子	深井喜代子	東　玲子	成田　伸	平河　勝美	川口　孝泰	横手　芳恵	若村　智子	川村佐和子	
玄田　公子	深井喜代子	東　玲子	成田　伸	平河　勝美	川口　孝泰	横手　芳恵	若村　智子		
玄田　公子	深井喜代子	東　玲子	成田　伸	平河　勝美	川口　孝泰	横手　芳恵	若村　智子		
玄田　公子	深井喜代子	東　玲子	成田　伸	平河　勝美	川口　孝泰	横手　芳恵	若村　智子		
玄田　公子	深井喜代子	東　玲子	成田　伸	平河　勝美	川口　孝泰	横手　芳恵	若村　智子	川村佐和子	25巻
玄田　公子	深井喜代子	東　玲子	成田　伸	平河　勝美	川口　孝泰	横手　芳恵	若村　智子		
玄田　公子	深井喜代子	東　玲子	成田　伸	平河　勝美	川口　孝泰	横手　芳恵	若村　智子		
玄田　公子	深井喜代子	東　玲子	成田　伸	平河　勝美	川口　孝泰	横手　芳恵	若村　智子		
玄田　公子	深井喜代子	東　玲子	成田　伸	平河　勝美	川口　孝泰	横手　芳恵	若村　智子	川村佐和子	26巻
玄田　公子	深井喜代子	東　玲子	成田　伸	平河　勝美	川口　孝泰	横手　芳恵	若村　智子		
玄田　公子	深井喜代子	東　玲子	成田　伸	平河　勝美	川口　孝泰	横手　芳恵	若村　智子		
玄田　公子	深井喜代子	東　玲子	成田　伸	平河　勝美	川口　孝泰	横手　芳恵	若村　智子		
玄田　公子	深井喜代子	東　玲子	成田　伸	平河　勝美	川口　孝泰	横手　芳恵	若村　智子	川村佐和子	27巻
	黒田　裕子	中木　高夫	浅野みどり	金城　祥教	櫻井　利江	星野　明子		山口　桂子	
	黒田　裕子	中木　高夫	浅野みどり	金城　祥教	櫻井　利江	星野　明子			
	黒田　裕子	中木　高夫	浅野みどり	金城　祥教	櫻井　利江	星野　明子			
	黒田　裕子	中木　高夫	浅野みどり	金城　祥教	櫻井　利江	星野　明子			
	黒田　裕子	中木　高夫	浅野みどり	金城　祥教	櫻井　利江	星野　明子		山口　桂子	28巻
	黒田　裕子	中木　高夫	浅野みどり	金城　祥教	櫻井　利江	星野　明子			
	黒田　裕子	中木　高夫	浅野みどり	金城　祥教	櫻井　利江	星野　明子			
	黒田　裕子	中木　高夫	浅野みどり	金城　祥教	櫻井　利江	星野　明子			
	黒田　裕子	中木　高夫	浅野みどり	金城　祥教	櫻井　利江	星野　明子		山口　桂子	29巻
	黒田　裕子	中木　高夫	浅野みどり	金城　祥教	櫻井　利江	星野　明子			
	黒田　裕子	中木　高夫	浅野みどり	金城　祥教	櫻井　利江	星野　明子			
	黒田　裕子	中木　高夫	浅野みどり	金城　祥教	櫻井　利江	星野　明子			
	黒田　裕子	中木　高夫	浅野みどり	金城　祥教	櫻井　利江	星野　明子		山口　桂子	30巻
	黒田　裕子	中木　高夫	浅野みどり	金城　祥教	櫻井　利江	星野　明子			
	川西千恵美	山勢　博彰	平元　泉	森　千鶴	佐々木綾子	多田　敏子			
	川西千恵美	山勢　博彰	平元　泉	森　千鶴	佐々木綾子	多田　敏子			
	川西千恵美	山勢　博彰	平元　泉	森　千鶴	佐々木綾子	多田　敏子			

学術集会

第１回　四大学 看護学研究会

会　長：福　井　公　明
日　時：1975年９月29日（月）
開催地：徳島県徳島市
会　場：徳島大学《非公開》
シンポジウム：高等学校衛生看護科の諸問題

第２回　四大学 看護学研究会

会　長：吉　田　時　子
日　時：1976年９月29日（水）
開催地：青森県弘前市
会　場：弘前大学《非公開》
シンポジウム：大学における看護教育の検討

第３回　四大学 看護学研究会

会　長：山　元　重　光
日　時：1977年９月29日（木）
開催地：熊本県熊本市
会　場：熊本共済会館
会長講演：看護研究について
シンポジウム：大学における看護学教育の検討－特にカリキュラムについて－

第４回　四大学 看護学研究会

会　長：村　越　康　一
日　時：1978年９月24日（日）
開催地：千葉県千葉市
会　場：千葉大学西千葉キャンパス

会長講演：腎疾患の食事療法
特別講演・招聘講演：「看護学の性格」 芝田不二男（高知女子大学）
シンポジウム：大学における看護学教育の検討－地域看護について－
学会誌巻数：１巻

第５回　四大学 看護学研究会

会　長：村　田　　栄
日　時：1979年９月24日（月）
開催地：徳島県徳島市
会　場：徳島大学常三島キャンパス
会長講演：看護学教育について－回顧十余年－
特別講演・招聘講演：「看護心理学の課題」 岡堂　哲雄（文教大学・人文学部）
シンポジウム：大学における看護学教育の検討－大学における看護研究－
学会誌巻数：２巻

第６回　四大学 看護学研究会

会　長：川　上　　澄
日　時：1980年９月21日（日）
開催地：青森県弘前市
会　場：弘前大学医学部基礎校舎内・医学部講堂
会長講演：看護に必要な心身医学
特別講演・招聘講演：「看護分野における研究に望まれること」
品川　信良（弘前大医学部産科婦人科学教授）
シンポジウム：大学における看護学教育の検討－看護基礎学と臨床看護－
学会誌巻数：３巻

第７回　四大学 看護学研究会

会　長：佐々木　光　雄
日　時：1981年９月27日（日）
開催地：熊本県熊本市
会　場：熊本産業文化会館６階
会長講演：看護学の中の基礎医学
特別講演・招聘講演：－
シンポジウム：大学における看護学教育の検討－実験看護学をめぐって－
学会誌巻数：４巻

第８回　日本看護研究学会 総会

会　長：石　川　稔　生
日　時：1982年５月９日（日）
開催地：千葉県千葉市

会　場：千葉大学亥鼻キャンパス
会長講演：薬物依存の薬理学的研究
特別講演・招聘講演：「大学における教育と研究」　松本　　胖（千葉大学名誉教授）
シンポジウム：－
学会誌巻数：５巻

第９回　日本看護研究学会 総会

会　長：松　岡　淳　夫
日　時：1983年５月28・29日（土・日）
開催地：千葉県千葉市
会　場：千葉大学西千葉キャンパス
会長講演：看護管理学とその周辺
特別講演・招聘講演：「Stressors Identification and Coping Patterns in Persons with Epilepsy」Prof. M. Snyder, Ph.D
（Minnesota Univ. U.S.A.）
「これからの看護開発」　宗像　恒次（国立精神衛生研究所）
シンポジウム：１．生活援助－行動開発の問題点と対策－
２．看護継続教育における諸問題
学会誌巻数：６巻

第10回　日本看護研究学会 総会

会　長：木　場　冨　喜
日　時：1984年７月23・24日（月・火）
開催地：熊本県熊本市
会　場：熊本郵便貯金会館
会長講演：学会10年の歩みと今後の課題
特別講演・招聘講演：「Decision Making During Planning by Expert and Novice Nurses」Sheila Corcoran Ph.D., R.N.
（Associate Professor School of Nursing University of Minnesota, U.S.A.）
「これからの生命観と看護」　柏木　哲夫（淀川キリスト教病院）
シンポジウム：21世紀の看護を考える
学会誌巻数：７巻

第11回　日本看護研究学会 総会

会　長：伊　藤　暁　子
日　時：1985年９月７・８日（土・日）
開催地：東京都千代田区
会　場：国立教育会館
会長講演：看護学教育と研究－看護学教育に関する研究への模索－
特別講演・招聘講演：「Nursing Research Methods : Towards a Clinical Science」Diane W.Scott, RN,Ph.D. Nurse
Scientist, Department of Nursing Research, Memorial Sloan-Kettering Cancer Center, New York
「日本と日本人」　梅原　　猛（京都市立芸術大学）

シンポジウム：看護学における研究方法の開発－人間を対象とする研究の可能性－
学会誌巻数：８巻

第12回　日本看護研究学会 総会

会　長：福　島　松　郎
日　時：1986年７月30・31日（水・木）
開催地：青森県弘前市
会　場：弘前文化センター
会長講演：基礎研究と臨床研究－自験研究を省みて－
特別講演・招聘講演：「Techniques for Teaching Nursing Research in America」Elizabeth A. Mottet（Univ. of California, San Diego Medical Center）
「欧米で実践されている心身医学」　川上　　澄（弘前大学教育学部）
シンポジウム：癌患者の看護における看護教育
学会誌巻数：９巻

第13回　日本看護研究学会 総会

会　長：前　原　澄　子
日　時：1987年８月７・８日（金・土）
開催地：東京都千代田区
会　場：日本都市センター
会長講演：学際的研究への志向
特別講演・招聘講演：「激動の社会と医療の行方」　大谷　藤郎（社会福祉医療事業団）
シンポジウム：行動をみる
学会誌巻数：10巻

第14回　日本看護研究学会 総会

会　長：土　屋　尚　義
日　時：1988年７月１・２日（金・土）
開催地：千葉県千葉市
会　場：千葉県文化会館
会長講演：看護研究雑感
特別講演・招聘講演：「Home Health Care Service : An Alternative Solution In Long Term Care」Jean Nohara, R. N., B.S.（Assistant Director St. Francis Hospital Hawaii, U.S.A.）
「日本人と木の文化－顕微鏡で見た文化史－」　小原　二郎（千葉工業大学）
シンポジウム：日常生活援助技術の確立をめざして－食の援助を例として－
学会誌巻数：11巻

第15回　日本看護研究学会 総会

会　長：内　海　　滉
日　時：1989年８月26・27日（土・日）

開催地：東京都千代田区
会　場：国立教育会館
会長講演：学際的な看護学の確立－真の学際の意味するもの－
特別講演・招聘講演：－
シンポジウム：再び看護継続教育をめぐる諸問題
学会誌巻数：12巻

第16回　日本看護研究学会 総会

会　長：玄　田　公　子
日　時：1990年８月４・５日（土・日）
開催地：京都府京都市
会　場：京都会館第二ホール、京都伝統産業会館
メインテーマ：看護診断
会長講演：看護教育：過去・現在・未来
特別講演・招聘講演：「Theory and Research for Clinical Knowledge Development」Boston College Professor/Nurse Theorist Callista Roy
「伝統を越えて」　茂山千之丞（狂言役者・演出家）
シンポジウム：１.「看護」の目指すものを獲得するために
２.「看護診断」とそれが看護に与える影響
学会誌巻数：13巻

第17回　日本看護研究学会 総会

会　長：宮　崎　和　子
日　時：1991年７月27・28日（土・日）
開催地：千葉県千葉市
会　場：日本コンベンションセンター（幕張メッセ）国際会議場
メインテーマ：看護の質の評価と看護記録
会長講演：看護記録改善の動向と展望
特別講演・招聘講演：「Trends and Issues of Qualitative (Evaluative) Research of Nursing in the United States」Faye G. Abdellah, RN., Ed.D., Sc.D., FAAN./ Former Deputy Surgeon General U.S. Public Health Service
「旅があなたに与えるもの」　杉田　房子（旅行作家）
シンポジウム：１．看護ケアに役立つ記録
２．看護ケアの質の測定
学会誌巻数：14巻

第18回　日本看護研究学会 総会

会　長：木　村　宏　子
日　時：1992年８月１・２日（土・日）
開催地：青森県弘前市
会　場：ホテルニューキャッスル

メインテーマ：高齢化社会と看護
会長講演：看護に生きる－臨床と教育の中から－
特別講演・招聘講演：「これからの看護と看護教育などに望みたいこと」 品川　信良（弘前大学名誉教授）
シンポジウム：高齢化社会が求める看護の専門性－専門性発揮のための課題－
学会誌巻数：15巻

第19回　日本看護研究学会 総会

会　長：成　田　栄　子
日　時：1993年７月30・31日（金・土）
開催地：熊本県熊本市
会　場：熊本市民会館
メインテーマ：看護とリーダーシップ
会長講演：地域における看護活動の視点
特別講演・招聘講演：「人の心を看る－人生常に青春－」 鈴木　健二（熊本県立劇場館長）
シンポジウム：看護とリ－ダ－シップ－看護の新たな展開を考える－
学会誌巻数：16巻

第20回　日本看護研究学会 総会

会　長：吉　武　香代子
日　時：1994年７月29・30日（金・土）
開催地：東京都府中市・調布市
会　場：府中の森芸術劇場・東京慈恵会医科大学医学部看護学科
メインテーマ：看護の役割拡大－看護の発展の方向をさぐる
会長講演：看護の専門分化を求めて
特別講演・招聘講演：「看護への期待」 阿部　正和（学校法人慈恵大学　理事長）
シンポジウム：看護の役割拡大への模索
学会誌巻数：17巻

第21回　日本看護研究学会 学術集会

会　長：山　田　要　子
日　時：1995年７月25・26日（火・水）
開催地：北海道札幌市
会　場：札幌市教育文化会館
メインテーマ：受け手に開かれた医療を保証するために
会長講演：受け手のための看護研究を求めて
特別講演・招聘講演：「流氷の命－流氷の下で育まれるもの－」 青田　昌秋（北海道大学低温科学研究所附属流氷研究施設長　教授）
シンポジウム：受け手に開かれた医療を保証するには
学会誌巻数：18巻

第22回　日本看護研究学会 学術集会

会　長：野　島　良　子
日　時：1996年７月27・28日（土・日）
開催地：広島県広島市
会　場：広島国際会議場
メインテーマ：生活者の視点から看護を再考する“Artisticに，Academicに，そしてAt homeに”
会長講演：看護を実践することと，看護を思索することと
特別講演・招聘講演：「A Longitudinal Perspective on Psychosocial Adjustment to Chronic Conditions」Marlene Hanson Frost（Mayo Medical Foundation）
「Nursing Diagnosis and Clinical Implication for Selected Chronic Conditions」Marlene Hanson Frost（Mayo Medical Foundation）
シンポジウム：生活者の視点から看護を再考する
学会誌巻数：19巻

第23回　日本看護研究学会 学術集会

会　長：河　合　千恵子
日　時：1997年７月24・25日（木・金）
開催地：福岡県久留米市
会　場：久留米市石橋文化センター
メインテーマ：看護とハイテクノロジー
会長講演：私の技術教育論
特別講演・招聘講演：「Nursing Care in A High Technology Era」　Susie Kim, RN, ONSc. Ewha Womans University
シンポジウム：QOLをたかめるハイテクノロジー
学会誌巻数：20巻

第24回　日本看護研究学会 学術集会

会　長：大　串　靖　子
日　時：1998年７月30・31日（木・金）
開催地：青森県弘前市
会　場：弘前市民会館・弘前市文化センター
メインテーマ：看護研究における臨床と教育の連携
会長講演：看護研究における支援体制の模索
特別講演・招聘講演：「豊なる縄文文化－三内丸山遺跡」　岡田　康博（青森県教育庁文化課三内丸山遺跡対策室）
シンポジウム：臨床における看護研究の教育的サポート
学会誌巻数：21巻

第25回　日本看護研究学会 学術集会

会　長：田　島　桂　子
日　時：1999年７月30～８月１日（金～日）

開催地：静岡県浜松市
会　場：アクトシティ浜松　大ホール・コングレスセンター
メインテーマ：時代を拓く看護の力－自立・変革・連携
会長講演：次代の看護を拓く看護職者の教育
特別講演・招聘講演：「Nursing Education in The 21st Century for the United States : Health Care and Professional Factors」 Ada Sue Hinshaw（University of Michigan, School of Nursing）
「経済学者が見た日本の医療－中央医療審議会委員での経験から」 伊東　光晴（京都大学名誉教授）
シンポジウム：１．看護教育の改革－自国の特色を生かした教育課程の構築と国際交流
２．医療・看護の変革に向けて問われるもの
学会誌巻数：22巻

第26回　日本看護研究学会 学術集会

会　長：草　刈　淳　子
日　時：2000年７月27・28日（木・金）
開催地：千葉県千葉市
会　場：日本コンベンションセンター（幕張メッセ）国際会議場
メインテーマ：新たな世界を切り拓く看護職－ Three Ways to Growth
会長講演：看護管理50年の歩みとこれからの方向
特別講演・招聘講演：「Hospital Restructuring's Impact on Outcomes（HRIO）」 Louanne Stratton, PhD, RN
「創造する日本の女性」 若桑みどり（千葉大学文学部）
シンポジウム：21世紀の看護を担うための責任ある実践－拡大する看護の役割と責任－
学会誌巻数：23巻

第27回　日本看護研究学会 学術集会

会　長：泉　　キヨ子
日　時：2001年７月27・28日（金・土）
開催地：石川県金沢市
会　場：金沢市観光会館、中央公民館、エルフ金沢、石川県社会教育センター、石川県社会福祉会館、MROホール
メインテーマ：新しい時代が問う看護研究の方向　Directions of Nursing Research in the 21st Century
会長講演：人間の持てる力を引き出すリハビリテーション看護学の追究
特別講演・招聘講演：「臨床現場に活かせる看護研究」 Katsuko Tanaka, ARNP, CS, MN（Veterans Hospital Addictions Treatment Center）
「看護学の到達点と新世紀の課題」 川島みどり（健和会臨床看護学研究所）
シンポジウム：１．看護現象の着眼と研究の方法－質的研究を中心に－
２．看護におけるエビデンス
学会誌巻数：24巻

第28回　日本看護研究学会 学術集会

会　長：池　田　明　子
日　時：2002年８月８・９日（木・金）
開催地：神奈川県横浜市
会　場：パシフィコ横浜（国立大ホール・国際会議センター）
メインテーマ：Linkage　リンケージ～看護実践の拠りどころとなる研究～
会長講演：看護実践・教育における対人関係論の活用
特別講演・招聘講演：「脳化社会とエコロジー」　養老　孟司（北里大学大学院）
シンポジウム：実践・教育・研究のリンケージ
学会誌巻数：25巻

第29回　日本看護研究学会 学術集会

会　長：早　川　和　生
日　時：2003年７月24・25日（木・金）
開催地：大阪府大阪市
会　場：大阪国際会議場
メインテーマ：看護イノベーション～激動する社会を創造的に生きる～
会長講演：ヒューマンポテンシャルへの畏敬
特別講演・招聘講演：「歴史に学ぶ専門職の栄枯盛衰：変革期の社会を生きる知恵」　清水　忠彦（近畿大学名誉教授）
シンポジウム：未来を見つめるナーシング・アカデミー・21世紀ストラテジー
学会誌巻数：26巻

第30回　日本看護研究学会 学術集会

会　長：竹　尾　惠　子
日　時：2004年７月29・30日（木・金）
開催地：埼玉県さいたま市
会　場：大宮ソニックシティ
メインテーマ：看護におけるヒューマンケアの実現
会長講演：ヒューマン・ケアの看護実践への具現化
特別講演・招聘講演：「How to Educate Cardiac Nurse Specialists for Roles in Advanced Cardiovascular Nursing Practice」　Erika S. Froelicher（University of California, San Francisco, U.S.A.）
シンポジウム：１．EBNを実践する鍵　－つくる・さがす・つかう－
２．看護教育における国際協力
学会誌巻数：27巻

第31回　日本看護研究学会 学術集会

会　長：石　垣　靖　子
日　時：2005年７月21・22日（木・金）

開催地：北海道札幌市
会　場：札幌コンベンションセンター
メインテーマ：人間として遇する医療・福祉の定着に向けて－ペーシエントからパースンへの挑戦－
会長講演：人間として遇する医療・福祉の定着に向けて
特別講演・招聘講演：「What do We Know about Uncertainly in Illness?」　Merle Mishel（University of North Carolina）
シンポジウム：１．臨床倫理委員会－その定着と看護職の役割
２．人権と尊厳を守る看護職の責務－相手を人間として尊重するということ
学会誌巻数：28巻

第32回　日本看護研究学会 学術集会

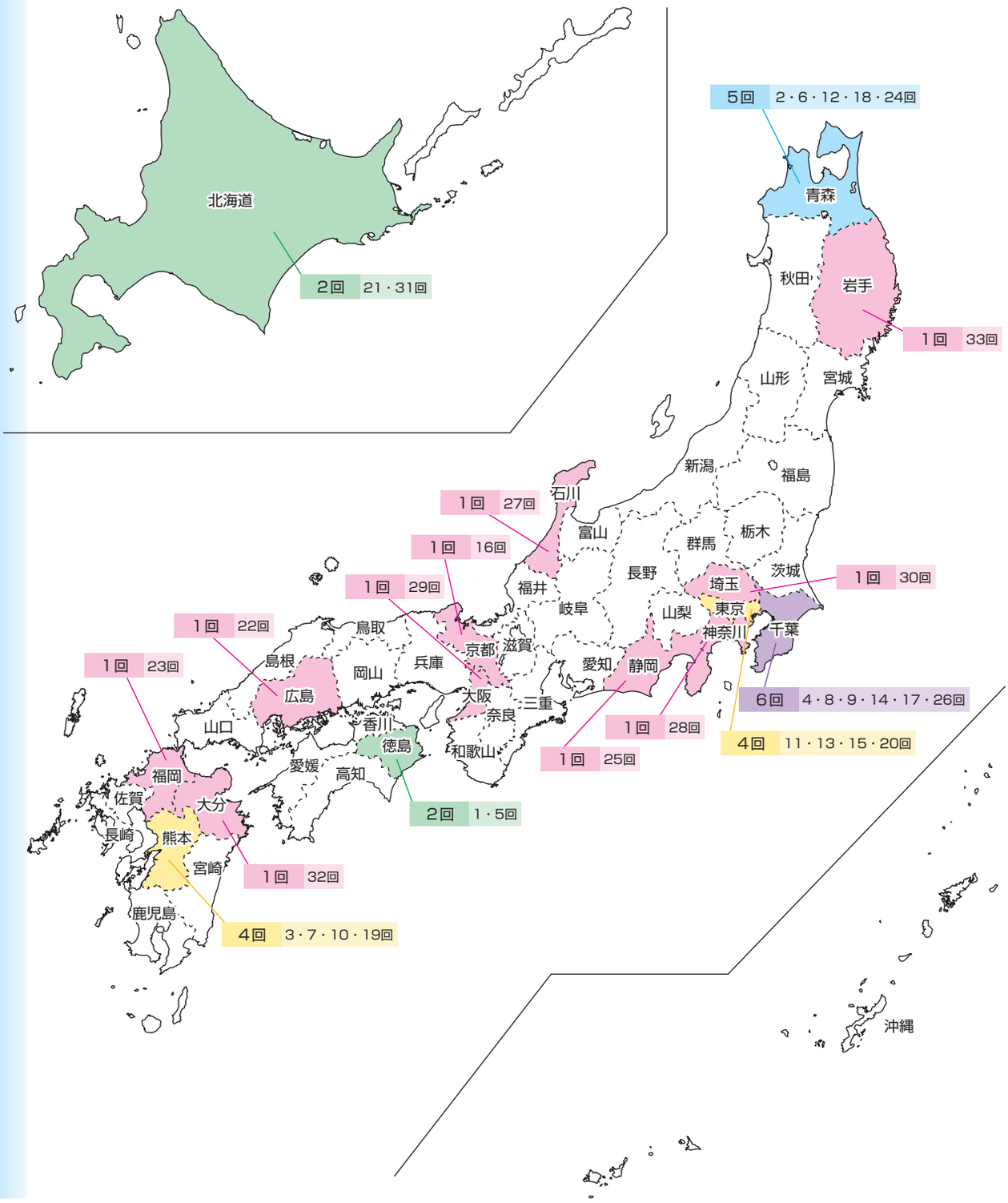
会　長：松　岡　　緑
日　時：2006年８月24・25日（木・金）
開催地：大分県大分市
会　場：別府市ビーコンプラザ（B-Con Plaza）
メインテーマ：社会資源としての看護－激動の時代，看護に求められているもの－
会長講演：「社会資源としての看護」－激動の時代，看護に求められているもの－
特別講演・招聘講演：「ベナー看護論　看護士らしくみて考えるための学び－臨床的推論とケアリング実践－」
Patricia Benner（University of California）
「もっと私をよく観て」　村田　幸子（元NHK解説委員・福祉ジャーナリスト）
「看護の質を保証する看護職の人事考課制度」　正木　義博（済生会熊本病院　副院長）
シンポジウム：１．利用者と共に歩む看護
２．看護の専門職者を育てる・育つ
学会誌巻数：29巻

第33回　日本看護研究学会 学術集会

会　長：石　井　ト　ク
日　時：2007年７月28・29日（土・日）
開催地：岩手県盛岡市
会　場：盛岡市民文化ホール（マリオス）、いわて県民情報交流センター（アイーナ）
メインテーマ：生命科学時代における知と技とこころ
会長講演：生命科学時代における看護の機能拡大
特別講演・招聘講演：「看護研究の倫理　～国際的な動向から～」　Samantha Mei-che Pang（香港理工大学健康社会科学部看護学科長）
シンポジウム：１．医療の安全と安心の確保　～医療事故防止の探究～
２．人としての生と死　～終末期医療ガイドラインをめぐって～
学会誌巻数：30巻

学会開催地（第1回～第33回）

1975年～2007年（昭和50年～平成19年）



編　集　後　記

学会誌発行30周年記念事業実行委員長　田　中　裕　二

発刊予定から大幅に遅れてしまいましたが、ここに、「日本看護研究学会雑誌発行30周年記念誌」を発刊することができました。お忙しいところ、急なお願いにも関わらず原稿のご執筆を快諾していただきました歴代の編集委員長ならびに学術集会会長の先生方には厚くお礼を申し上げます。

学会誌「日本看護研究学会雑誌」の前身「四大学看護学研究会雑誌」は、昭和53年（1978年）３月に創刊されました。そして、平成19年（2007年）には創刊30周年を迎えることとなりました。学会誌発行30周年記念のための記念誌の発行につきましては、平成18年（2006年）２月に当時の将来構想検討委員会委員長の石井トク理事から提案されました。その後、記念誌発行のために将来構想検討委員（４名）の他に、新たに３名の会員が選出され、５月に学会誌発行30周年記念事業実行委員会が７名の委員（石井トク理事を含む）で発足しました。当初の予定では、平成19年（2007年）７月に盛岡で開催されます第33回学術集会（石井トク学術集会長）の直前には完成する予定でしたが、編集作業の遅れによって発刊が大幅に遅れてしまいました。心よりお詫びを申し上げます。

本記念誌の内容は、大別して、「学会誌発行に関すること」と「学術集会の企画・運営に関すること」の２つになります。この２つは、学会活動の両輪であり、学会誌を発行するためには、学術集会を企画することは重要なことです。本誌に掲載しました本学会の今日に至るまでの活動内容について、古くからの会員の方々には、これまでの本学会の歩みを回顧していただき、また、新しい会員の方々には、本学会が設立された経緯や今日までの活動内容を知っていただきたいと思います。そして、本学会の歴史を踏まえつつ、これからの本学会の歩むべき方向性を考えていく上で本記念誌が参考になれば幸いです。

最後に、遅々として進まない編集作業を温かいまなざしで見守ってくださいました山口桂子理事長および理事会メンバーの方々、また、原稿や資料を取りまとめていただきました学会事務局の皆様に感謝致します。

平成20年３月　吉日

学会誌発行30周年記念事業実行委員会

委員長　田　中　裕　二（千葉大学看護学部）

委　員　石　井　ト　ク（日本赤十字北海道看護大学）
江　守　陽　子（筑波大学大学院人間総合科学研究科）
尾　岸　恵三子（東京女子医科大学看護学部）
中　野　正　孝（三重大学医学部看護学科）
松　田　たみ子（群馬大学医学部保健学科）
三　木　明　子（筑波大学大学院人間総合科学研究科）

日本看護研究学会雑誌 発行30周年記念誌

平成20年３月31日　発行

発　行　所　　日本看護研究学会
〒260-0856　千葉市中央区亥鼻１丁目２番10号
電話 043-221-2331
FAX 043-221-2332

発行責任者　　山　口　桂　子

印　刷　所　　㈱　正　文　社
〒260-0001　千葉市中央区都町１丁目10番６号

日本看護研究学会
Japanese Society of Nursing Research